

鳥取県米子市

一般国道9号改築予定地内遺跡調査報告書

大塔山横穴墓群



寄贈

1987

財団法人 鳥取県教育文化財団
建設省 倉吉工事事務所



『大岩山横穴墓群』正誤表

箇所		誤	正
目次	第3章	A区の調査 B区の調査 C区の調査	A区の横穴墓 B区の横穴墓 C区の横穴墓
図版目次	図版26	B区頂部不明遺構 C-1号上方不明遺構	不明遺構1 不明遺構2
P 12	7行目	『祭者國風土記逸文』	『伯耆國風土記逸文』
P 75	7行目	第二象限	第二象限
P 96	11行目	前方後方(円)墳	註3 前方後方(円)墳
	15行目	にはみられない	註4 にはみられない
P 97	挿表3 №01 久戸古墳群 遺物の図	空 墓	鉄器、耳環、玉類、須恵器
P 111	24行目	しばしば遭遇した	しばしば遭遇した

序

この調査は、一般国道9号の改築工事（米子バイパス）に伴い、昭和58年から59年にかけて当財団が発掘調査した米子市東宗像遺跡の東方約450mの大塔山に所在した横穴墓の発掘調査である。

建設省が、事業計画に基づいて鳥取県教育委員会と協議を行い、同教育委員会が試掘調査を行ったところ横穴墓の所在が確認されたため、当財団が建設省の委託を受けて急速発掘調査を行つたものである。

調査の結果、大塔山の稜線に沿って北東及び南西の急斜面に横穴墓群が発見されたが、その中の数基はとりわけ傾斜度の急な場所に築造されていたため、発掘作業上危険であり、安全対策のための足場工事を行って事故防止に万全を期するなど、困難な調査であった。

横穴墓は、6世紀後半から7世紀初頭に築造されたもので、形態は島根県出雲地方のものに近く、特に、安来市周辺のものに酷似している。

米子バイパス関連の発掘調査では、今回の大塔山を始め、陰田や東宗像でも数多くの横穴墓が調査されており、米子市周辺における横穴墓の状況がほぼ明らかになったといえよう。

これらの調査結果が、今後墓制等の学術研究資料として役立つことを期待してやまない。

おわりに、この調査に多大の御協力をいただいた地元の皆さんをはじめ、御指導いただいた方々、そのほか関係の各位に対し心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

昭和62年3月

財團法人 鳥取県教育文化財団
理事長 西尾 邑次



大塔山横穴墓群より見る大山

序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点とし、山陰の主要な都市を経て、下関市に至る西日本の重要な幹線道路であり鳥取県内では、2市、12町、3箇村を通過する県内の大動脈として、大きな役割を果しています。

建設省倉吉工事事務所は、鳥取県内的一般国道9号のうち、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。その一つに、米子市内の交通混雑の解消及び地域開発と都市機能の充分な活用を図ることを目的とした改築事業として米子バイパスの建設工事があります。

米子バイパスは、西伯郡淀江町今津の一般国道9号から分岐し、米子市街地の南部を西進し、同市陰田町内的一般国道9号に接続する延長14.3km、標準幅員25mの道路で、将来は島根県側の安来バイパスに接続する大規模なバイパス計画の一部でもあります。

この米子バイパスの事業は、昭和47年度から事業着手し、第一期供用開始区間としては、米子市宗像の一般国道181号から終点の同市陰田町までの3.5kmを第40回国民体育大会「わかとり国体」の開催に合わせて暫定2車線で昭和60年9月に供用開始いたしました。引き続き、米子市赤井手の米子インターチェンジ（一般国道9号米子バイパス、中国横断自動車道岡山米子線、一般国道431号の合流点）から、米子市宗像の現在のランプまで4.2kmを第二期供用開始区間として昭和64年度中の供用開始を目標に工事を進めているところです。

今回発掘調査を行った「大塙山横穴墓群」は、一般国道181号ランプの東に位置しており、米子バイパスが止むなく通過することになった周知の埋蔵文化財包蔵地です。「大塙山横穴墓群」の取扱いについては、鳥取県教育委員会及び米子市教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うことになりました。

発掘調査については、（財）鳥取県教育文化財団に委託し、鳥取県教育委員会の指導のもとに昭和61年4月から10月まで現地で調査が実施されました。

本書は、この発掘調査の結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財の保護に深い関心を持っていることに御理解をいただければ幸甚に存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまで、ご協力いただいた鳥取県教育委員会及び直接調査を実施していただいた（財）鳥取県教育文化財団の関係各位の御尽力に対し、深甚の感謝を表します。

昭和62年3月

建設省中国地方建設局

倉吉工事事務所長

梶 太 郎

例　言

1. 本報告書は、1986年度一般国道9号改築事業（米子バイパス建設工事）に伴う米子市長砂・観音寺地区の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本報告書に収載した大塔山横穴墓群は、新発見の遺跡の為、字名をとって命名したものである。所在地は米子市観音寺大塔山東平122-4、西平123-2、長砂町1023-1・3である。
3. 本報告書で示す標高は、建設省水準点（YBM13、11.282m）を起点とした標高値で方位は磁北を示す。
4. 本報告書に掲載の地形図は国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」を使用した。
5. 本報告書の作成は調査員の討議に基づくものである。
報告書本文については調査員が分担して執筆し、執筆担当者名は目次・文末に記載した。
挿図のうち、造構実測は調査員、補助員が分担し、浄写は主として左藤博が行った。
遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得て、調査員が行った。
造構写真は発掘担当調査員が、遺物写真是中村・松井が撮影した。
本書の編集は中原が行った。
6. 国面、スライド等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は米子市教育委員会が保管している。
7. 本横穴墓で出土した人骨については、鳥取大学医学部助教授井上貴央先生に現地指導・鑑定をお願いし、多忙のところ玉稿をいただいた。記して感謝したい。
8. 現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々に指導・助言をいただいた。

〈調査指導〉

福田 孝司、手嶋 義之、山本 清（鳥取県文化財保護審議委員）
田中 弘道、田中 精夫（鳥取県教育委員会文化課）
野田 久男、久保 機二朗、中村 徹（鳥取県埋蔵文化財センター）

〈保存処理指導〉

秋山 隆保（奈良国立文化財研究所・保存処理室）
網見 安明（鳥取県埋蔵文化財センター）

〈人骨・石材鑑定〉

井上 貴央（鳥取大学医学部解剖学第2教室助教授）

〈紗・粒度分析〉

岡田 昭明（鳥取大学教育学部助教授）

〈樹種鑑定〉

古川 郁夫（鳥取大学農学部助手）
西尾 茂（鳥取県工業試験場 木材工業科 科長）
佐藤 公彦（（　　タ　　タ　　研究員）

〈耳環金属鑑定〉

佐藤 豊（日立金屬株式会社安来工場・和鋼記念館副館長）
瀬崎 博史（（　　タ　　タ　　冶金研究所主任）

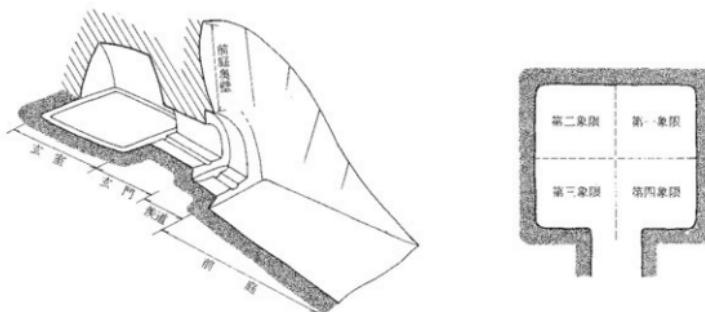
〈指導・助言〉

甘粕 健（新潟大学人文学部教授）
近藤 義郎（岡山大学人文学部教授）
水野 正好（奈良大学人文学部教授）

渡辺 貞幸 (島根大学法文学部助教授)
平田 泰 (財団法人京都市埋蔵文化財研究所)
柳沢 一男 (福岡市埋蔵文化財センター)
原 俊一 (宗像市教育委員会)
西尾 克己、柳浦 俊一 (島根県教育委員会文化課)
亀井 照人 (鳥取県立博物館学芸課長)
真田 廣幸 (倉吉博物館)
大谷 晃二 (島根大学法文学部学生)
(協 力)
小原 貴樹、杉谷 愛象、下高 瑞哉 (米子市教育委員会)
角田 徳幸 (淀江町教育委員会)
北浦 弘人、浅川 美佐子 (財団法人鳥取県教育文化財団 上福万埋蔵文化財調査事務所)
吉岡 充 (美保土建株式会社)
(地元協力)
入江 博愛 (米子市観音寺)

凡 例

1. 本報告書に収載した遺物の記述は本文末の観察表にかえている。また、遺物には観察表中の取上番号をネーミングしている。
2. 本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載したが、一部これと異なるものもある。
(遺構図・遺物出土状況図) 横穴墓構図 1/60、遺物出土状況図 1/20、1/60
不明遺構遺構図 1/40、遺物出土状況図 1/10
(遺物実測図) 須恵器・土師器(小型品)1/3、須恵器(大型品)1/4、石製品 1/2、鉄器・鉄製品 1/2及び1/4、耳環・玉類 1/1
3. 本報告書の土器実測図において、その断面は須恵器は黒塗り、土師器は白抜きとした。須恵器実測図の中で「←」は回転ヘラケズリ調整による砂粒の動きを示す。また「←」は列点文の施文方向を示す。
4. 横穴墓模式図及び各部名称は左下図の通りに、また、玄室内造物出土状況に関して玄室を四分割し右下図の通りとする。



横穴墓模式図と部位名称

目 次

序
序 文
例 言
目 次

第1章 調査の経緯		
第1節 調査に至る経緯	（中原）	1
第2節 調査の経過	（中原・西浦）	2
第3節 調査体制	（中原）	5
第2章 位置と環境		
第1節 地理的環境	（中原）	6
第2節 歴史的環境	（中原）	8
第3章 横穴墓の調査		
第1節 A区の調査	（近藤・中原・中村）	13
第2節 B区の調査	（中原・西浦・松井）	24
第3節 C区の調査	（近藤・中村・西浦・松井）	42
第4章 その他の遺構と遺物		
第1節 不明遺構と遺物	（近藤）	88
第2節 遺構外遺物	（中原）	90
第5章 考 察		
第1節 横穴墓の構造	（中原）	91
第2節 墳丘・周溝を有する横穴墓について	（中原・西浦）	95
第3節 横穴墓の築造工程	（近藤）	98
第4節 土 器	（松井）	100
第5節 鉄釘より復元される木棺について	（近藤）	104
第6節 小支群構成と被葬者の性格	（中原）	106
付 論 大塚山横穴墓群出土の人骨について	鳥取大学医学部解剖学第二教室 助教授 井上貴央	113
造物観察表		
土器観察表	（松井）	129
鉄器・鉄製品観察表	（近藤）	144
玉類観察表	（中原）	150
耳環観察表	（中原）	151
写真図版		

挿 図 目 次

挿図1	大塚山横穴墓群トレンチ配置図	1
挿図2	大塚山横穴墓群基準杭設定図	4
挿図3	大塚山横穴墓群の位置	6
挿図4	上福万遺跡出土押型文土器（文献1より）	8
挿図5	周辺遺跡分布図	9
挿図6	石州府29号墳出土獸面鏡（文献1より）	10
挿図7	觀音寺7号墳墳丘測量図（文献2より）	11
挿図8	大塚山横穴墓A小支群位置図	13
挿図9	A—1号横穴遺構図	14~15の間
挿図10	A—2号横穴墓遺構図	14~15の間
挿図11	A—2号横穴墓玄室遺構図	15
挿図12	A—2号横穴墓遺物出土状況図	17
挿図13	A—2号横穴墓玄室内遺物出土状況図	18~19
挿図14	A—2号横穴墓出土遺物実測図 土器1)	20
挿図15	A—2号横穴墓出土遺物実測図 土器2)	21
挿図16	A—2号横穴墓出土遺物実測図 土器3)・鉄器1)	22
挿図17	A—2号横穴墓出土遺物実測図 鉄器2)	23
挿図18	大塚山横穴墓B小支群位置図	24
挿図19	B—1号横穴墓遺構図	24~25の間
挿図20	B—1号横穴墓玄室遺構図	25
挿図21	B—1号横穴墓遺物出土状況図	26
挿図22	B—1号横穴墓玄室内遺物出土状況図	26~27の間
挿図23	B—1号横穴墓出土遺物実測図 土器1)	27
挿図24	B—1号横穴墓出土遺物実測図 土器2)	28
挿図25	B—1号横穴墓出土遺物実測図 鉄器・玉類1)	29
挿図26	B—1号横穴墓出土遺物実測図 玉類2)	30
挿図27	B—2号横穴墓玄室遺構図	32
挿図28	B—2号横穴墓遺構図	32~33の間
挿図29	B—2号横穴墓遺物出土状況図	33
挿図30	B—2号横穴墓玄室内遺物出土状況図	34~35
挿図31	B—1号・2号横穴墓後背テラス・埴丘・周溝実測図	36~36~37の間
挿図32	B—2号横穴墓出土遺物実測図 土器1)	37
挿図33	B—2号横穴墓出土遺物実測図 土器2)	38
挿図34	B—2号横穴墓出土遺物実測図 土器3)	39
挿図35	B—2号横穴墓出土遺物実測図 鉄器	40
挿図36	B—3号横穴遺構図	41
挿図37	大塚山横穴墓C—I・II小支群位置図	42
挿図38	C—1号横穴墓遺構図	42~43の間
挿図39	C—1号横穴墓玄室遺構図	43

挿図40	C-1号横穴墓遺物出土状況図	44~45の間
挿図41	C-1号横穴墓出土遺物実測図 土器・鉄器(1)	45
挿図42	C-1号横穴墓出土遺物実測図 鉄製品	46
挿図43	C-1号横穴墓出土遺物実測図 鉄器(2)	47
挿図44	C-1号横穴墓出土遺物実測図 玉類・耳環	48
挿図45	C-2号横穴墓遺構図	49
挿図46	C-3号横穴墓遺構図	50
挿図47	C-3号横穴墓玄室遺構図	51
挿図48	C-3号横穴墓遺物出土状況図	52
挿図49	C-3号横穴墓出土遺物実測図 土器	53
挿図50	C-3号横穴墓出土遺物実測図 耳環・玉類	54
挿図51	C-4号横穴墓玄室遺構図	56
挿図52	C-4号横穴墓遺構図	56~57の間
挿図53	C-4号横穴墓遺物出土状況図	57
挿図54	C-4号横穴墓玄室内遺物出土状況図	58~59
挿図55	C-3・4号横穴墓及び後背溝平面図	60
挿図56	C-4号横穴墓後背溝断面図	60~61の間
挿図57	C-4号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)	62
挿図58	C-4号横穴墓出土遺物実測図 土器(2)	63
挿図59	C-4号横穴墓出土遺物実測図 鉄器・耳環・玉類	64
挿図60	C-Ⅲ小支群位置図	65
挿図61	C-5号横穴墓玄室内遺物出土状況図	65
挿図62	C-5号横穴墓不明遺構実測図	66
挿図63	C-5号横穴墓遺構図	66~67の間
挿図64	C-5号横穴墓出土遺物実測図 土器・鉄器	67
挿図65	C-6号横穴墓遺構図	68~69の間
挿図66	C-6号横穴墓遺物出土状況図	69
挿図67	C-6号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)	70
挿図68	C-6号横穴墓出土遺物実測図 土器(2)	71
挿図69	C-6号横穴墓出土遺物実測図 鉄器・耳環	72
挿図70	C-7号横穴墓遺構図	72~73の間
挿図71	C-7号横穴墓玄室遺構図	73
挿図72	C-7号横穴墓遺物出土状況図	74
挿図73	C-7号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)	75
挿図74	C-7号横穴墓出土遺物実測図 土器(2)・鉄器	76
挿図75	C-7号横穴墓出土遺物実測図 耳環・玉類	77
挿図76	C-8号横穴墓玄室遺構図	78
挿図77	C-8号横穴墓遺構図	78~79の間
挿図78	C-8号横穴墓遺物出土状況図	79
挿図79	C-8号横穴墓玄室内遺物出土状況図	80~81
挿図80	C-8号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)	82
挿図81	C-8号横穴墓出土遺物実測図 土器(2)	83

挿図82	C-8号横穴墓出土遺物実測図 鉄器・耳環	84
挿図83	C-5(164)、C-6・C-7(165)、C-8(164・165)各横穴墓出土遺物実測図 土器	86
挿図84	C-9号横穴道構図	87
挿図85	不明造構1造構図	88
挿図86	B区頂部平安時代土器出土状況(左)及び出土遺物実測図(166~168は不明造構1出土)	89
挿図87	不明造構2造構図	89
挿図88	造構外出土石製品実測図	90
挿図89	九州北西部の横穴墓	93
挿図90	松江市中竹矢2号墳・1号横穴墓実測図	95
挿図91	墳丘・周溝を有する横穴墓分布図	96
挿図92	横穴墓築造工程	99
挿図93	大塚山横穴墓群における小支群	106

挿 表 目 次

挿表1	米子市の年間平均気温と降水量	8
挿表2	大塚山横穴墓群造構-観察表	94
挿表3	墳丘を有する横穴墓-観察表	97
挿表4	米子市・安来地域横穴墓出土人骨	107
挿表5	横穴墓出土遺物-観察表	109

付 図 目 次

付図1	大塚山横穴墓群調査前地形測量図
付図2	大塚山横穴墓群全体図
付図3	大塚山横穴墓群土器編年表

写 真 目 次

大塚山横穴墓群より見る大山	
写真1 発掘参加者記念撮影	5
写真2 米子市久美通跡全景	10
写真3 A-2号横穴墓調査風景	16
写真4 C区北側斜面保安足場	55
写真5 C-5号横穴墓実測風景	67
写真6 C-6号横穴墓調査風景	68
写真7 C-7号横穴墓玄室内発掘調査風景	77
写真8 C-8号横穴墓発掘調査風景	85
写真9 車尾小学校現地説明会風景	90

図 版 目 次

図版1	大塚山横穴墓群全景・A区遠景・B区遠景
図版2	C区遠景 C-II小支群遠景 C-I小支群遠景
図版3	A-1号横穴墓完掘状況 土層断面 掘削工具痕
図版4	A-2号横穴墓完掘状況 土層断面 前庭遺物出土状況
図版5	A-2号横穴墓前庭遺物出土状況 玄門(玄室内より) 玄室内排水溝掘削工具痕
図版6	A-2号横穴墓玄室内人骨出土状況 頸椎器屍床 遺物出土状況 平底と脚の組み合せ・直刀
図版7	B-1号横穴墓完掘状況 閉塞押さえ石 前庭遺物出土状況
図版8	B-1号横穴墓玄門 玄室内遺物出土状況 玄室内須恵器屍床 遺物出土状況・玉類・耳環出土状況
図版9	B-2号横穴墓完掘状況 玄門 閉塞押さえ石
図版10	B-2号横穴墓前庭遺物 後背周溝・盛土墳丘土層断面 後背周溝・テラス完掘状況
図版11	B-2号横穴墓玄室内磚床と遺物出土状況 墓台と遺物出土状況 B-3号横穴完掘状況
図版12	C-1号横穴墓完掘状況 玄室奥壁 玄室側壁掘削工具痕
図版13	C-1号横穴墓羨道部平瓶出土状況 玄室内磚床・人骨・遺物出土状況 玄室内遺物出土状況

- 図版14 C-2号横穴完掘状況 C-3号横穴墓完掘状況 玄門・前壁（玄室内より）
- 図版15 C-3号横穴墓玄室内遺物出土状況 C区北側斜面保安足場
- 図版16 C-4号横穴墓完掘状況 前庭遺物出土状況 玄室内遺物出土状況
- 図版17 C-4号横穴墓玄室内遺物出土状況 後背周溝完掘状況
- 図版18 C-5号横穴墓完掘状況 土層断面 不明遺構
- 図版19 C-6号横穴墓完掘状況 前庭遺物出土状況 閉塞押さえ石
- 図版20 C-6号横穴墓玄室完掘状況 玄室内遺物出土状況
- 図版21 C-7号横穴墓完掘状況 前庭土層断面及び遺物出土状況 前庭遺物出土状況
- 図版22 C-7号横穴墓玄室内遺物出土状況
- 図版23 C-8号横穴墓完掘状況 義道部及び玄門 前庭遺物出土状況
- 図版24 C-8号横穴墓玄室奥壁 玄室内須恵器屍床 人骨出土状況
- 図版25 C-8号横穴墓玄室内須恵器屍床 遺物出土状況 C-9号横穴完掘状況
- 図版26 B区頂部不明遺構 B区頂部平安時代土器出土状況 C-1号上方不明遺構
- 図版27 A-2号横穴墓出土遺物 土器
- 図版28 A-2号横穴墓出土遺物 土器
- 図版29 A-2号横穴墓出土遺物 土器・鉄器
- 図版30 A-2号横穴墓出土遺物 鉄器
- 図版31 B-1号横穴墓出土遺物 土器
- 図版32 B-1号横穴墓出土遺物 土器・鉄器・耳環
- 図版33 B-1号横穴墓出土遺物 玉類
- 図版34 B-2号横穴墓出土遺物 土器
- 図版35 B-2号横穴墓出土遺物 土器
- 図版36 B-2号横穴墓出土遺物 土器
- 図版37 B-2号横穴墓出土遺物 鉄器・耳環
- 図版38 C-1号横穴墓出土遺物 土器・鉄器
- 図版39 C-1号横穴墓出土遺物 鉄製品・鉄器・耳環・玉類
- 図版40 C-1号横穴墓出土遺物 土器(72)、C-3号横穴墓出土遺物 土器
- 図版41 C-3号横穴墓出土遺物 上器・耳環、C-3・C-4各横穴墓出土遺物 玉類
- 図版42 C-4号横穴墓出土遺物 土器
- 図版43 C-4号横穴墓出土遺物 土器・鉄器
- 図版44 C-4号横穴墓出土遺物 土器・鉄器・耳環・玉類
- 図版45 C-5号横穴墓出土遺物 土器・鉄器、C-6号横穴墓出土遺物 土器
- 図版46 C-6号横穴墓出土遺物 土器・鉄器
- 図版47 C-6号横穴墓出土遺物 鉄器(263-272)、耳環(323・324)、C-7号横穴墓出土遺物 鉄器・耳環・玉類
- 図版48 C-7号横穴墓出土遺物 土器
- 図版49 C-7号横穴墓出土遺物 土器
- 図版50 C-7号横穴墓出土遺物 土器(148-150)、C-8号横穴墓出土遺物 土器
- 図版51 C-8号横穴墓出土遺物 土器
- 図版52 C-8号横穴墓出土遺物 土器・鉄器・耳環
- 図版53 C-5(164)、C-6・C-7(165)、C-8(164-165)各横穴墓出土遺物 土器、B区頂部出土遺物 土器(170)、遺構外出土石製品

第1章 調査の経緯

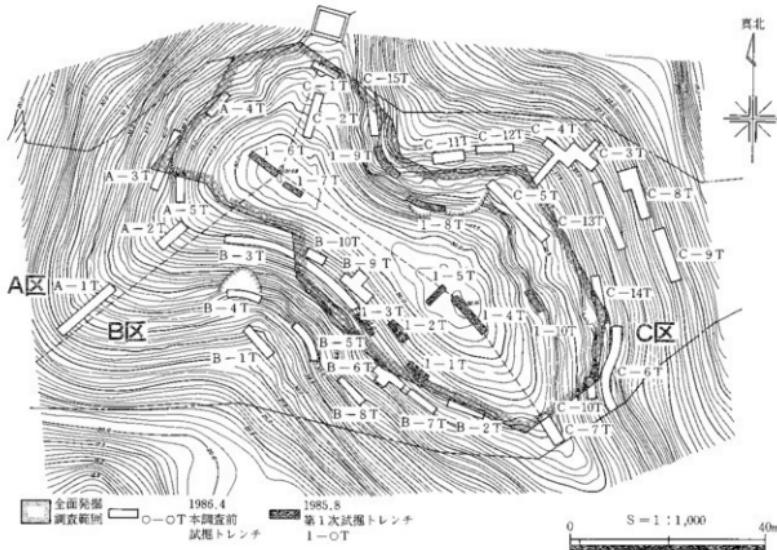
第1節 調査に至る経緯

米子バイパス 米子市街地南部を迂回する米子バイパス建設は、一般国道9号改築工事の一環として、昭和47年度に着手された。既に、昭和60年度、米子市陰田から同宗像の一般国道181号までの延長3.3kmが、暫定2車線で供用開始されており、この建設工事に伴う予定地内の埋蔵文化財発掘調査として、昭和55～58年度の陰田遺跡群、昭和58・59年度の東宗像遺跡群の調査が行なわれている。

陰田遺跡群 陰田遺跡群は米子市教育委員会が鳥取県教育文化財団の協力を得て、米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団（団長・米子市教育長）を組織して、昭和55年7月から昭和59年3月まで調査を実施した。低湿地の縄文時代遺跡から始まり、弥生時代集落、古墳、横穴墓、中・近世墓を多く調査して、多大の成果をあげた。特に陰田第1・2遺跡B区の弥生時代集落、天坂・久幸地区の横穴墓群の発見は、従来あまり注目されていなかった丘陵斜面部調査の必要性を示唆した。

東宗像遺跡群 東宗像遺跡は、米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団の試掘調査結果をうけて、鳥取県教育文化財団（理事長・鳥取県知事）が昭和58年4月から昭和59年6月まで事前調査を実施した。尾根上の古墳群に加えて、斜面部からは弥生時代・古墳時代集落、横穴墓群を発見することができた。

第2期工事 米子バイパスは昭和60年度の陰田、宗像間供用開始後、昭和64年度の宗像、赤井手（国道431号、第1次中国横断自動車道米子インターチェンジ）間供用開始を目指して、第2期工事が計画された。これにより東宗像遺跡群より東方、日野川までの、米子市長砂、観音寺地内の丘陵の遺跡について調査する必要性が生じ、昭和60年8月鳥取県埋蔵文化財センターは、米子市長砂（通称：長砂山）、観音寺（通



播図1 大山山横穴墓群トレーンチ配置図

称：大塔山、戸上山）に於ける試掘調査を急遽行なった。『改訂鳥取県遺跡地図（1976）』によると工事予定地内の大塔山、戸上山の尾根上には「古墳の疑いがある」という白マルがマークされていた。このうち、戸上山については、再度の踏査により古墳とは認められず、試掘トレンチは古墳が推定された大塔山頂部と横穴墓を推定した長砂山南斜面、大塔山東・西斜面、戸上山西斜面に設定された。調査の結果、大塔山東斜面と西斜面の両方で横穴墓を確認し、頂部においては横穴墓に付随する埴丘と周溝の存在が確認された。これにより、本遺跡は新発見の為、字名をとて大塔山横穴墓群と命名された。これをうけて、原団者の建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課・鳥取県埋蔵文化財センターと協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存の為の事前調査を委託した。鳥取県教育文化財団では埋蔵文化財センターが調査計画を作成し、西部埋蔵文化財調査事務所が現地調査を担当することとなった。

- 第2次 試掘調査** その後、第1次試掘調査が古墳、横穴墓に限定した調査であったため、陰田第1遺跡B区、東宗像遺跡でみられた斜面部に立地する集落遺跡の存在も推定されるとして、第2次試掘調査が計画された。昭和61年3月、鳥取県教育委員会・鳥取県埋蔵文化財センターが、長砂山南斜面の標高40m以下の緩斜面にトレンチを設定したが、遺構・遺物は全く検出されなかった。従って、第1、2次試掘調査の結果をうけて、本調査は横穴墓を中心とした大塔山地区に限定されることとなった。

(中原 齊)

第2節 調査の経過

- 試掘調査** 現地での調査は4月1日から打ち合せ、測量等を始め、4月7日から発掘調査を開始した。既に、1985年8月の第1次試掘調査において、西斜面（B区）の1-1・2T、東斜面（C区）1-8・10Tで横穴墓が、B区頂部の1-5Tでは、横穴墓に付随すると思われる埴丘と周溝が確認されていた。これを受けて、調査地を地形からA区（北斜面）、B区（西斜面）、C区（東斜面）に分けることとし、遺構の広がりを確認する為に試掘トレンチをA区（5ヶ所）、B区（10ヶ所）、C区（15ヶ所）の30ヶ所（試掘調査面積576m²）に設定した。A区においては、昭和61年2月、調査地北側に隣接する中国電力の高圧鉄塔建設に際して、米子市教育委員会が立会調査を行なったところ、横穴墓（A-2号横穴墓）の前庭を確認し、須恵器（遺物番号10-24）が出土したことと、地表の灌みから2基の横穴墓の存在が推定された。試掘の結果、横穴墓群はこれが西端で、西側には広がらないことが確認された（A-3・4・5T）。また、頂部から南西に降る尾根にも、住居跡等の遺構を想定してトレンチ（A-1・2T）を設定したが、遺構・遺物は発見されなかった。
- B区** 既に、B区斜面南東側で横穴墓群が確認されていたため、この横穴墓群が、北西側の急斜面にひろがるかどうか（B-1・3・4・5・8・9・10T）、下位に何段にも築造されていないか（B-2・6・7・8T）の確認に努めたが、遺構・遺物は検出できず、3基のみが確認された。
- C区** C区（東斜面）は、地形的に北西側の内湾する急斜面と南東側斜面に分けられる。北西側斜面では1-8Tに加えて、C-15Tでも横穴墓が確認されたため、全面を発掘調査することとした。南東側斜面でもC-5Tで2基の横穴墓が検出されたが、これより下位の標高40m以下の斜面では、遺構は確認されず（C-3・4・6・8・9・13T）、南東側への広がりもないことが明らかになり（C-6・10・14T）、全面調査の範囲は標高40m以上に限定されることとなった。
- 発掘調査** これら、第1次試掘調査と、本調査に先だつ試掘調査により、ほぼ横穴墓の数と分布範囲が確認され、それをもとに調査範囲を確定した。発掘調査は陰田横穴墓群・東宗像横穴墓群で発見された小横穴の存在を想定し、範囲内を全面発掘調査することとした。調査はA区とB区とを同時に調査開始しA区で、横穴墓1基・未完成横穴1基、B区で、横穴墓2基・未完成横穴1基、横穴墓に伴う埴丘と周溝、南東側頂部で不明遺構1基を確認し、A区は6月2日、B区は7月8日調査を終了した。この

間 A - 2 号横穴墓からは多数の人骨が出土し、鳥取大学医学部解剖学第 2 教室・井上貴央助教授により、5月21日と28日の両日取り上げが行なわれた。C 区は6月5日から調査を開始し、横穴墓7基・未完成横穴2基、不明遺構1基を検出した。北西側斜面は、傾斜が急なため3段の足場を設営して作業を行った。南東側は、斜面がやや緩く、足場を築く必要はなかったが、横穴墓が掘り込まれている地盤が軟弱で、調査前に C - 6 号横穴墓は天井が完全に崩落していた。さらに C - 5・7 号横穴墓も崩落が著しく、危険と判断され、C - 5・6・7 号の3基は、前庭調査後、玄室については、尾根頂部から縦に地盤を掘り下げ、天井を除去してから調査を行なうという変則的方法をとらざるを得なかった。C - 8 号横穴墓でも人骨が多数出土したため、9月22日、井上先生により取り上げが行なわれた。この他、A・B・C 各区において、できる限り調査範囲を拡張し、遺構の発見につとめたが、小横穴を始めとした遺構を検出することはできなかった。10月2日最終的な地形測量を終え、すべての調査を完了した。詳しい経過は、調査日誌(抄)を参照されたい。

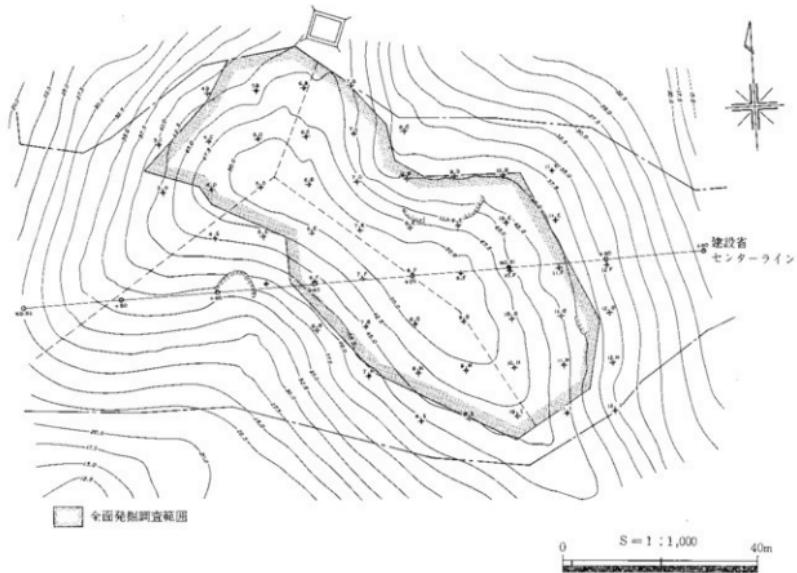
一 調 査 日 誌(抄)

- | | | | |
|-------|---|-------|---|
| 4月5日 | 基準杭の設定、トレチの設定。 | 7月28日 | C - 3 号横穴墓開口。玄室形態は、米子市で初めての便化家形と確認。C - 2 号横穴は狭道途中で放棄している未完成横穴と確認。 |
| 4月7日 | トレチの掘り下げ作業開始。 | 7月29日 | C - 5 号横穴墓の調査を開始。 |
| 4月17日 | 美保土建を交えて作業の安全対策を協議。 | 7月30日 | C - 6 号横穴墓、玄室天井部の崩落が激しく危険なため、玄室上部の除去作業を開始。 |
| 4月19日 | トレチの掘り下げ作業終了。調査区域がほぼ確定。 | 8月1日 | C - 1 号横穴墓の人骨を取り上げる。C - 2 号横穴の調査終了。 |
| 4月23日 | A - 1 号、A - 2 号横穴墓の調査開始。 | 8月6日 | 米子市教育委員会主催の考古学講座一行約20名が遺跡を見学。 |
| 4月30日 | A - 1 号、A - 2 号横穴墓の前庭半截。A - 2 号横穴墓前庭から蓋石をはじめ、須恵器片多数出土。 | 8月7日 | C - 3 号横穴墓の調査終了。C - 4 号横穴墓前庭を完掘。須恵器多数出土。C - 7 号横穴墓、C - 8 号横穴墓調査を開始。 |
| 5月7日 | B - 2 号、B - 3 号横穴墓調査開始。A - 1 号横穴は玄室掘削の途中で放棄していることを確認。 | 8月8日 | C - 4 号横穴墓開口。玄室形態は断面三角形妻入りと確認。 |
| 5月13日 | A - 2 号横穴墓開口。玄室形態は断面三角形妻入り。遺存状態は良好で、人骨もおよそ7体分確認。 | 8月18日 | C - 5 号横穴墓の前庭、狭道完掘。天井部は崩落が激しいが、残部より平入りと確認。 |
| 5月21日 | 鳥取大学井上貴央助教授の指導のもと、鳥大生の協力により A - 2 号横穴墓の人骨を取り上げを開始。 | 8月20日 | C - 1 号横穴墓の調査終了。 |
| 5月22日 | B - 3 号横穴はほぼ完掘。未完成と確認。 | 8月21日 | C - 9 号横穴の調査を開始。岡山大学近藤義郎教授来訪。 |
| 5月27日 | B - 2 号横穴墓前庭完掘。須恵器多数出土。 | 8月27日 | C - 4 号、C - 6 号横穴墓調査終了。C - 5 号横穴墓、危険防止のため、玄室を崩しにかかる。C - 8 号横穴墓の前庭完掘。上器多数出土。 |
| 5月28日 | B - 2 号横穴墓開口。玄室形態は断面三角形平入りと確認。 | 8月29日 | C - 8 号横穴墓開口。玄室形態は断面三角形妻入りで、土壠床の上に人骨が良く残る。新潟大学甘柏健教授来訪。 |
| 6月5日 | B - 1 号横穴墓前庭完掘。 | 9月4日 | C - 9 号横穴完掘。未完成と確認。 |
| 6月9日 | B - 1 号横穴墓開口。玄室形態は断面三角形妻入りで、須恵器屍床をもつことを確認。 | 9月5日 | C - 7 号横穴墓、玄室天井の崩落が激しく、危険防止のため天井落しの作業を開始。 |
| 6月10日 | 車尾小 6 年生 72 名が社会見学の一環として遺跡を見学。 | 9月8日 | C - 9 号横穴の調査終了。 |
| 6月19日 | C 区の急斜面に足場の設置が始まる。 | 9月13日 | PM 2:00 より現地説明会。雨の降る中、約 150 名の参加者を得る。 |
| 6月24日 | B - 2 号横穴墓調査終了。 | 9月17日 | 鳥取県文化財保護審議会委員による検討会。 |
| 6月27日 | B - 1 号横穴墓調査終了。全員 C 区の調査にかかる。 | 9月20日 | 鳥取大学渡辺真季助教授来訪。 |
| 7月4日 | C - 1 号横穴墓前庭半截完了。平瓶が 1 個体出土。 | 9月22日 | C - 8 号横穴墓の人骨の取り上げ。 |
| 7月11日 | C - 6 号横穴墓調査開始。 | 9月26日 | C - 5 号横穴墓調査終了。 |
| 7月18日 | C - 2 号横穴、C - 4 号横穴墓調査を開始。 | 10月1日 | C - 7 号、C - 8 号横穴墓調査終了。 |
| 7月22日 | C - 1 号横穴墓開口。玄室形態は断面三角形妻入りで、玄室には人骨とともに木棺の痕跡が明瞭に残る。C - 3 号横穴墓の調査を開始。 | 10月2日 | A 区土塁剥ぎ、地形測量終了。現地における作業全て終了。 |
| 7月27日 | 車尾小 6 年生、親子で遺跡見学。約 80 名集まる。 | | |

第3次 試掘調査 また、大塔山横穴墓群調査中の昭和61年9月長砂地区の第2次試掘調査トレッセの排土から、須恵器片が発見され、9月29・30日に、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターが斜面部にトレッセを入れたが、遺構・遺物は発見されなかった。他の地点からの流入と判断される。

調査の方法 調査範囲は、第1次試掘調査の結果により、大塔山の標高25~35m以上の約6,000m²が対象となつたが、本調査に先だつ試掘調査により、横穴墓の分布範囲が確定されたため、大幅に縮小された。ほぼ標高40m以上に限定され、最終的に頂部も含めて、3,577m²の発掘調査を行なった。また、C区北西側の斜面は傾斜が45°にも及ぶ急傾斜で、そのまでの発掘作業は危険と判断され、県美保土建の協力を得て延長約30m、3段の足場を組み、作業を行なった。発掘調査は前庭から行ない、前庭縦断、横断面の土層を観察した後完掘した。遺構及び遺物の出土状況は、建設省道路センター杭のNo.91+20を中心にして、磁北にあわせた南北軸を10mごとに西から1~12、東西軸を北からA~Iと設定、これを基準杭として、実測、測量を行なった。No.91+20はポイント8Fとなる。写真は35mmサイズ黑白、カラーリバーサルの2種類を撮影している。

(中原 齊)



掲図2 大塔山横穴墓群基準杭設定図

第3節 調査体制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもと下記の体制で実施された。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	西尾 邑次	(鳥取県知事)
副 理 事 長	坂田 昭三	(鳥取県教育委員会教育長)
常務理事兼事務局長	平木 安市	
財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター		
所 長	田渕 康允	(鳥取県教育委員会文化課長)
次 長	田中幸治郎	
庶務係長	竹内 茂	(鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長)

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所

所 長	前田 克己
主任調査員	中原 齊 西浦日出夫 松井 潔
調査員	近藤 哲雄 中村 慎二
調査補助員	左藤 博 西田 直史 杉田千津子 田中千恵子
事務担当係員	角 律子

○調査協力

米子市教育委員会、車尾自治連合会(会長 米山 実)、観音寺総合区(総合区長 浦上 金一)

下記の方々に発掘調査作業員、整理作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。

発掘参加者(五十音順)

吾郷琴江、入江博愛、入江登美子、浦上浅雄、浦上房子、浦木 京、浦木喜美枝、浦瀬芳子、浦富美代子、大塚智重子、大塚充子、太田房枝、勝部重吉、齊木民治、齊木良逸、齊木由和、田村重治、高田健吉、塙田貞子、辻敬子、徳中静枝、中山 彰、中山恵子、中曾澄子、能登路 順、村上美之、山根方水、山根久代、山根 黙、山根京子、米原文枝、渡部 進、渡部昭枝

整理参加者(五十音順)

桑崎知早子、小林美奈、福田和美、松岡朋子、山崎保子

人骨保存処理参加者(五十音順)

磯辺康行、木村信行、田中宣行、谷綱健生

環 慎二、真鍋一郎、吉岡明彦

(中原 齊)



写真1 発掘参加者記念撮影(現地調査を終えて喜びの面々)

第2章 大塔山横穴墓群の環境

第1節 地理的環境

大塔山横穴墓群は鳥取県米子市市街地の南郊長砂、觀音寺地内に所在する。横穴墓群の地番は米子市觀音寺大塔山東平122-4、西平123-2、長砂町1023-1・3である。

鳥取県 鳥取県は本州の西部、中国地方の北東に位置し、北は日本海に面し、東は兵庫県、南は岡山県、広島県、西は島根県に接している。県域は、東西126km、南北61.85km、総面積349,269km²で、日本全体の約1%を占める。また、県土の75%は林野であり、生活域は海岸沿いに開けた沖積平野と山間の谷部に展開している。旧国名でいえば東が因幡国、西が伯耆国であるが、地形的には伯耆国は大山を境に西と東に分けられ、因伯を合わせて東、中、西部の三地域に分けられる。それぞれの地域には、大河川流域に形成された沖積平野が開けており、因幡は千代川下流域の鳥取市、東伯耆は天神川中流域の倉吉市、西伯耆は日野川下流域の米子市を中心として発達している。米子市の北側弓ヶ浜半島先端部には、日本海側隨一の漁港、境港をもつ

境港市があり、漁業を中心に発達している。

鳥取県はこの4市を中心にして6郡、35町村で構成され、人口は、61万6,024人(昭和60年10月1日、国勢調査)を数える。県庁は、鳥取市に所在する。

米子市 米子市は、中国山地最高峰を誇る大山(海拔1,711m)の西麓に広がる米子平野にあり、美保湾に長く伸びた弓ヶ浜半島の付け根に位置し、鳥取県の西端にあたる。県境を介して島根県安来市、能義郡伯太町と接しており、周辺には北に境港市、東に西伯



挿図3 大塔山横穴墓群の位置

郡日吉津村、淀江町、東南に岸本町、南を会見町、西伯町に囲まれている。面積98.06km²、人口13万余人の地方商業都市である。

周辺の地形 米子周辺の地形をみると、東に大山山麓、南に越敷山丘陵が連なり、それぞれの山塊は、日野川、日野川と法勝寺川を始めとする河川により分断され、河川流域沿いには谷奥平野が山奥まで続いている。日野川

米子平野 川は、中国山地奥深く日野郡日南町新屋（標高900m）を源に、中国山地や大山西麓の水を集めて北流し、日本海にそそぐ流路総延長83.8kmの1級河川である。米子平野は、日野川により岸本町付近を扇頂とする扇状地性の沖積低地として形成された平野である。この日野川の流出土砂は北西の季節風による堆積で、「出雲國風土記」において夜見島とよばれた島（現境港市周辺）と米子平野をつなぎ、

中海 弓ヶ浜半島を作りあげている。これにより外海と遮断された中海が形成され、わずかに境水道において海水の出入がある汽水湖となっている。中海は周囲84km、面積98.5km²で、鳥取、島根両県の4市3町が囲み、全国第5位の広さであったが、現在中海の4分の1にあたる2,542haを干拓、埋立する中海干拓事業が進められている。また、最近宍道湖と共に社会問題にまでなっている淡水化計画も推進されつつあり、面積の縮少、水質の汚濁がみられる中で、往時の出漁風景も見ることはなく、地理的な様相さえ大きく変えようとしている。

平野 米子平野の日野川流域沿いには、自然堤防が発達し、右岸には河岸段丘もみられる。この右岸地域は箕面屋平野と呼ばれ、水田地帯として開け、各地に農村集落が点在している。また、左岸の法勝寺平野は鎌倉山（730m）辺りに源を発して法勝寺の丘陵山地沿いに北流し、米子市戸上付近で日野川と合流する法勝寺川により、沖積低地として形成された沖積平野である。広義には箕面屋平野同様に米子平野に含まれる。この地域は、四方を越敷山丘陵山地に囲まれ、法勝寺川の河口は日野川本流にふきがれおり、米子市街地と区切られている。この地域の集落は、丘陵地および台地の縁辺付近にあり、平野に広がる水田地帯を取りまくよう立地している。

大塔山 米子市街地のある米子平野と法勝寺平野は、標高130mの高山山塊によって区切られている。高山山塊は西側の島根県との県境からドウト山、行者山、高山、戸上山と標高60~160m前後の山稜が連なっており、その低い部分を国道180・181号が越している。大塔山横穴墓群は、高山山塊東側に聳える標高79mの東宗像の山稜から北側に低く延びる尾根に所在している。前面に広がる観音寺、車尾地区の平野部からみると、西に長砂山、東に戸上山という北方に延びる尾根に抱かれた最奥部にあたり、眼下に平野から日本海まで望む絶好の位置にある。地質的には、大塔山の岩石は、通称長砂流紋岩と呼ばれる時代末詳の流紋岩～石英斑岩類が主体である。長砂流紋岩は第三紀中新世中期～前期の石見層群最下部の法勝寺火砕岩層に貫入し、長砂付近では熔岩流となっている。本岩は斜長石および石英が淡紅色石基中に比較的密に散在し、一般に褐色鉄鉱に汚染されている。このほか斑晶として、正長石、黒雲母が認められるが、石英は清澄で、やや融触を受けている。横穴墓はこの流紋岩層に掘り込まれている。

気候 所謂「裏日本型」に属するが、沖合を流れる対馬暖流の影響で、比較的温暖である。年平均気温は沿岸部では、15.1°Cを示し、山間盆地部に比べれば0.8°C高い。また、雪国でもあり、平野部は梅雨、台風期の他冬期にも降水量が多い。特に冬期は東部ほど、梅雨期は西部ほど降水量が多い。年間降水量は1,546~2,286mmである。

(中原 齊)

降霜

初霜 11月13日 晩霜 4月23日

降雪

最大積雪深 80cm

初雪 12月5日 晩雪 3月21日 根雪日数 39日 雪始 12月15日 融雪 3月16日

米子測候所調（『鳥取県の農作物気象ごよみ』による）

気温 (C°)

月区分	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
最高平均	7.3	7.5	11.4	17.2	21.6	25.1	29.1	30.4	26.1	20.7	16.0	10.6	18.6
最低平均	0.3	-0.1	2.0	6.1	11.1	16.7	22.0	22.4	17.9	11.0	6.4	2.8	9.9
平均	3.7	3.5	6.6	11.5	16.1	20.5	25.0	25.8	21.5	15.5	11.0	6.5	13.9

降水量 (mm)

月区分	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
降水日数 (0.1mm以上)	25.8	21.4	18.4	13.8	12.6	17.6	15.8	7.8	16.2	15.0	16.8	22.0	203.2
平均(mm)	148.4	155.3	122.8	104.0	116.1	175.7	212.6	117.1	281.0	168.9	115.7	143.3	1860.9

播磨1. 米子市の年間平均気温と降水量

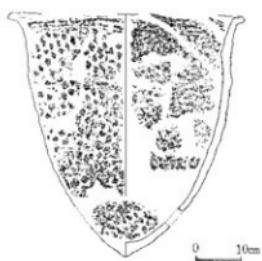
米子測候所調(『鳥取県気象年報』による)

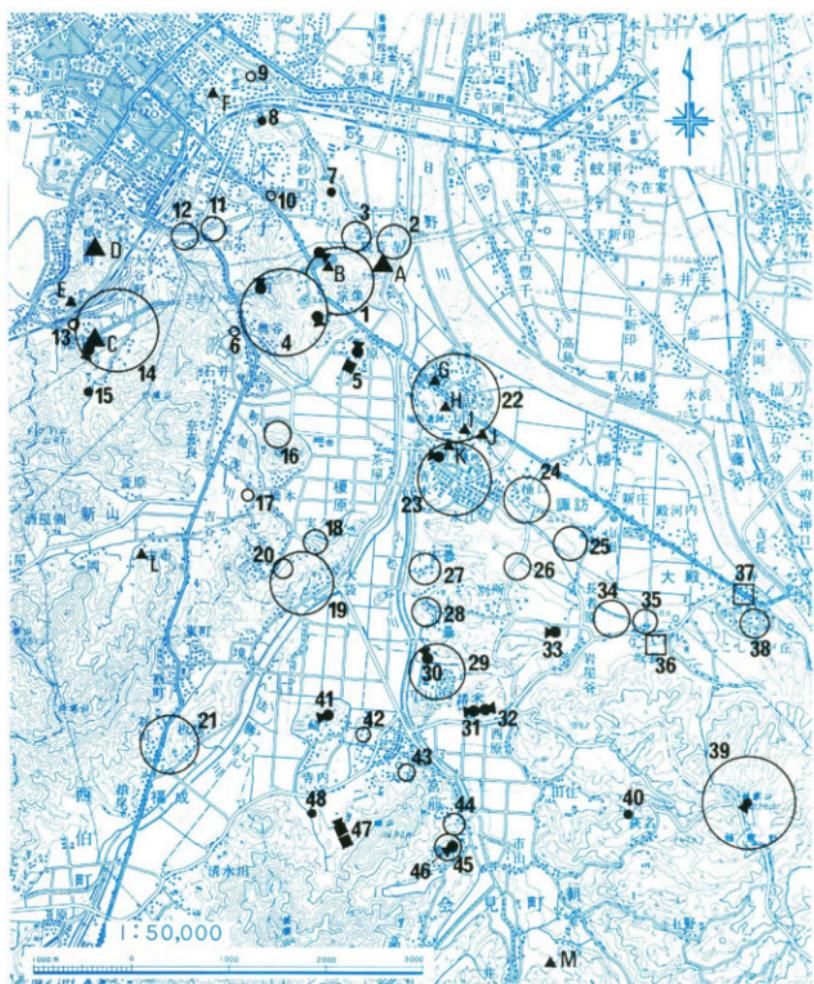
第2節 歴史的環境

旧石器時代 米子市周辺に限らず鳥取県内では確實に旧石器時代とされる遺跡は発見されていない。遺物としては、有舌尖頭器が岸本町貝田原、大山町坊領、莊田、会見町諸木等で採集されており、米子市奈喜良遺跡(16)でも出土している。大山山麓一帯では有舌尖頭器より古いとされる柳葉状尖頭器や黒曜石製舟底形石核、握椎等も発見されており、旧石器時代に遡る可能性が強い。近年、日野郡溝口町長山第1遺跡では細石刃(マイクロブレイド)かとみられる石片も発見され、調査が行なわれているが、決め手になる石核の発見には至っていない。また、西伯郡淀江町小波出土と伝えられる黒曜石製ナイフ形石器が注目され、試掘調査が行なわれたが、遺跡の確認には至らなかった。

縄文時代 縄文時代草創期に盛行るとされる陰線文系土器群は鳥取県内では発見されていないが、先述した
草創期 有舌尖頭器、柳葉状尖頭器等の存在から、大山山麓において旧石器時代—縄文時代草創期の遺跡が調
早 期 査される日も近いと考えられる。縄文時代も早期になると尖底压型文土器を出土する遺跡が多く確認
 できる。大山山麓の台地上に点在しており、淀江町北田山遺跡、岸本町久古遺跡、須村遺跡、番原遺
 跡、大山町塚田遺跡、溝口町長山第1遺跡、井後草里遺跡、下山南通遺跡、江府町佐川第1遺跡、日南町折渡遺跡等が知られている。最近、米子市上福万遺跡では、2次にわたる調査で、縄文時代の集石遺構や土壙と共に、3万点余りもの早期の土器
 が出土しており、大山山麓の山の幸を追う縄文人の足跡を知ることができる。

前 期 前期に入ると、台地上の遺跡が早期から統けて貝殻条痕文、
 爪形文土器を伴う遺跡が営まれる一方、低湿地にも遺跡が出現する。陰田第9遺跡(14)では、九州の轟式土器の影響を受けた押引き沈線文土器、淀江町船ヶ口遺跡からは、曾畠式土器に近い土器が発見され、九州あるいは朝鮮半島との交流を思わせ

図4 上福万遺跡出土押型文土器
(文献より)



A. 大塔山横穴墓群 B. 東寺後圓墳古墳群 C. 油田横穴墓群 D. 荒糸寺山横穴墓群 E. L型田横墓群 F. 稲田横穴墓群 G. 道場山横穴墓群 H. 日池山横穴墓群 I. 四ノ谷谷横穴墓群 J. 南御所後圓墳古墳群 K. 青木山横穴墓群 L. 向原古墓群 M. 銅鏡六點星
1. 東寺後圓墳群 2. 駒齋寺古墳群 3. 長砂古墳群 4. 宇治古墳群 5. 日野6号墳 6. 黃行進跡 7. 木道山古墳 8. 西山古墳 9. 稲田町遺跡 10. 長砂遺跡 11. 池之内遺跡群 12. 日久美遺跡 13. 口輪山遺跡 14. 雨出遺跡 15. 隆田1号墳 16. 常磐山遺跡 17. 木谷遺跡 18. 大谷遺跡 19. 墓古墳群 20. 楠原瓦窯跡 21. 鳥居古墳群 22. 市道跡群 23. 青木遺跡群 24. 緑ノ口遺跡 25. 西山ノ尾遺跡 26. 別所野田遺跡 27. 上安藤遺跡 28. 上安藤遺跡 29. 木本遺跡 30. 大鳥塚古墳 31. 後川山古墳 32. 二子塚古墳 33. 別所1号墳 34. 長者屋古墳 35. 長者屋古墳群 36. 坂中塚 37. 大寺塚 38. 大寺塚跡 39. 施物山道路群 40. 田辺1号墳 41. 三崎鶴山古墳 42. 宮尾遺跡 43. 天万遺跡 44. 門前土器遺跡群 45. 浅井11号墳 46. 浅井古墳群 47. 駒齋寺古墳群 48. 寺内8号墳

図5 周辺遺跡分布図

る。また、目久美遺跡（12）では、多量のシカ、イノシシ、クロダイ、スズキ、マグロ等の動物遺体が検出され、海辺で漁撈を営む縄文人の姿を彷彿とさせる。

中期 中期には、目久美遺跡（12）、陰田遺跡群（14）等が続いて営まれるくらいで、遺跡数は減少する
後・晚期 傾向がみられるが、後・晚期になると遺跡数は再び増加し、青木遺跡（23）では丘陵上に落し穴と考えられる土壙が250ヶ所以上も検出されており、当時の狩猟生活の一端が窺われる。

弥生時代 大陸から朝鮮半島をへて北部九州に伝わった稻作文化は、

前期 時をへずして東進し、当地域でも海岸からそう遠くないところに小規模ながら高い技術をもった水田経営を始めている。目久美遺跡（12）では大量の土器・木器を伴い低湿地水田と微高地上に営まれた集落が形成されている。勝田町遺跡（9）、長砂遺跡（10）が同様な低湿地の集落と考えられる。前期末には諸木遺跡（29）では台地上に直径80mを超えるV字状環濠が掘られており、環濠集落と考えられ、海岸からやや離れた谷奥まで弥生農耕文化が浸透していくことがみとめられる。

中期 中期に入ると遺跡数は急激に増加し、低湿地集落が継続して営まれる一方、台地上・山間部へと遺跡の分布が拡大していく。主な遺跡として尾高遺跡、石州府遺跡、福市遺跡群（22）、青木遺跡（23）、別所新田遺跡（26）、奈喜良遺跡（16）、天万遺跡（43）、宮前遺跡（44）、浅井土居敷遺跡（45）があり、前期末に諸木遺跡にみられた環濠は宮尾遺跡（42）にみられる。

後期 後期には、前代から継続する遺跡の他に新しい集落を形成する遺跡が多い。特に後期中葉に営まれた陰田遺跡群（14）の弥生集落は、ごく短期間営まれる低丘陵上集落で、自然環境の変化と集落内における人口増加等の内の発展の結果として成立し、短期間に解消したものであろう。

古墳時代 西伯耆地方では、弥生時代における集団墓から隔絶した存在の所謂「墳丘墓」は発見されていない
前期 が、四隅突出形方形墓を含めて古墳出現以前の墳丘墓がいすれ調査されるものと考えられる。前期古墳としては日原6号墳（5）が1辺20mの方墳で台状墓的な様相が強く、古墳時代前期墳丘多葬例として注目される。会見町普段寺1号墳（47）は全長21mの小型前方後方墳で、舶載三角縁唐草文帶二神二獸鏡、碧玉製管玉、鉄剣を出土しており、鏡は鳥根県安来市大成古墳出土鏡と同型鏡である。墳丘くびれ部付近からは壺棺も発見されている。2号墳は方墳であり、熊本県宇土市城ノ越古墳出土の鏡と同型の三角縁四神四獸鏡を出土している。最近調査された石州府29号墳は径16mの円墳と考えられ、3つの主体部が重複しており、舶載獸帶鏡、鉄剣を出土した。これらは小規模な古墳であるが、当地域の初現期の古墳と考えられる。この他、青木遺跡では方形周溝墓群が調査されている。山陰地方においては、方形周溝墓は弥生時代に現われず、古墳時代前期に限って確認されており、他地方に比べてその消長は特徴的である。いざれにしても、前方後円墳の出現は、周辺地域と比べてやや遅れるようである。



写真2 米子市目久美遺跡全景
(米子市教育委員会提供)



挿図6
石州府29号墳出土獸帶鏡
(文献1より)

中期 中期の古墳の様相は明らかではないが、墳丘規模は非常に大型化するものが出現する。西伯耆最大規模を誇る全長110mの前方後円墳三崎殿山古墳(41)は、この地域を支配した有力首長の墳墓である。この地域では、画文帶神獸鏡を出土した浅井1号墳(46)、箱式石棺を主体部とする大亀塚古墳(30)等40~50m級の前方後円墳が次々と築造され、後期にも全長55mの後塔山古墳(31)、36mの双子塚古墳(32)の前方後円墳が続き、会見町周辺が淀江町域と共に西伯耆の中心であったことが推定される。この他に少女を埋葬した箱式石棺を主体部とする陰田41号墳(14)、仿製斜縁八神鏡を出土した水道山古墳(7)も中期的様相をもつ古墳である。

後期 後期になると、小型の前方後円墳や大型の円墳を中心として、宗像古墳群(4)、陰田古墳群(14)、石州府古墳群、境古墳群(19)、福成古墳群(21)といった群集墳が盛んに築造される。主体部は横穴式石室や追葬可能な大型箱式石棺等が採用され、家族墓的性格が強く現われてくる。導入期の横穴式石室としては、東宗像古墳群(1)等にみられる竪穴系横口式石室が出現する。以後、古墳時代後期を通してこの地域にみられる横穴式石室は九州地方との関係が強いと考えられている。横穴式石室は前方後円墳にも採用され、宗像1号墳(4)、別所1号墳(33)のように一墳に2基の石室をもつ前方後円墳もある。古墳時代も終末に近い頃の古墳として、石垣状列石を周囲にめぐらした方墳が、米子市石州府6号墳、淀江町晚田31号墳で発見されているが、観音寺7号墳(2)も切石造の石室をもち、方墳の可能性が強い。横穴墓は出雲地方に集中して分布しているが、当地域でも陰田横穴墓群(C)を始め調査例が急増し、その様相が明らかになりつつある。横穴墓の玄室形態は同横穴墓(L)のような初現的なものを除いて断面三角形のものが主流を占め、比率でいえば妻入りのものが多い。比較的規模の大きな横穴墓群として

は大塩山横穴墓群(A)、東宗像横穴墓群(B)、陰田横穴墓群(C)等があるが、福市遺跡の周辺には2~5基を単位とした小群が5群もあるなど横穴墓が集中してみられる地域である。最近は江府町、日南町の山間部でも横穴墓の調査例が増え、潜在的な数はかなり多いものと思われる。

古墳時代の集落は、弥生時代から継続して奈良良遠跡(16)、福市遺跡(22)、青木遠跡(23)等で営まれており、大谷遠跡(18)、西山ノ後遠跡(25)、上福万遠跡でも古墳時代前期の集落が発見されている。中期から後期の集落は青木、福市遺跡から、樋ノ口遺跡(24)まで長者原台地一帯に分布している。東宗像遠跡(1)、吉谷遠跡(17)のよう

に丘陵緩斜面に立地する例もある。

歴史時代 古代伯耆国府は、東伯耆の倉吉市に置かれたため、西伯耆には国衙関連遺跡はみられないが、白鳳期の寺院跡として大寺廃寺(37)が建立される。大寺廃寺は発掘調査によりほぼ伽藍配置が明らかに飛鳥~ なっている貴重な寺院跡である。伽藍は講堂を西側に、金堂を南側に並置して東を正面にした珍らしいもので、変形の法起寺式伽藍配置である。塔心礎は三重孔をもち、山陰で唯一のものであり、金堂



挿図7 銀音寺7号墳墳丘測量図(文献2より)

屋根に据えられたと考えられる石製鶴尾が重要文化財に指定されている。大寺廃寺の屋根瓦は会見町金田瓦窯で焼かれたものであり、金田瓦窯跡は窯の完存する例としても重要な遺跡である。

当地域は律令体制下にあっては伯耆国会見郡にあたる。『和名抄』によると伯耆国には、河村、久米、八橋、汗入、会見、日野の六郡があり、「会見郡」は「安不見」と訓している。当地域が文献に登場するのは古事記、日本書紀の断片的記事を除けば、「正倉院文書」正倉院御物調庸綾絨布墨書の「伯耆国会見郡安曇郷戸主問 夕安曇口調狹紀志匹□□□」、神護景雲四年優婆塞貢進文に「賀茂部秋麻呂年廿 伯耆国会見郡賀茂郷戸主賀茂部馬戸□」等があり、「傑着國風土記逸文」には「相見郡々家、西北有余戸里」と記されている。この会見郡の郡衙遺跡と推定されているのが、豪族紀成盛の館址の伝承を残す長者屋敷遺跡（34）で、調査により大規模な建物跡が数棟確認された他、南北90m、東西100mにも及ぶ建物群を囲む溝も検出されている。

郡の下の行政組織としては、いくつかの自然的村落を五十戸を標準に編成された里がある。里は後に郷と改編され、「和名抄」によると、会見郡には日下、細見、美濃、安妙、巨勢、蚊屋、天万、千太、会見、星川、鶴部、半生の十二郷があった。大塙山横穴墓群のある米子市観音寺、長砂周辺は、成美を中心とした半生郷か、青木、福市を中心とする会見郷かに属すと思われる。奈良時代の集落は青木遺跡（23）等にみられるが、掘立柱建物が多くなっている。注目される遺構として、西山ノ後遺跡（25）の胞被埋納遺構がある。平安時代になると巨勢郷に坂中廃寺が造営され、宗像地内の宗形神に従五位上の神階が授与され、脛形神社は伯耆国式内社六座の1つとして、延喜式に記載されている。これら神社、寺院を維持した勢力が会見郡の郡司層であったと思われる。

中・近世 中・近世の城館址も數多い。数年前発掘調査された尾高城は米子城築城まで西伯者の中心であったらしく、守護山名氏の一族、行松氏の居城であった。天神丸、方形館等が調査され、尼子、毛利の戦いの歴史を留める居館、要塞としての姿が明らかとなり、当時の城館址の縄張りと武士層の生活をうかがわせる遺跡である。他に日野川左岸で戸上城、石井要害、橋本宝石城、西伯町では法勝寺城、会見町の天万要害、日野川右岸では小波城、河岡城などがあるが、在地豪族の動態と共にその実態はほとんど不明である。近世の城下町米子の中心であった米子城は吉川広家が築城した四層天守閣（後の副天主閣）を備える本格的近世城郭であり、関ヶ原の戦い後入府した中村一忠により、五層の天守閣が完成され、伯者17万石の城下町として整備された。中村氏断絶後、米子6万石加藤貞泰の治世をへて、因伯32万石池田藩政時代を迎えている。

（中原 齊）

（挿図出典文献）

1. 「上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群」鳥取県教育文化財団 1985年

2. 近藤哲雄「観音寺7号墳について」『水曜考古』第8号 1986年

（写真提供）

米子市教育委員会

第3章 横穴墓の調査

第1節 A区の横穴墓

概要

大塔山A区では頂部(51.68m)より北東側へ降る尾根の北側斜面で2基の横穴墓を検出し、西側よりA-1号・2号横穴墓と呼称した。これを大塔山横穴墓群A小支群とする。A-2号横穴墓は本横穴墓群でも最大規模の横穴墓であり、A-1号横穴も同規模の前庭を掘削しているが、未完成で途中放棄されていた。両者は主軸間では約11m離れており、高さもA-2号横穴墓はA-1号横穴より約4m低い。また、A-2号横穴墓は調査区境界線上にあり、横穴墓群が北東側へ広がることも考えられる。後背尾根上に墳丘あるいは周溝のような付属施設はみられなかった。

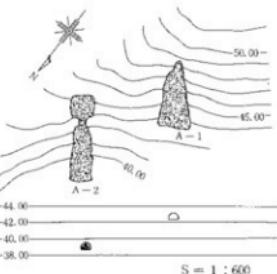


図8 大塔山横穴墓A小支群位置図

1. A-1号横穴(挿図9、図版3)

立地

大塔山横穴墓群中、最も北端にあたるA区(北向斜面)に造営されるA小支群の西端に位置する。谷側端部は標高42.22mで、A区頂部より約9.5m下に築造され、A小支群中では最も高所に立地する。主軸はN=19°-Wである。

造構

造構の規模は、造構確認面で全長7.58m、最大幅4.95mを測り、基盤層への掘り込みをみると、最も深い前庭奥壁側で、床面まで3.50mに達する。

前庭に相当する部分は、床面の長さ6.40m、幅は谷側端部で4.35m、前庭奥壁側で2.15mを測り、長台形を呈す。この箇所の床面は平坦ではなく、15°~17°の傾斜で2段に粗く加工されており、谷側端部と玄門側の比高差は1.83mである。谷側端部から1.80m奥まではかなり丁寧な加工が施され、平坦面をなしているが、その地点より奥は壁際まで加工が及んでいない。最も急傾斜となる箇所では、中央部や右寄りに幅0.40~0.50m、長さ2.25mを測る通路状の加工が、N=52°-Wに沿って施されている。2段目のテラスは、前庭側壁側を幅0.50~0.65m、高さ0.30mにステップ状に掘り残しており、床面は凹状を呈す。底面の幅は0.85~1.05mを測る。谷側端部より奥2.50mの左側床面には、幅10cm前後の鋸ないしは鍛のような、鉄製工具によると思われる加工痕が明瞭に残っている。前庭奥壁は全体にわたり仕上げの加工は施されず、傾斜が変り、横断面形も不整形となる。前庭奥壁は、上端部から1.05mまでを53°の傾斜で粗い加工が施されるが、そこから下はほぼ垂直に丁寧な加工が施される。

羨道に相当する部分の加工は丁寧ではなく、僅かに雛鶴状の加工がみられる程度である。

玄門に相当する部分は、前庭奥壁の下位中央を、長さ1.30m、幅0.45m、高さ0.62mに掘り込んだ所で岩盤に当たっており、途中放棄している。

土層の堆積状況を観察すると、床面に近い層は3~5cmの大の流紋岩基盤ブロックを多量に含んでおり、築造を断念した後、埋め戻していると思われ、この土層は玄門部の掘り込みにも流入している。また、流土と思われる黄褐色土層の下より、自然堆積と思われるブラック・バンド(黒色土層)がみられた。

遺物

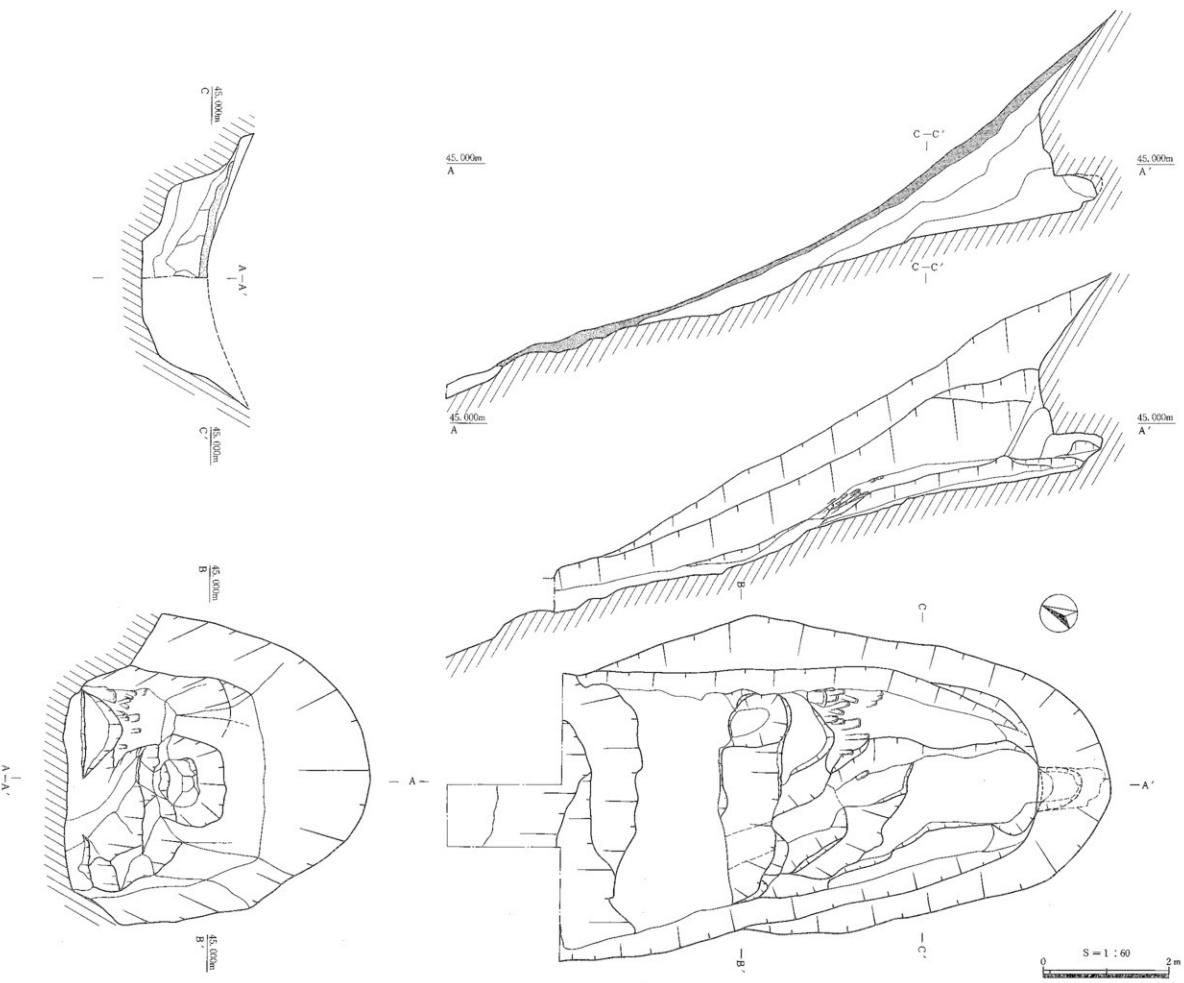
本造構内では遺物は検出されなかった。

以上のことにより、A-1号横穴は未完成横穴であると考えられる。

(近藤 哲雄)

2. A-2号横穴墓(挿図10~17、図版4~6・27~30)

- 立地** 北東へ伸びる尾根の付け根で、稜線より7.50m下った西側斜面に立地している。前庭奥壁端部で標高38.19mを測る。前庭主軸をN-30°-Wにとり、北北西方向に開口している。A-2号横穴墓は、高圧鉄塔建設に際しての米子市教育委員会による立会調査で既に確認されていた。
- 前庭** 前庭は床面で長さ4.24mあり、前庭奥壁側幅1.55m、谷側幅2.57mを測る。基盤層への掘り込みは最も深い前庭奥壁側で床面まで約4.50mに達する。床面の平面形は谷側ほど幅の広くなる長台形を呈し、横断面形は明瞭な逆台形をなす。床面はよく加工されて凹凸が少なく平坦であり、谷側へ10~14°の傾斜をもって降っている。前庭端部は中央付近が鉄塔建設工事のため欠損しているが、前庭の延長に13~30cmの段差をもつ2段のテラスが確認された。この2段の前方テラスは、長さ2.15m、幅2.88mを測り、前庭へ通じる道、あるいは横穴墓に対する祭祀行為に使用された空間と思われる。最奥部正面には、幅2.20m、高さ4.46mの前庭奥壁を造っており、下位中央に狭道が掘り込まれている。前庭奥壁、側壁とも駆面は滑らかによく加工されている。前庭埋土は、最終埋葬後の埋め戻しと考えられる基盤の礫を多く含む層が下位に堆積し、その上に、自然堆積と考えられるブラック・バンド（黒色土層）がみられた。狭道付近で各土層は玄門に向かって落ち込んでおり、玄門、玄室にかけてかなりの土が流入していたが、これは追葬行為等によるものではなく、埋め戻し後、閉塞施設（木蓋？）が腐朽して、前庭埋土が玄門へと流入したものと考えられる。
- 義道** 狹道は、左、右両側を袖状に掘り残しているが、前庭床面との境には段差が認められない。袖部は、床面により約20~60cm立ちあがったところから徐々に前庭奥壁に解消してしまい、天井部を形成していない。床面の幅は1.60mで、奥行は右側壁際で0.55mを測る。
- 玄門** 閉塞は、玄門と狭道の間で行われており、狭道奥壁の中央付近に幅10cm、深さ12cmの蓋受の割り込みをもつ幅0.95m、高さ1.17mの玄門が穿たれている。床面には主軸方向に直交して長さ90cm、幅30cm、深さ6cmの断面U字状の溝が掘られている。蓋受の割り込みを有することから、閉塞は木蓋の類を溝に据え、割り込みにはめ込んだものと考えられるが、割り込みも二段になっている部分があり、何回か蓋の形状にあわせて、修補されたものと思われる。蓋押えの基盤ブロック等は、検出されなかった。約8°の傾斜をもって狭道側へ降る玄門は、奥へ行くほど幅が広がり、最大幅は1.00mになる。奥行は比較的短く、1.16mを測り、床面両側に幅10cm、深さ1.5cmの断面U字状の排水溝が掘られている。横断面形は釣鐘状を呈しており、床・壁面とも幅の狭い工具で丁寧に仕上げられている。狭道よりの玄門床面直上より本質炭化物を検出したが、形状、用途等については不明である。
- 玄室** 玄室床面の平面形は長さ2.63m、幅2.80mの略正方形である。玄室の立面形態は天井と壁の区別のない断面三角形で、高さ2.20mを測り、妻側に玄門がつく。床面壁際には、幅8~18cm、深さ2~8cmの排水溝が巡り、玄門両側の溝へと続いている。床面は玄門より2cm高くなり、玄門へ向かって2°の傾斜をもつ。横断面形でみると左右の側壁は外湾にして立ちあがって棟部に至っており、ほぼ正三角形を呈する。また、縦断面形でみると奥壁、前壁は玄室床面に対して80°の傾斜をもって立ちあがり、台形状を呈する。したがって、天井は切妻形に近い四注式となる。天井部の棟線はやがて掘り込まれ、左右の側壁を分離している。側壁、奥壁には幅7~8cm、側溝には幅3cm前後の掘削痕が残り、玄門に比べると加工が粗雑な印象をうける。左侧壁と前壁の一部が崩落している他は、ほぼ良好な遺存状態であった。
- 須恵器
屍床** 玄室床面には中央~玄門付近を除いて、須恵器大型壺・中型壺を割った破片が散きつめられ、須恵器屍床を形成していた。検出時において、須恵器片の散き方には粗密が認められ、破片表裏の散き方の規則性は認められなかった。このように須恵器屍床は敷かれた当時の旧状を留めてはおらず、おそらく、追葬行為に伴い動かされたものと考えられる。あえて、復元を試みるならば、中央に通路を挟



擲図9 A-1号模穴遺構図

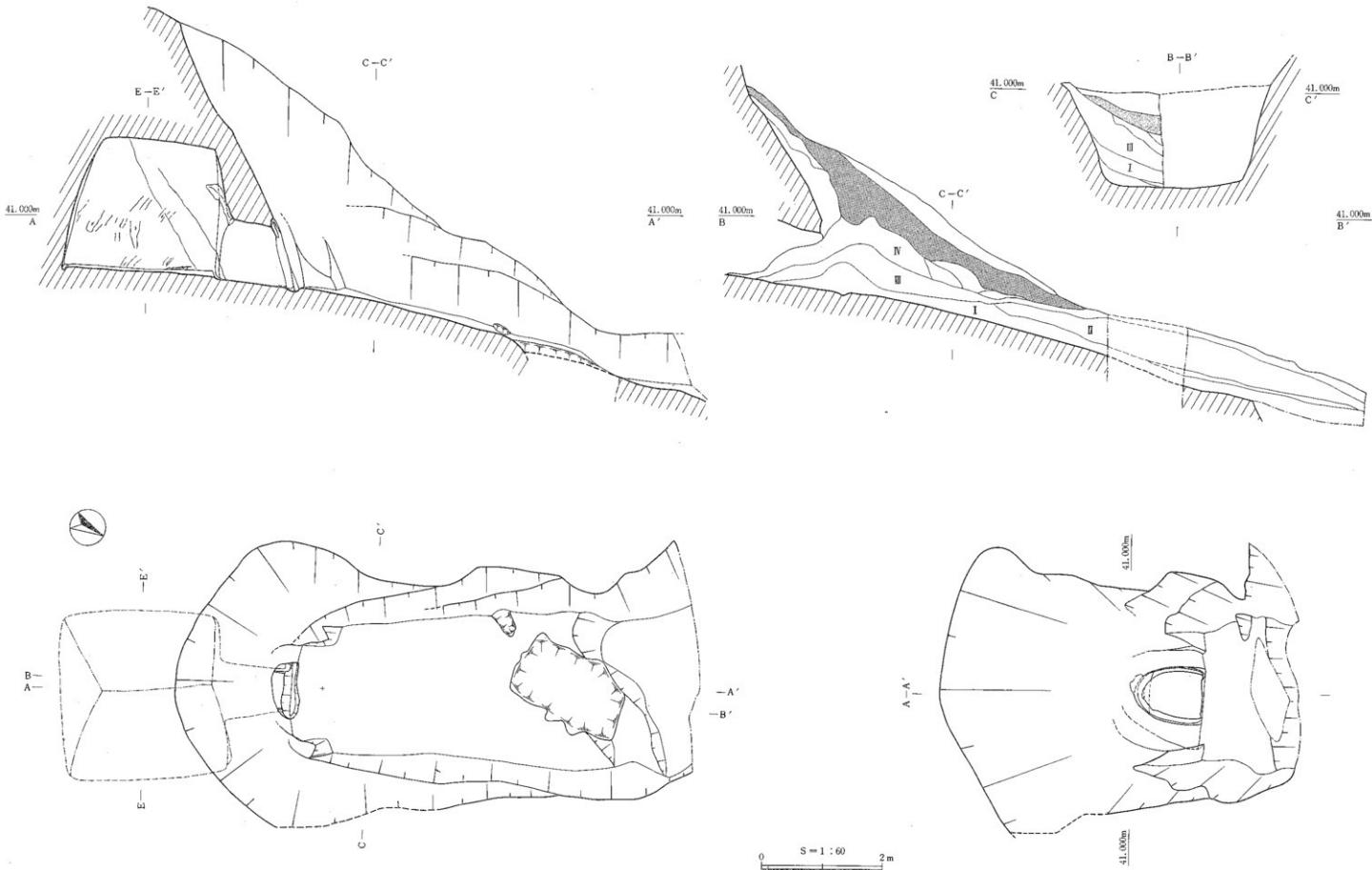
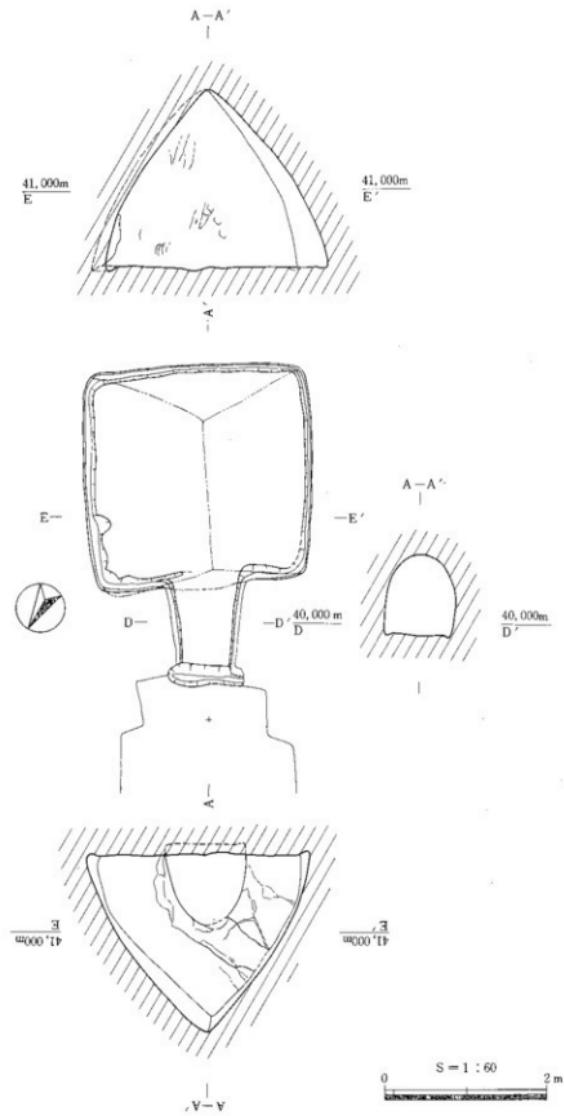


插图10 A-2号横穴墓遗物图



挿図11 A-2号横穴墓玄室遺構図

んで両側に須恵器屍床が設けられたものと推定される。

人骨

人骨の出土状況には3群が認められた。第一象限には、骨の配列でみると2次的移動をしているが、壮年男性の人骨が検出されており、右側須恵器屍床上に直刀を伴って安置された可能性が高い。また、これと重複して、乳児の骨も発見されている。第二象限左隅には奥側に壮年の男性、手前に壮年女性の頭蓋骨がみられた。さらに、これらと重複して少年人骨が検出された。注目されるのは、この壮年男性と少年人骨の骨膚腔に砂が詰った例がみられたことである。詳細は、付論に譲るが再葬の可能性を強く示唆するものであろう。第三象限左隅には、須恵器屍床の切れたところに壮年～熟年男性の人骨が集骨されていた。明らかに2次的移動によるものである。また、これに混じて新生児人骨が確認された。以上のように大人4体、少年1体、乳児2体の計7体の埋葬が確認された。ただし、多くの場合、二次的な移動や再葬が認められた。

遺物 出土状況

前庭及び前方テラスにおける土器の出土状況には3群のまとまりがみとめられる。まず、前庭前方テラスでは、床面から浮いて須恵器杯身1が破碎された状態で出土した。前庭谷側端部においては、須恵器杯蓋14・15・16・17・18・19、杯身3・13が床面から若干浮いた状態でまとめて出土した。また、杯身10・高杯24が鉄塔建設の際出土しており、この群に含まれると思われる。前庭中央付近では須恵器杯身2・5～9・11・12、須恵器杯蓋20・21が、床面に密着あるいは15cm内外浮いて密集した状態で出土しており、このうち杯身7と12、杯蓋20と杯身11・4は上下に重なりあって検出された。

玄室内では、先述したように、左右両側に大型甕26と中型甕27が須恵器屍床として割り敷かれていた。第三象限隅部の人骨の脇には、横転した平瓶25の口縁を隙23が塞いだ状態で検出された。追葬時の片付け行為によるものと考えられる。須恵器以外には須恵器屍床破片に混じて鉄製の直刀1振、鉄鎌完形品16本、破片2本、刀子3本が出土した。直刀192・鐸193は第一象限で右側溝中より、切先を玄門方向、刃を上に向けた状態で検出され、遺存状態は良好であった。鉄鎌、刀子の類はほとんど第一象限に散乱した状態で検出された。鉄鎌はすべて尖根式の長頭鉄鎌であったが174のみ大型の平根式であった。当遺構からは、耳環・玉類は出土していない。

時期

出土した須恵器から、本横穴墓の築造時期は大塙山須恵器編年の1期と考えられ、2期まで追葬が行なわれたと推定される。

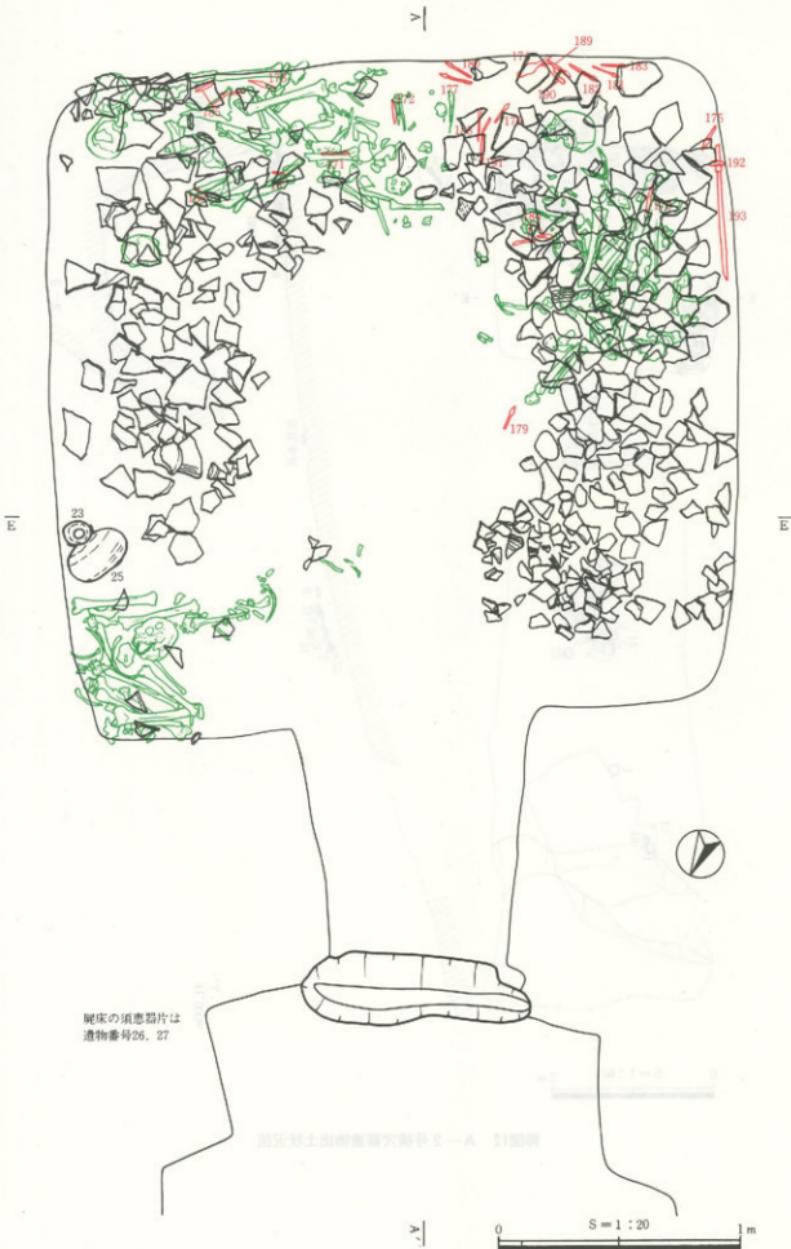
(中原 齊、中村 慎二)



写真3 A-2号横穴墓調査風景(慎重に土器を検出する)



挿図12 A-2号横穴墓遺物出土状況図



挿図13 A-2号横穴墓玄室内遺物出土状況図

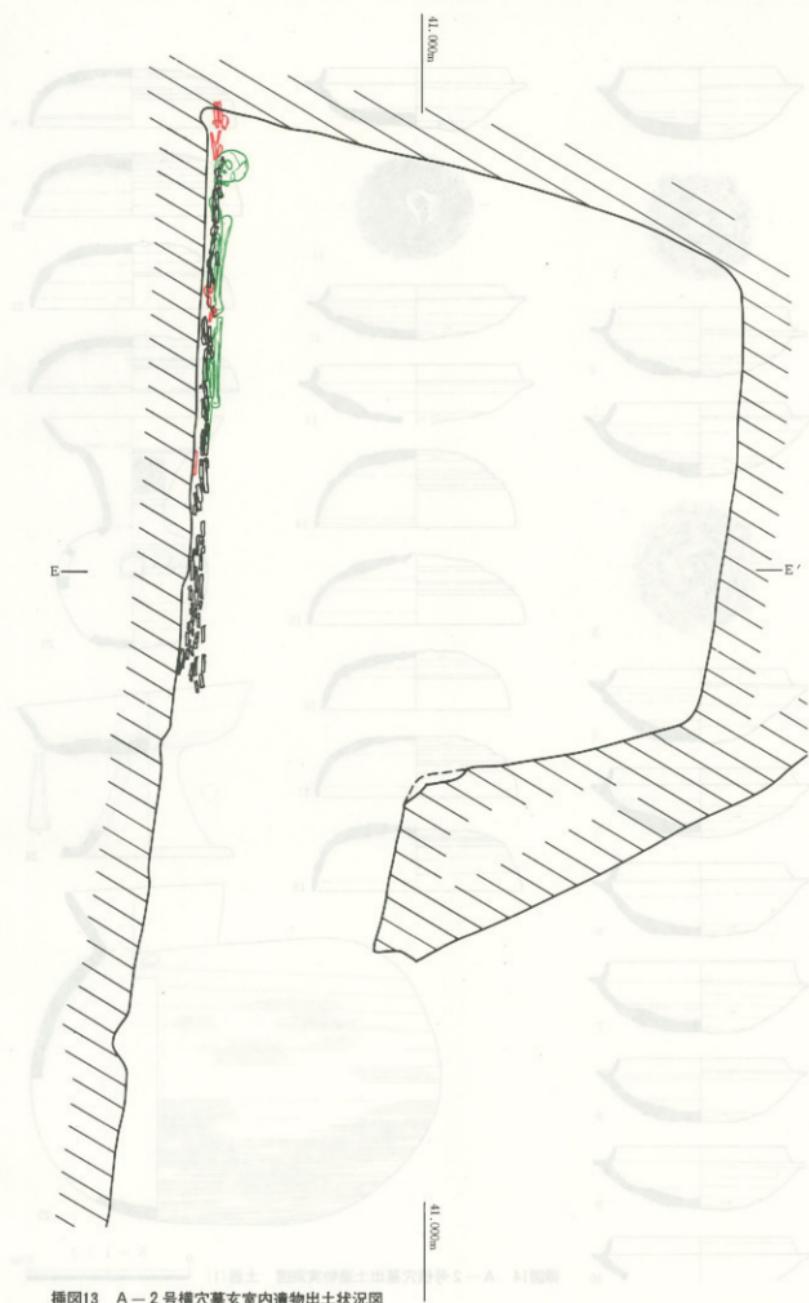


插图13 A—2号横穴墓玄室内遗物出土状况图

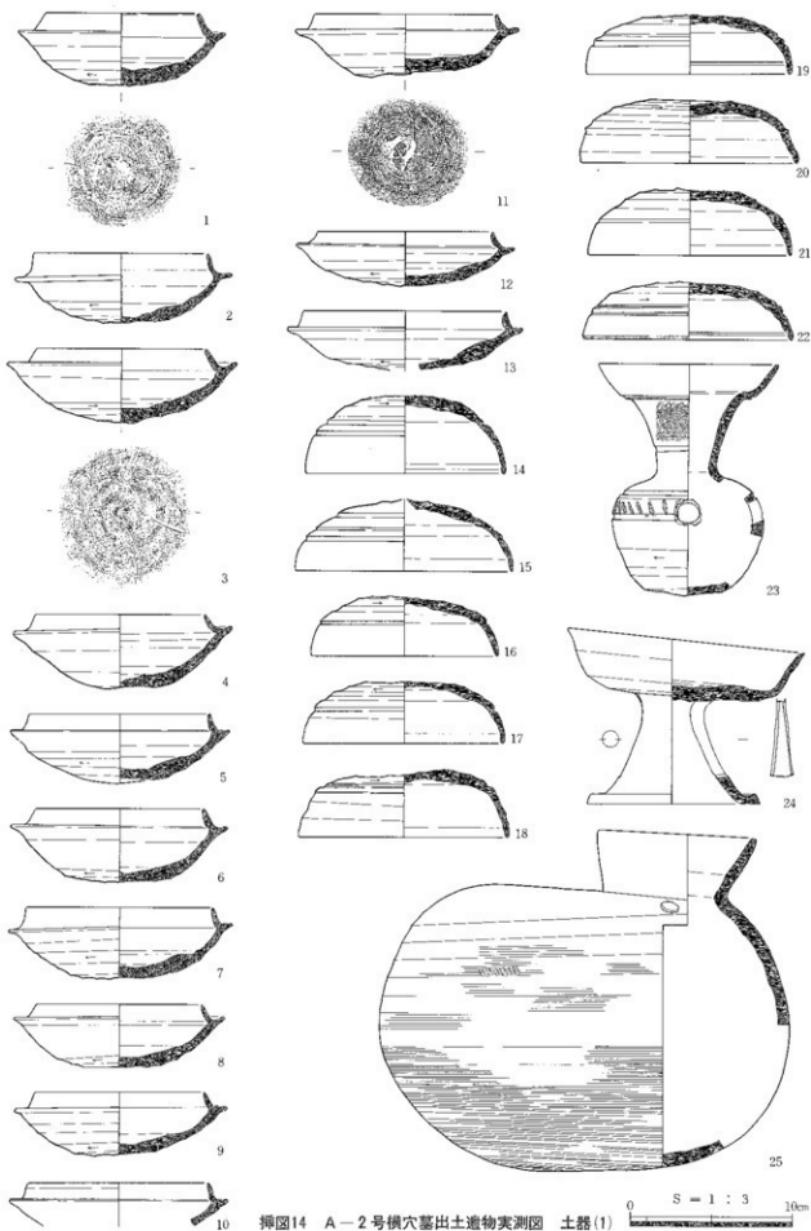
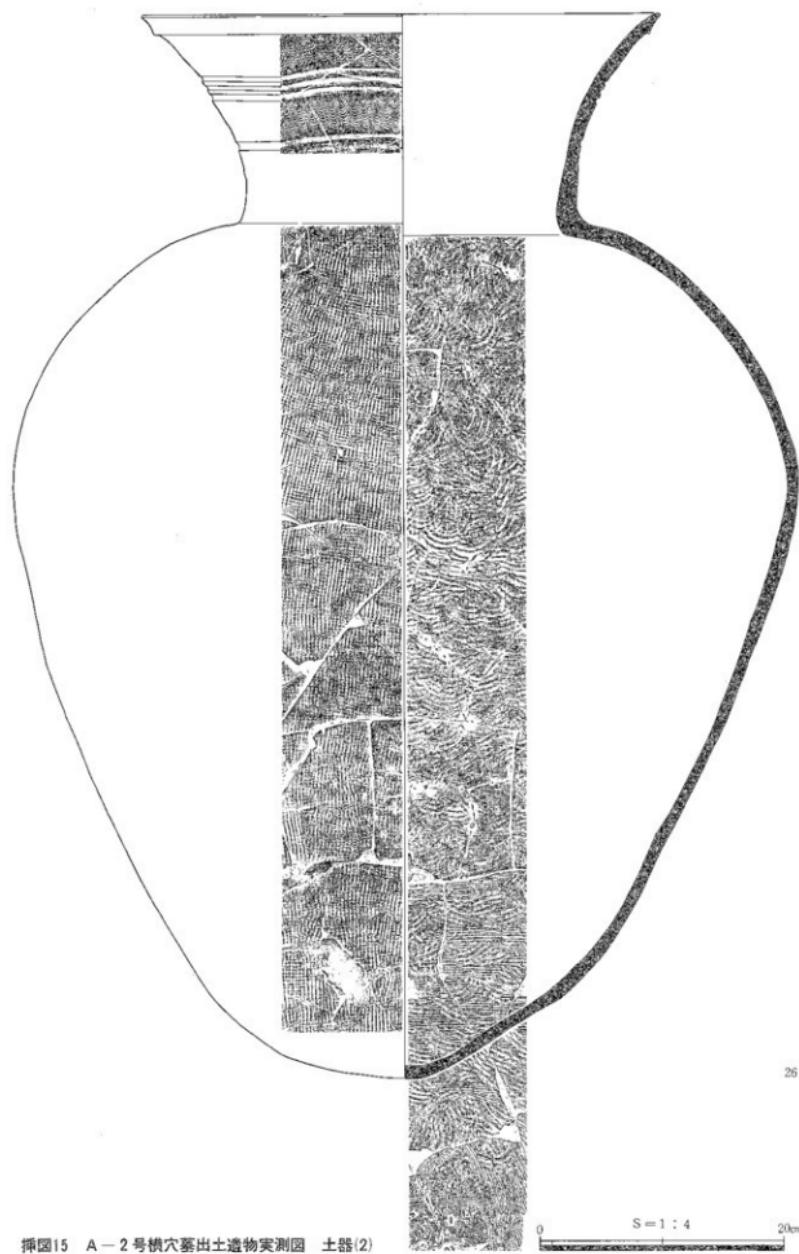


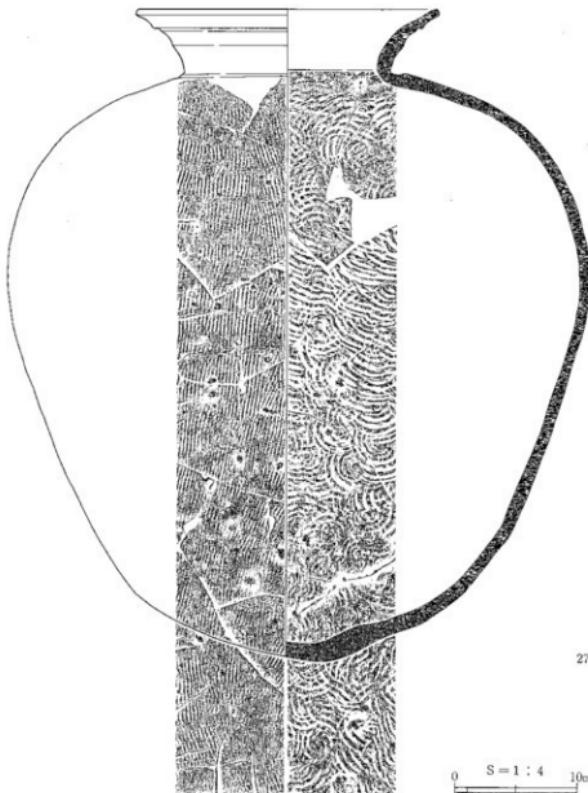
图14 A-2号横穴墓出土遗物实测图 土器(1)

0 S = 1 : 3 10cm



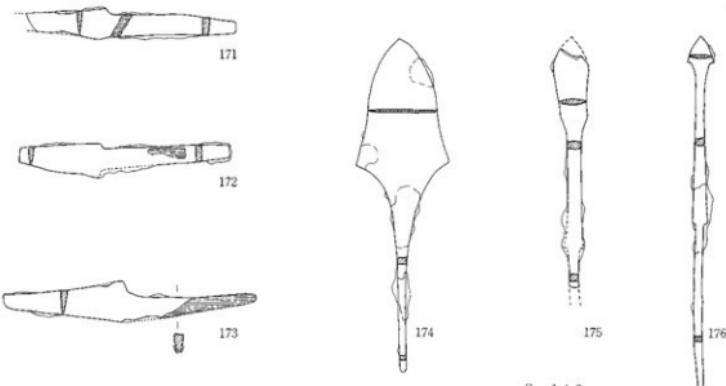
26

插图15 A—2号横穴墓出土遗物实测图 土器(2)



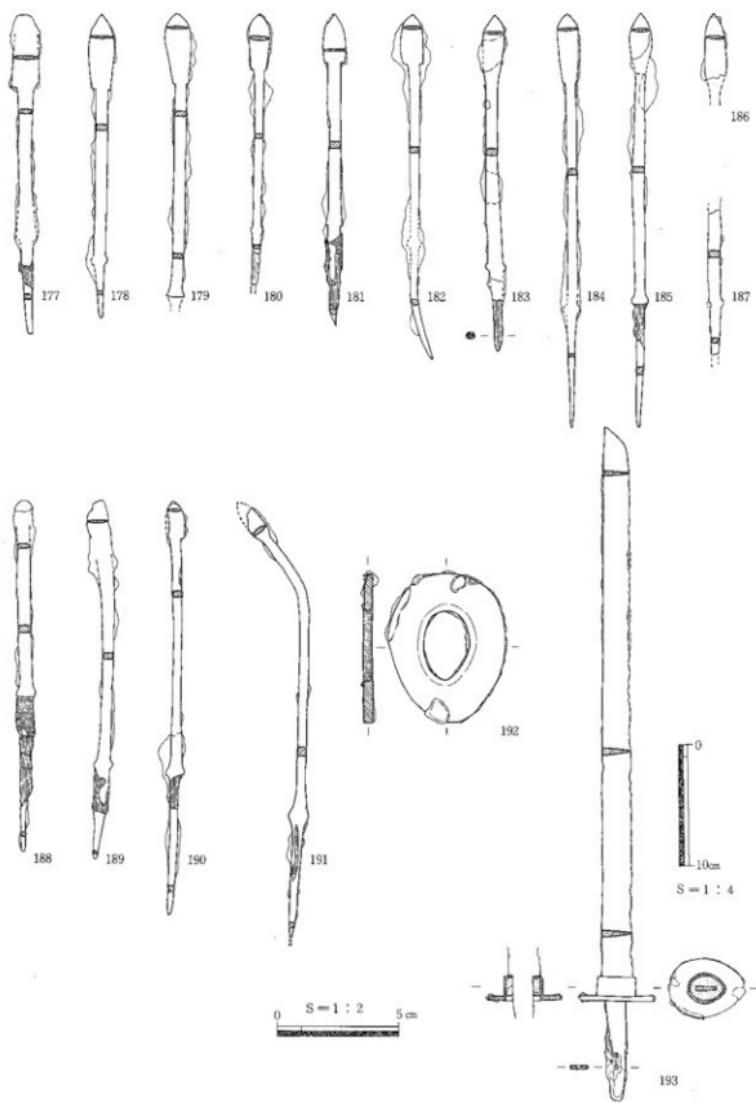
27

0 S = 1 : 4 10cm



0 S = 1 : 2 5cm

擲圖16 A-2号横穴墓出土遺物実測図 土器(3)・鉄器(1)

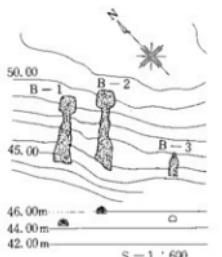


挿図17 A-2号横穴墓出土遺物実測図 鉄器(2)

第2節 B区の横穴墓

概要

大塔山B区（西側斜面）では、南頂部（標高52.16m）より6～7m降った斜面で3基の横穴墓を検出し、北側からB-1号～3号横穴墓と呼称した。これを大塔山横穴墓群B小支群とする。B-1号横穴墓とB-2号横穴墓は主軸間で約3.5mの間隔をもって隣接し、規模等からも類似性が強い。また、両横穴墓とも後背尾根上に加工段をもち、B-2号横穴墓では周溝と盛土墳丘を検出した。これらは横穴墓に付随する遺構と考えられる。B-2号横穴墓の東南6mには未完成で途中放棄したと考えられるB-3号横穴を検出している。B区における横穴墓群の広がりは北側、南側とともに認められずB小支群は以上の3基で完結する小規模な横穴墓群である。



插図18
大塔山横穴墓B小支群位置図

1. B-1号横穴墓(插図19～26、図版7・8・31～33)

立地

B区北側の内湾する急斜面は南側へいくほど傾斜が僅かに緩くなってしまっており、傾斜32°の斜面にB-1号横穴墓と並んで築造されている。主軸はN-45°Eにとり、南北方向に開口する。本横穴墓はB小支群横穴墓の中で最も北側に位置し、高さもB-2、3号横穴に比べて僅かに低く、前庭端部で標高44.50mであり、尾根上との比高差が約7mである。

前庭

床面で長さ3.85mあり、前庭奥壁側幅1.20m、谷側幅2.28mを測り、基盤層への掘り込みは最も深い奥壁側において、前庭床面まで3.4mに達する。床面の平面形は谷側ほど幅の広くなるバチ状を呈し、横断面形は明瞭な逆台形をなす。床面はよく加工されて凹凸が少なく平坦であるが、谷側へ約5°の傾斜をもって傾っている。最奥部正面には幅1.2～1.5m、高さ3.3mの前庭奥壁を造っており、下位中央に羨道が穿たれている。前庭埋土は、基盤層ブロックを多く含み最終埋葬後の入為的な埋め戻しによると考えられるⅠ・Ⅱ層上にブラック・バンド（黒色土層）が堆積していた。羨道部付近で各層は玄門に向って落ち込んでおり、玄門、玄室にかけてかなりの土量が流入していたが、これは追葬行為によるものではなく、埋め戻し後、閉塞施設（木蓋？）が腐朽して、前庭埋土が玄門部へと流入したものと考えられる。なお、前庭埋土の堆積状況には追葬をうかがわせる痕跡は認められない。

羨道

羨道は、左右両側を袖状に掘り残しておらず、床面は前庭より10cm高い。正面観は幅1.10m、高さ1.62mを測り隅丸方形を呈するが、袖部自体は床面より約1.3m立ち上ったところで奥壁に解消される。奥行は0.54mと非常に短く、幅0.82mを測る。天井部の奥行は僅かに0.20mである。床面中央に幅20cm、深さ5cmの排水溝が掘られている。

閉塞

閉塞は玄門と羨道の間で行なわれている。玄門正面壁の中央付近に幅0.74m、高さ0.94mの玄門が掘り込まれており、直下に主軸方向に直交して長さ95cm、幅12cm、深さ14cmの断面V字状の溝が掘られている。閉塞はおそらく、木蓋の類を満にはめ込み、玄門壁にもたせかけたものと考えられ、蓋の押えに用いたと思われる基盤ブロックが溝上に数個置かれていた。

玄門

羨道より約5cm高くなる玄門は比較的長く、床面で長さ1.55mを測る。羨道側の最大幅0.55m、最大高0.90m、玄室側の最大幅0.78m、最大高0.90mとなり奥にいくほど幅が広くなっている。中央には幅10～15cm、深さ4cmの断面U字状の排水溝が通り、玄門横断面形は釣鐘状を呈している。掘削、整形は細かい工具痕が残り丁寧に仕上げられている。

玄室

玄室床面の平面形は長さ2.04m、奥壁側幅1.70m、前壁側幅1.84mの僅かに奥行の長い長方形である。玄室の立面形態は天井と壁の区別のない断面三角形で、高さ1.62mを測り妻側に玄門がつく。床

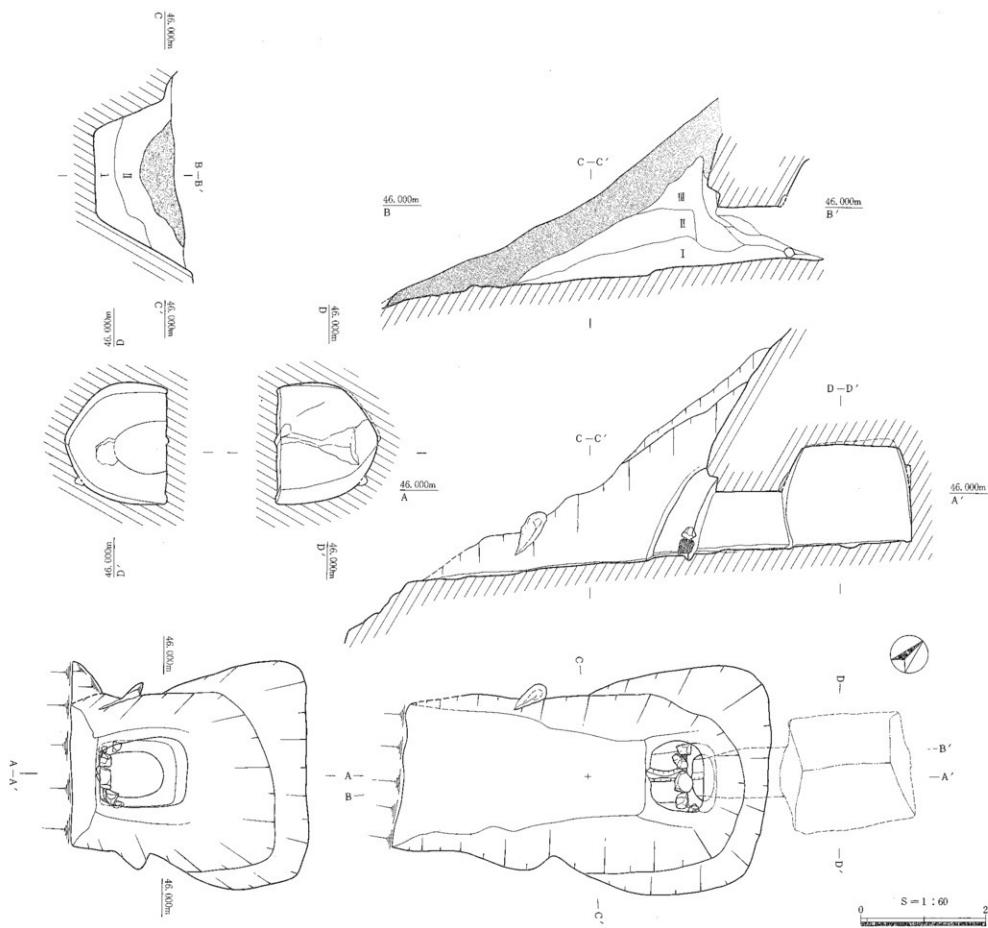


插图19 B-1号横穴墓造制图

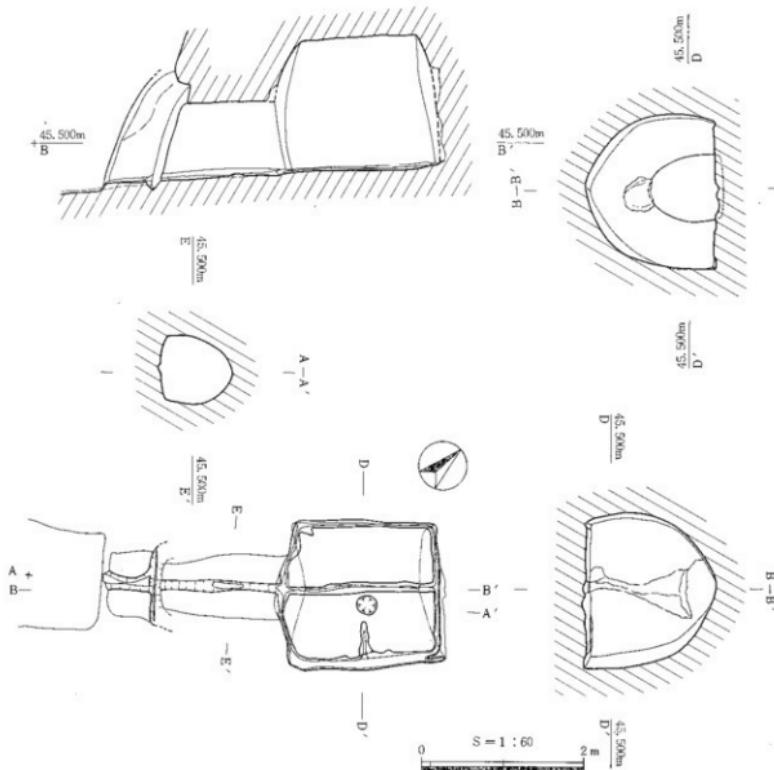
面壁際には幅5~15cm、深さ3cm前後の排水溝が巡り、中央部には幅12cm、深さ4cmの排水溝が玄門へと続いている。床面は玄室、玄門、狭道を通して入口に向けて約3°傾斜している。横断面形は左右の側壁がやや外湾気味に立ちあがり、床面から0.8mくらいのところで内側へ屈曲して棟部に至っており、断面三角形とはいえ釣鐘状に近い形態となっている。また、縦断面形をみると、特に奥壁はまっすぐに立ちあがり、切妻形に近くなっている。棟線は不明瞭であり他の稜線も直線的でなく各コーナーから外湾気味に立ち上がっている。壁面～天井の一部には幅広の掘削痕が残り、加工が粗雑な印象をうける。奥壁と前壁の一部が崩落している他は、ほぼ良好な遺存状態であったが、本横穴墓は満水により何度も水没しており、床面には泥土が堆積していた。

須恵器 屍床

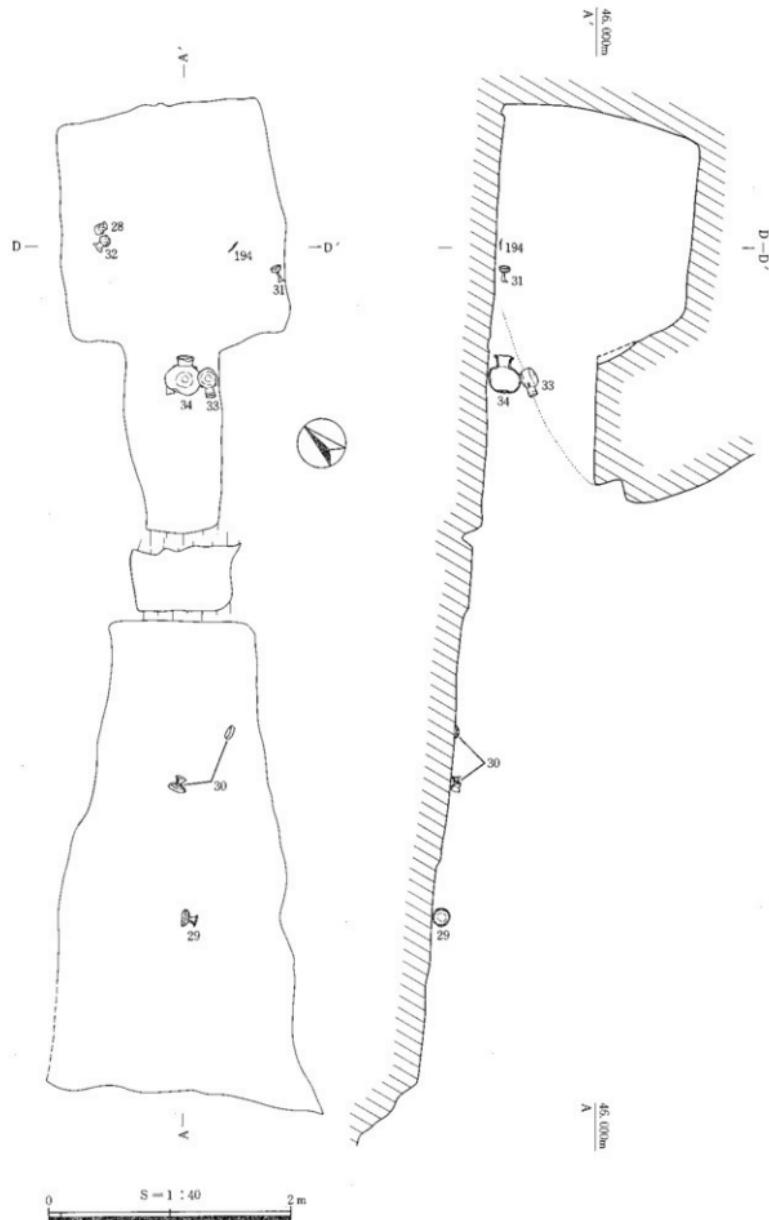
玄室床面中央から右側にかけて須恵器壺、横瓶を割った破片が散かれて、須恵器屍床を形成していた。検出時において、須恵器片の敷き方にはかなり粗密があり、破片表面の敷き方の規則性も認められず、玉類が須恵器片の下から出土することも多かった。敷かれた当時の旧状を留めてはいないと考えられ、おそらく、追葬行為に伴い動かされたものと推定される。

後背 テラス

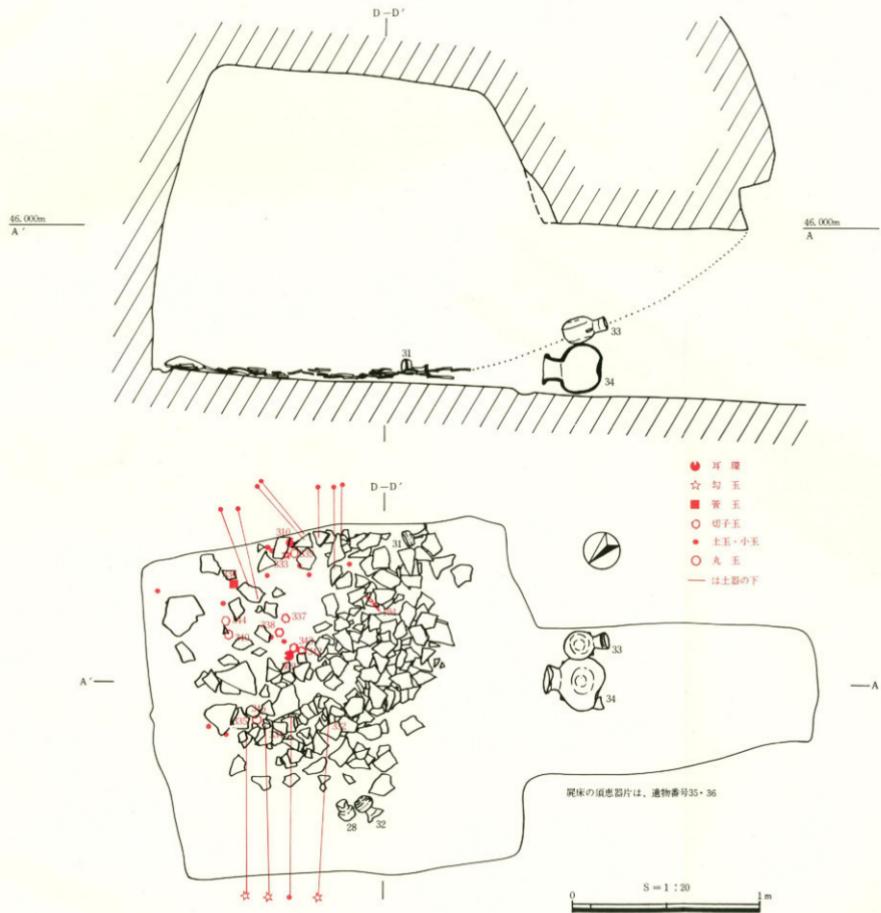
B-1号横穴墓の後背尾根上には幅5.15m、床面の奥行2.30m、最大壁高0.35mのテラスが検出さ

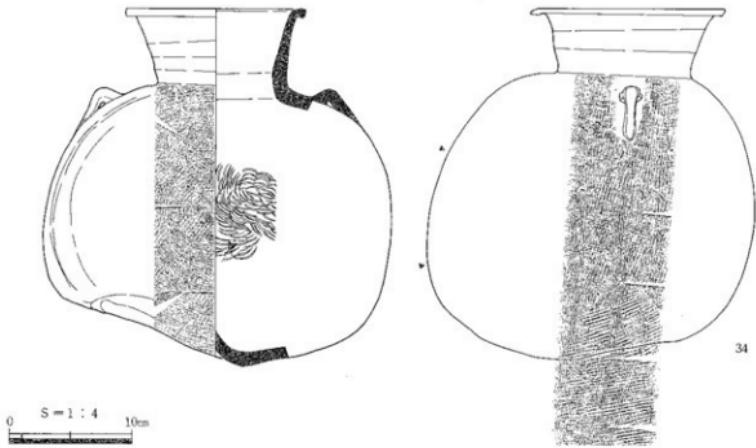
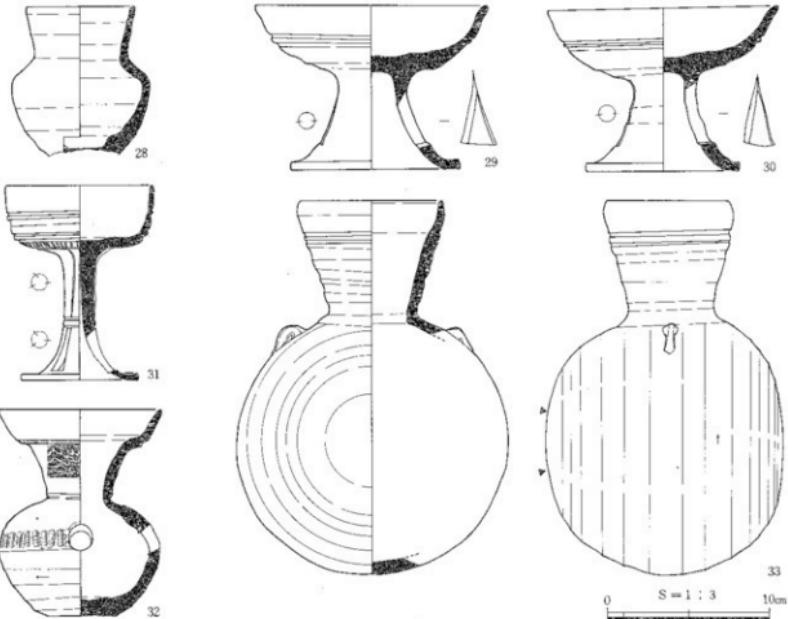


挿図20 B-1号横穴墓玄室遺構図

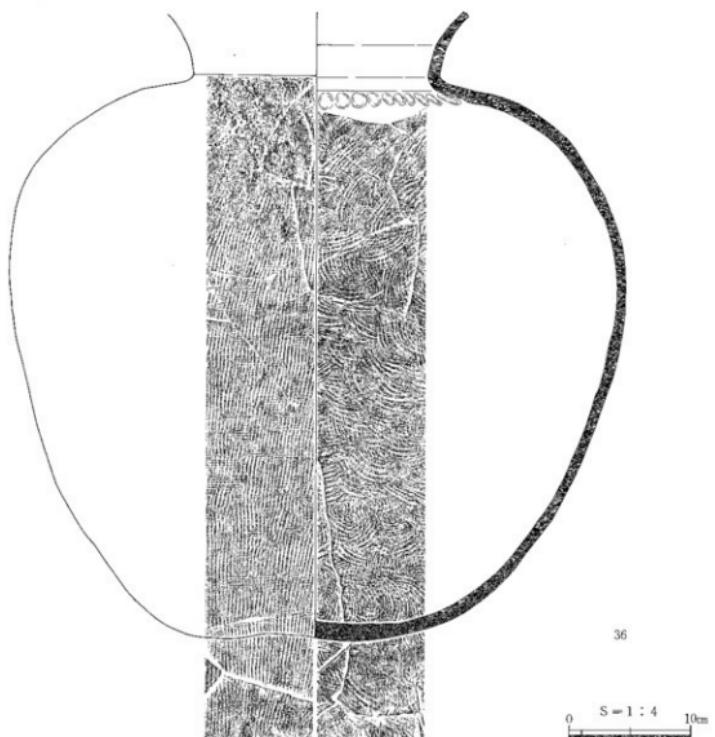
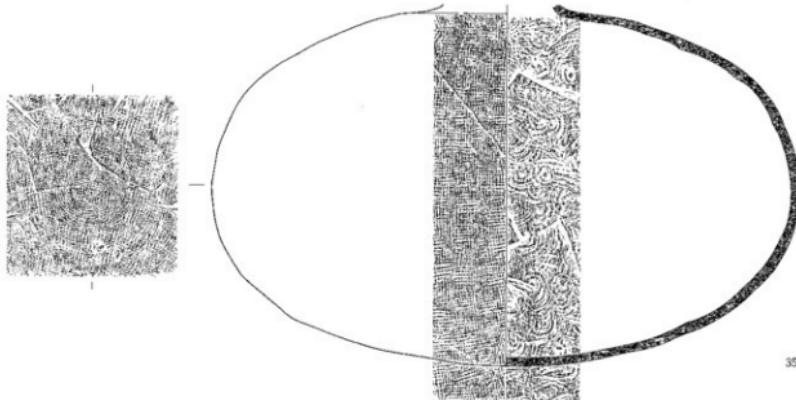


插図21 B-1号横穴墓遺物出土状況図





挿図23 B-1号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)



擗図24 B—1号横穴墓出土遺物実測図 土器 (2)

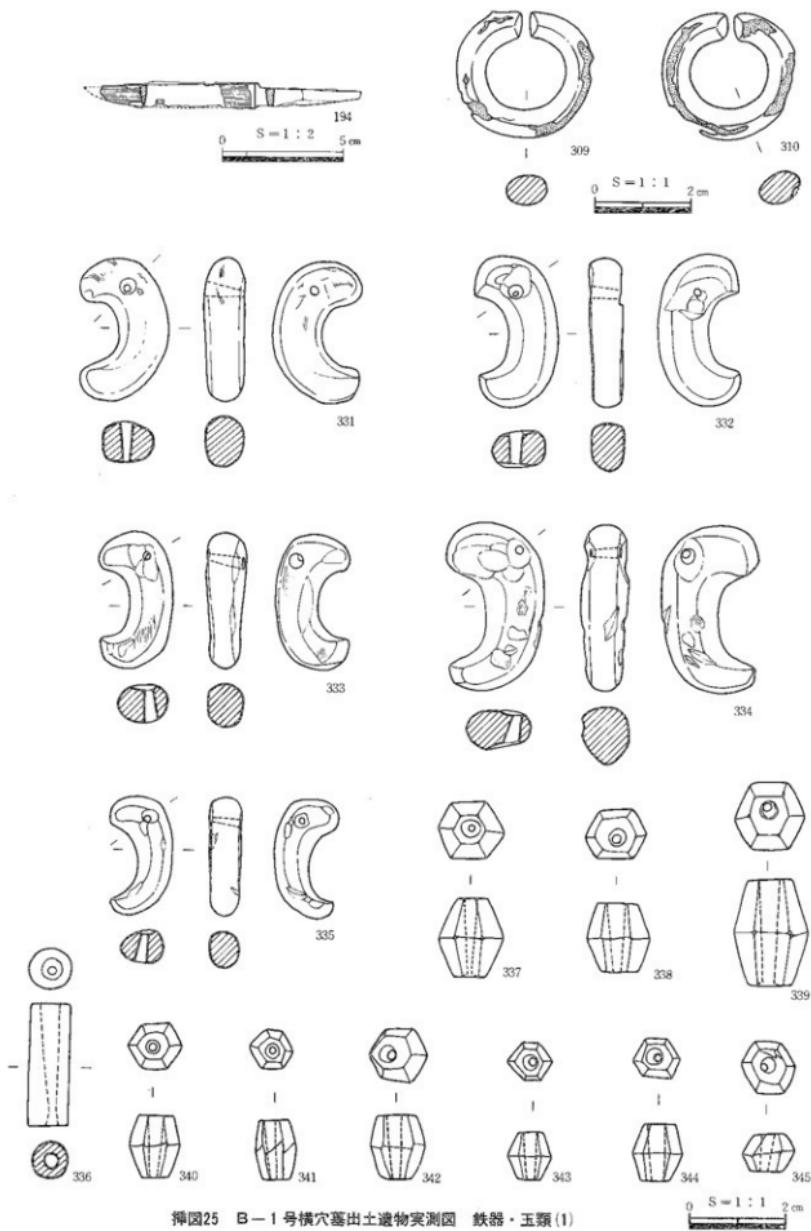
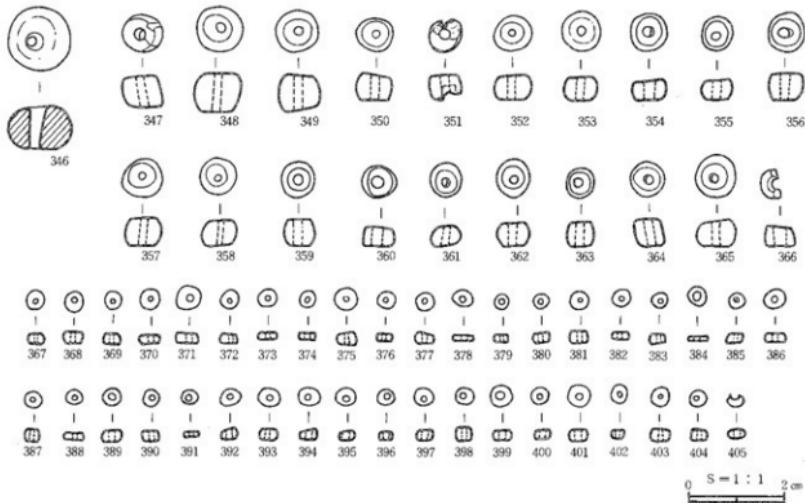


插图25 B-1号横穴墓出土遗物实测图 铁器・玉類(1)



挿図26 B-1号横穴墓出土遺物実測図 玉類(2)

れた。平面形は、谷側が斜面となるため半円形を呈する。床面は北側で基盤ブロックが露出し、凹凸が著しく、掘りっ放しの印象を与える。性格は不明であるが、隣接するB-2号横穴墓後背でも同様のテラスが検出されている。遺物は、埋土中上層より須恵器壺片が出土した。

遺物

前庭中央付近で、須恵器高杯29・30が2点横倒しの状態で床面から出土している。

出土状況

玄門では、最も玄室側で大型の提瓶34が通路を塞ぐように横転した状態で検出された。二次的に移動したものとも考えられるが、C-1号横穴墓においても狭道直前に大型平瓶が据えられており、埋葬行為の終了を意味して置かれた可能性が考えられる。また、提瓶33が34に乗っかるように床面より浮いて検出されたが、前庭埋土の流入土上に乗っており、玄室が湧水の為水没した際に移動したものと考えられる。

玄室内には、口頭部を欠損する横瓶35と口縁を欠く中型壺36が須恵器屍床として割り散かれていた。この他に第四象限側壁際に脚部を一部欠く高杯31、玄室左側中央に直口小壺30、壺32が検出された。これらの須恵器はすべて床面直上におかれしており、湧水による移動も考えにくうことから最終埋葬時の位置を保っている可能性がある。須恵器以外には須恵器壺片に混じって玉類、耳環、鉄製刀子が出土した。ただし床面には、湧水による泥土が堆積しており、小玉類はフルイで検出したもので、出土位置を確定できないものが多い。刀子194は第四象限より出土し、唯一の鉄製品である。銀環309・310は玄室中央と第一象限壁際で約60cm離れて出土した。玉類の内訳は碧玉、メノウ製勾玉が5個、碧玉製管玉1個、水晶製切子玉9個、水晶製丸玉1個、ガラス小玉は大、小60個以上が出土した。玉類の出土の仕方には殆ど規則性は認められなかったが、第一象限を中心に散乱しており、耳環の出土位置とも併せて考えると、少くとも1体は玄室右側で頭を奥壁側に向けていたものと思われる。

時期

B-1号横穴墓では須恵器蓋杯が出土しなかったため、他の器種でみると提瓶、壺が比較的古相を示し、大塚山土器編年の1期に属すと考えられることから、1期に築造され、少なくとも2期まで追葬が行なわれたと推定される。

(中原 齊)

2、B-2号横穴墓(挿図27~35、図版9~11・34~37)

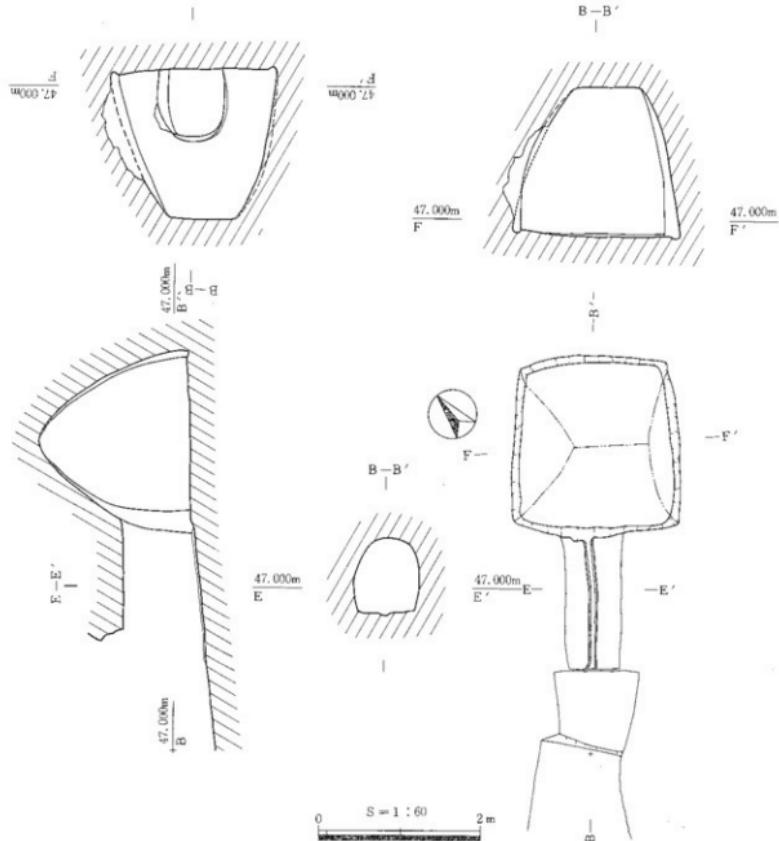
- 立 地** B-2号横穴墓はB-1号横穴墓の東南方向に隣接し、主軸間では約3.5mの間隔がある。主軸はN-47°-Eで、南西方向に開口している。ただし、羨道、玄室は前庭より北寄りに折れて掘り込まれている。そのため、羨道、玄室については主軸とは別に、N-37°-E方向の軸(羨道・玄室軸、B-1B)を設定した。本横穴墓は傾斜角約30°の比較的急な傾斜の山腹に掘り込まれており、主軸上では、前庭前端の標高46.01m、尾根上との比高差が約5.6mある。
- 前 庭** 前庭は、主軸上で長さ4.36m、前庭前端で幅2.10m、前庭奥壁側で幅1.00mの広さがある。右側壁は岩盤が露出しており、これに制約されて平面形態、横断面形態ともいびつである。一方、左側壁、奥壁は丁寧に整形されており、掘りかたに向けてほぼ直線的な傾斜で立ちあがる。床面も平坦によく加工されており、前庭の横断面形は明瞭な逆台形を呈す。前庭埋土の堆積状況から、最終埋葬後、少なくとも閉塞施設が完全に埋まる程度(Ⅲ層)まで埋め戻したものと考えられる。また、ブラック・バンド(黒色土層)中やその直下のⅣ層中における大量の須恵器斐片は、側壁寄りよりも土層の最もたわんだ中央付近を中心に、尾根方向から前庭前端方向までまんべんなく混在しており、これらの各層が須恵器斐片をともないながら尾根上方から流れ落ちて隙々に堆積した可能性を示している。なお前庭埋土の堆積状況には追葬をうかがわせる痕跡は認められない。
- 羨 道** 羨道は、前庭奥壁の左側壁を袖状に掘り残しており、床面は前庭床面より僅かに2cm程度高くなっている。前庭から続いて谷側に向けて約5°の傾斜をもって降っている。正面観は隅丸方形を呈すが袖自体は約70cm立ち上がったところで奥壁に解消してしまう。くり抜き部分の最大幅は1.16m、最大高は1.30m。奥行きは床面主軸上で0.90mあるが、天井部ではわずか0.10m程度しかない。排水溝等の施設は認められない。
- 閉 塞** 閉塞は羨道と玄門の境で行なわれている。人頭大の岩盤ブロックが3個、羨道の奥寄りの床面においてかれていること、前庭埋土が羨道から玄室内まで流れ込んだ状況を示していることから、木質は検出されなかったが、木蓋で閉塞していたものが腐朽して現存しないと考えられる。蓋受けの溝は認められなかった。
- 玄 門** 玄門は、玄門正面壁を袖に掘り込まれ、羨道より10cm高くなっている。全長は床面の玄室・玄門軸上で1.60mを測り、羨道側の最大幅は、0.72m、最大高0.98m、玄室側の最大幅は0.85m、最大高0.86mとなる。玄門床面には中央に幅約10cm、深さ約3cmの断面U字形の排水溝が走り、玄門の横断面形は釣鐘状を呈する。
- 玄 室** 玄室の平面形態は、前壁側幅より奥壁側幅の方がやや短く、正方形に近い台形状を呈する。前壁側幅は2.03m、奥壁側幅は1.79m、玄門・玄室軸上で玄室長は2.22mである。床面壁沿いには幅約10cm、深さ約4cmで断面不定形の排水溝が巡り、玄門との境付近で玄門排水溝へ合流する。床面はわずかに傾斜しており、玄室奥壁沿いの床面の標高46.85mから玄門に向けて傾斜約3°のスロープをえがく。一方、玄室の立面形態は、天井と壁の区別のない断面三角形で、棟線が羨道・玄室軸とほぼ直交し、平入りに玄門がつく。床面から棟までの最大高は1.86mある。しかし、棟線はそれほど明瞭に画されておらず、また他の棟線も直線的ではなく、床面各コーナーから外湾気味に立ち上がっている。結果、棟線に平行する縦断面形態もやや弛緩した台形状を呈する。左壁が一部崩落している以外は遺存状態は良い。
- 櫛 床** 床面の奥壁寄りほぼ半分には、玄門、玄室掘削によって生じた基盤層の流紋岩質の小礫が散かれていた。こぶし半分の大変もろい角礫であるが、遺物、人骨などは全てこの礫上にのっていることから櫛床と判断した。また、第一象限奥壁際には人頭大の角礫が二個、第四象限前壁寄りにはそれよりやや小ぶりの角礫が二個あり、それぞれ棺台の可能性も指摘されるが、木棺材等の遺存は認められず

また釘の出土もなかった。

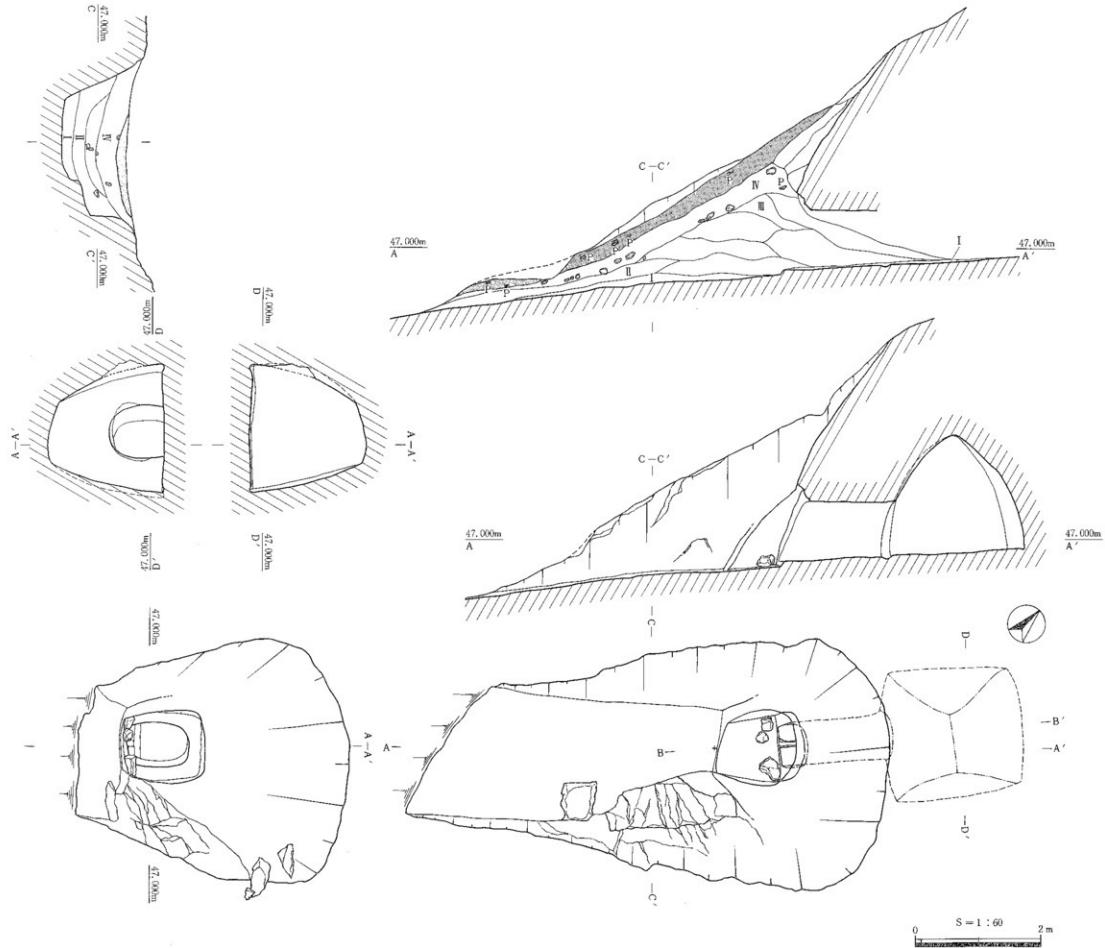
後背周溝 B-2号横穴墓の後背尾根上では、推定長径約6.0m、短径4.0mの墳丘と周囲に巡る周溝を検出した。

墳丘 墳丘はほぼ橢円形を呈していたと考えられ、旧地表を平坦に加工した後盛土を行なっている。盛土は現存で最高45cmを測り、全体的にB-2号横穴墓に向けてやや傾斜して降っていく。現存する墳丘の最高点の標高は51.75mである。周溝は幅1.0m~2.0m、深さは0.2mを測り、断面形状は浅い皿状を呈している。周溝の掘り方は南東は比較的丁寧に加工してあるが、北側、北東側は粗雑で、形も不整形で、北側にいたっては明瞭な掘り込みは確認できなかった。周溝の底面から少し浮いた状態で須恵器壺片が出土しており、B-2号横穴墓前庭埋土上層より出土した壺63の一部である可能性が強い。

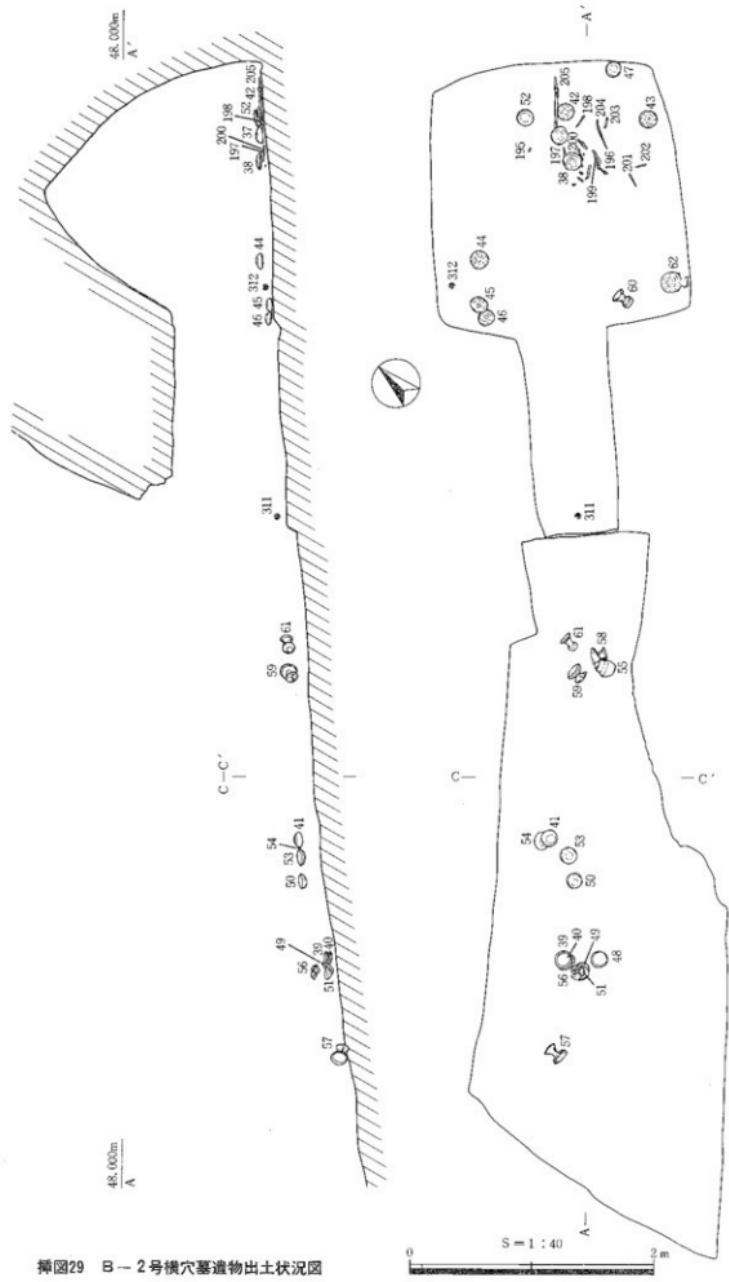
人骨 玄室ほぼ中央の櫻床上から数点の骨片が出土したにとどまる。人骨の遺存状態が極めて悪い理由の



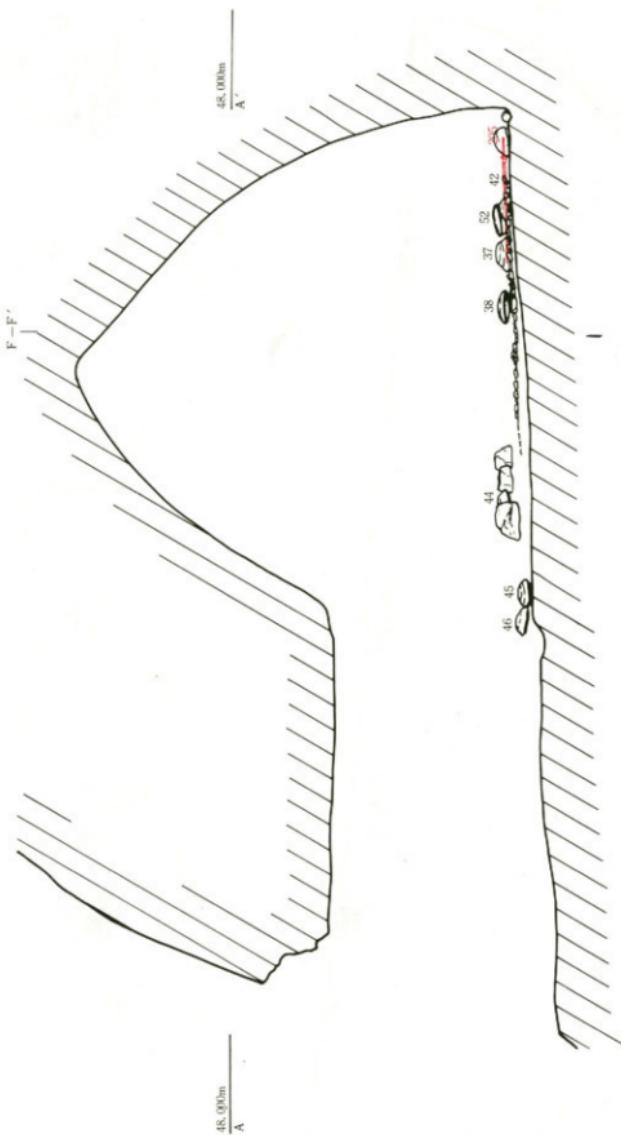
挿図27 B-2号横穴墓玄室遺構図



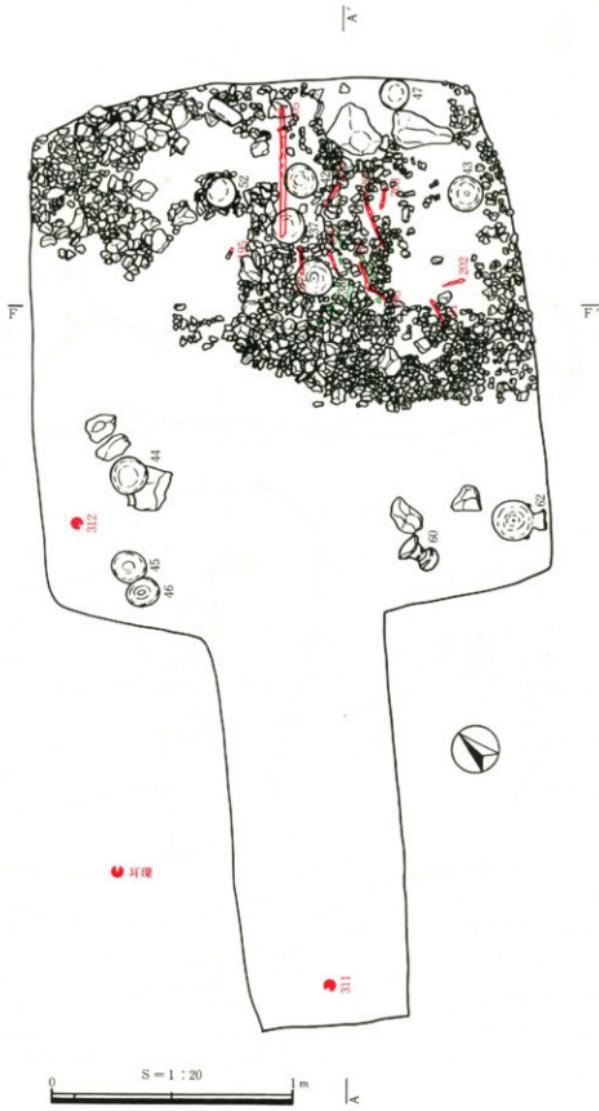
擇図28 B-2号横穴墓遺構図

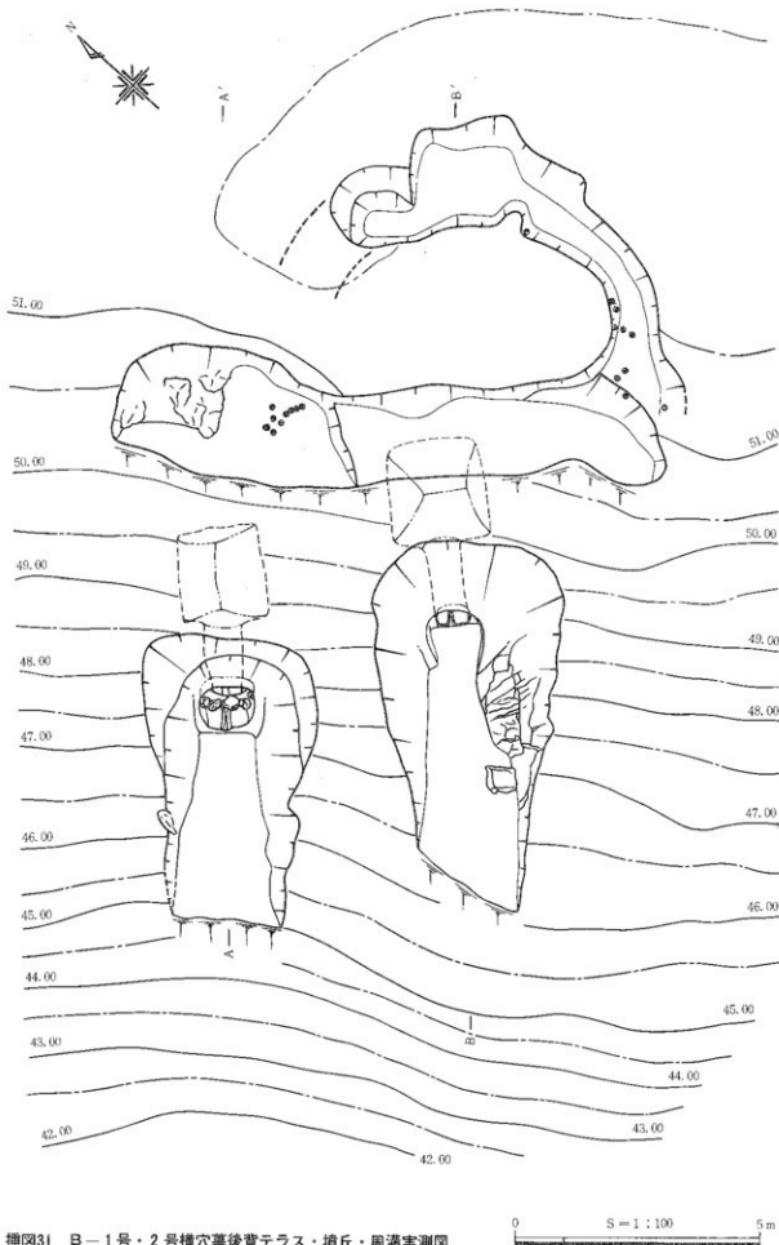


挿図29 B-2号横穴墓遺物出土状況図

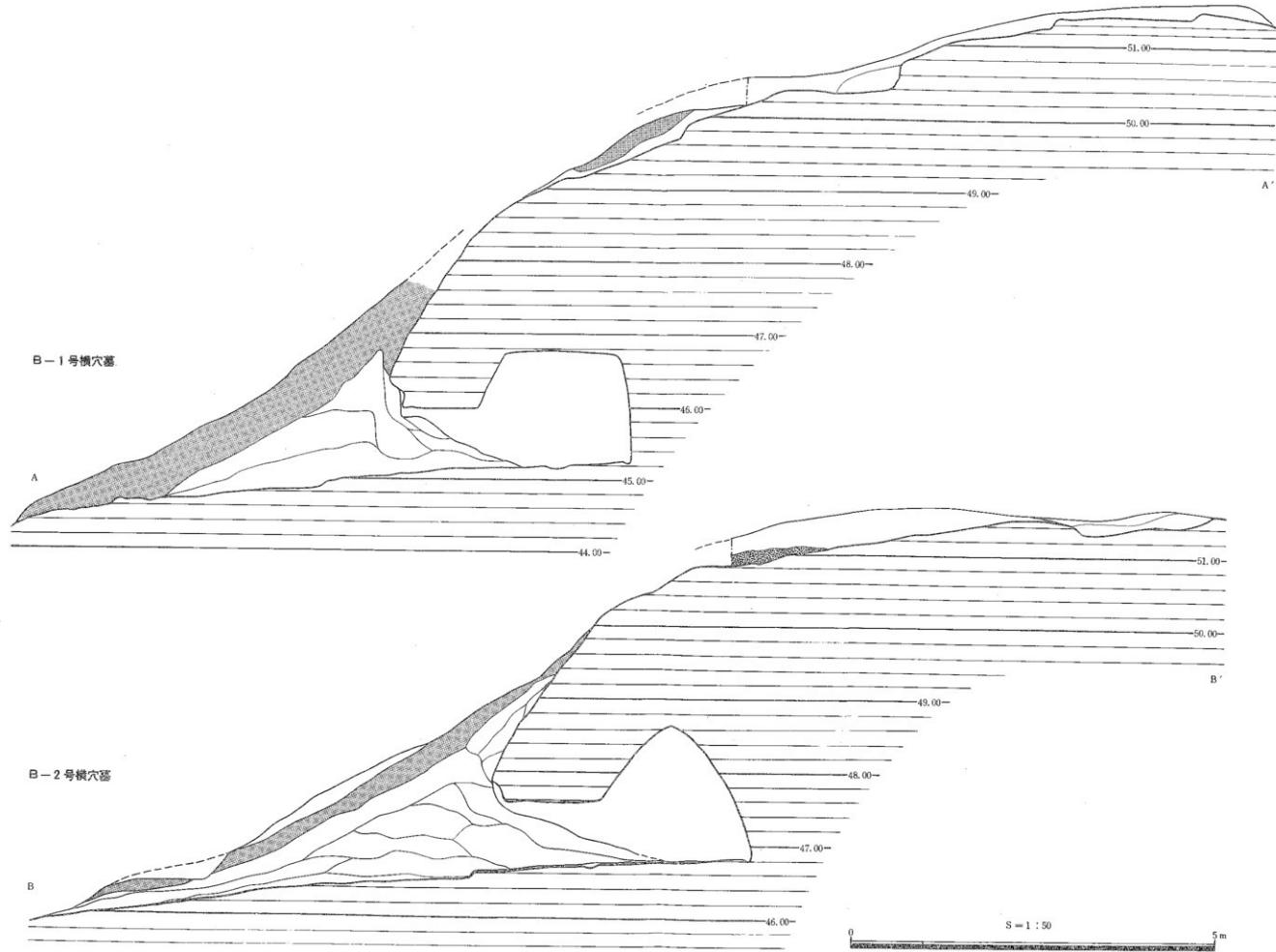


挿図30 B-2号横穴墓玄室内遺物出土状況図





挿図31 B-1号・2号横穴墓後背テラス・培丘・周溝実測図



拓図31 B-1号・2号横穴墓 後背テラス・堤丘・崩落測定図

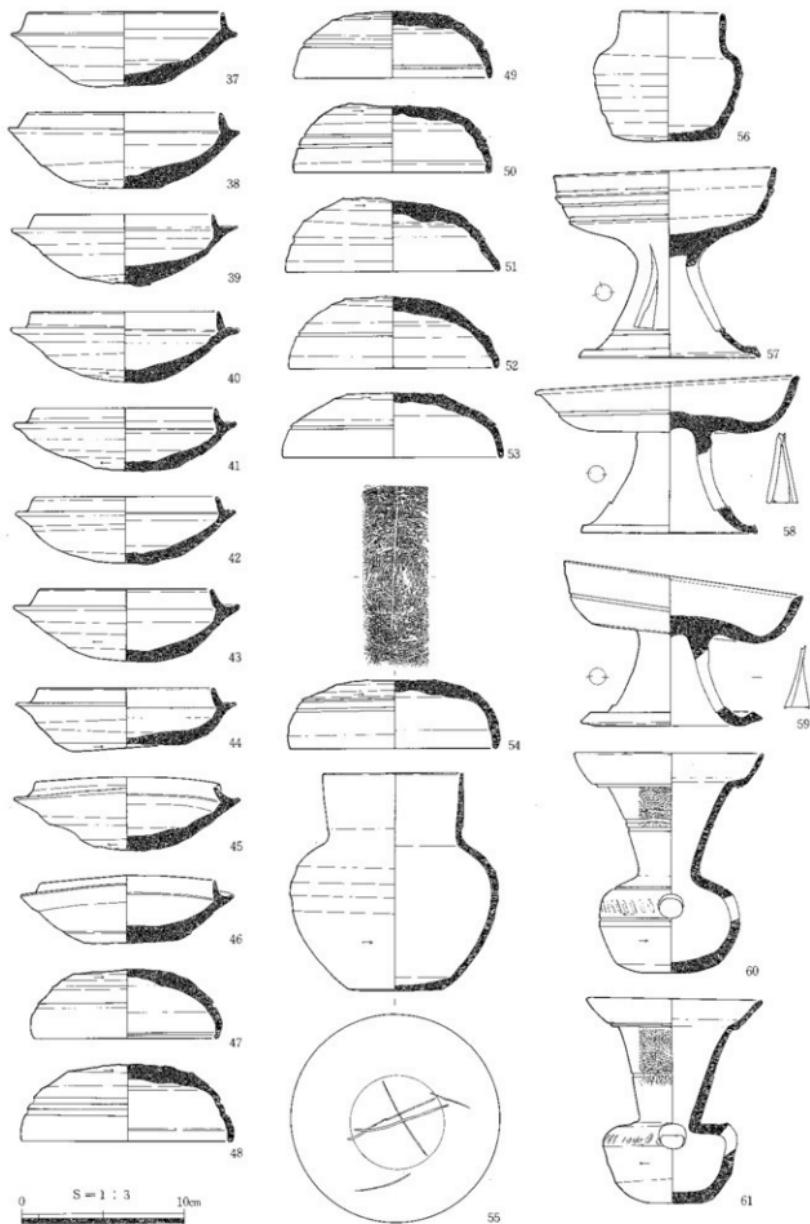
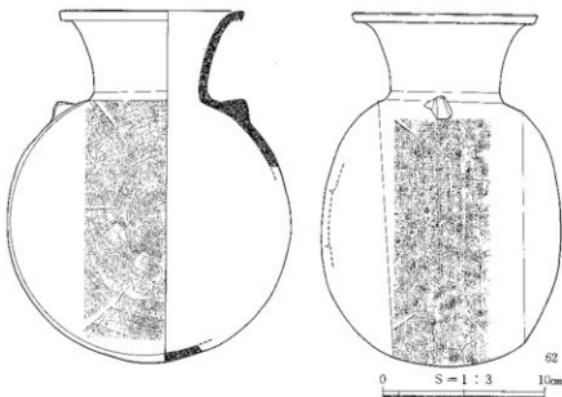


插图32 B—2号横穴墓出土遗物实测图 土器(1)



插図33 B-2号横穴墓出土遺物実測図 土器(2)

一つとして、玄室壁面に水位を示す界線が巡っていることから、玄室の水没を考えることが可能であろう。

遺物 前庭からは、須恵器の蓋杯、高杯、直口壺、小形壺、甌が出土しているが、小形壺56以外はすべてあろう。
出土状況 I層上面の出土である。また、羨道、玄室内からは、須恵器の蓋杯、甌、提瓶、鉄製直刀、刀子、鉄鏃、耳環が出土しているが、礎床上の遺物以外はすべてやはりI層上の出土である。礎床自体、I層上に敷かれていること、I層が色調、堅徳さなどにおいて基盤層と区別して近似することから、初葬時にすでにI層上面を床面としていたと考えられる。ただし、小形壺56については、II層上部に含まれされることから、追葬時の遺物である可能性もある。

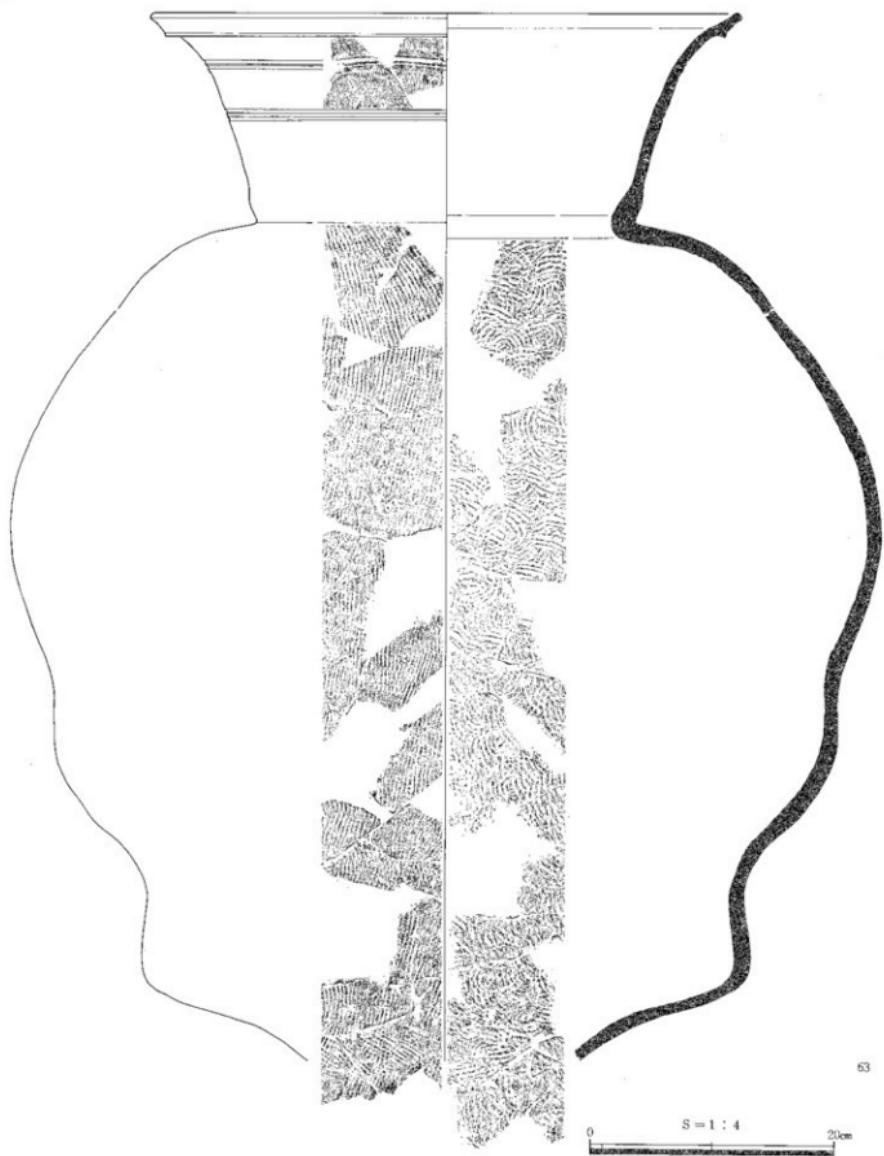
前庭の須恵器は、大きく四群に分かれて、前庭前端近くから羨門付近まで群在する。最も羨道寄りの一群は、蓋杯をともなわず、高杯58・59に加えて、他群にはない甌61、直口壺55を含むという特徴がある。これより谷側には約1m離れて杯身41、杯蓋50・53・54の群、小壺56、杯身39・40、杯蓋48・49・50の群、一点だけ離れて、高杯57の二群が認められた。

一方、玄室の遺物も大きく三群に分けられる。このうち、鉄器はすべて玄室第一象限に集中して出土しており、直刀205は切先を玄門に向けており、上に杯蓋37がのっていた。また、刀子、鉄鏃の散乱状況からそれらが原位置を保っていると考えることは難しい。玄門流入土上で小動物の巣が見つかったことも念頭におく必要がある。これらの鉄器と混在して、須恵器杯身37・38・42・43、杯蓋47・52が出土した。いずれも杯身は伏せて、杯蓋は裏返されていた。第二象限には杯身44～46が伏せた状態で出土しており、耳環312は玄門前端から出土した311とセットである。第四象限では、口縁の一部を欠いた甌60、提瓶62が蓋杯類とは離れて出土している。

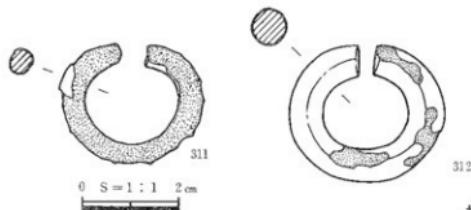
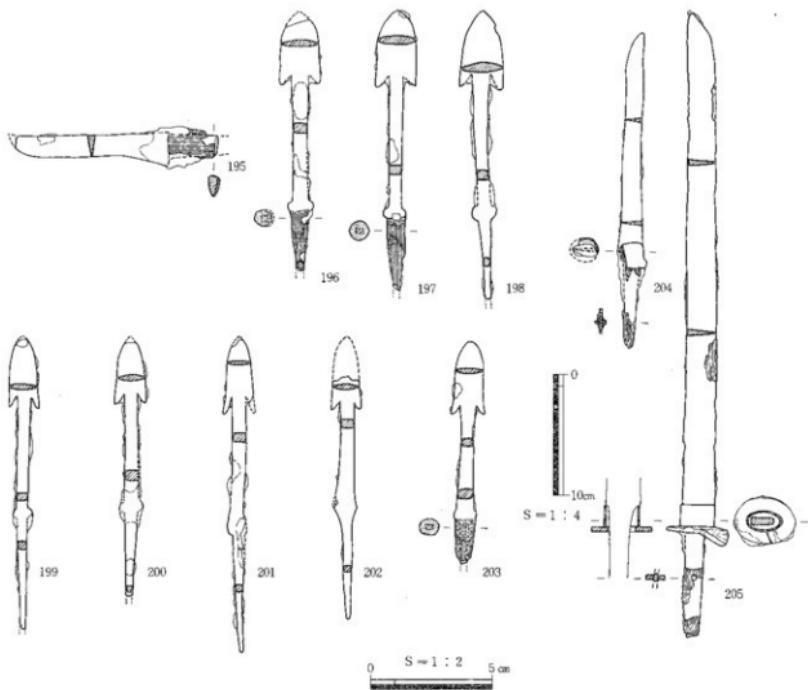
なお、前庭埋土のブラック・バンド（黒色土層）とIV層中から出土した須恵器片は、大壺63に復元された。

時期 出土した須恵器からみると、大塔山土器編年の中期～後期の二時期が認められる。従って、B-2号横穴墓の築造時期は中期と考えられ、以後、数次の追葬が行なわれたと考えられる。

(松井 潔・西浦日出夫)



插図34 B—2号横穴墓出土遺物実測図 土器(3)



插図35 B-2号横穴墓出土物実測図 鉄器

3、B-3号横穴（挿図36、図版11）

立地

B区の横穴の中で最も南側に位置し、傾斜32°の斜面で検出されている。B-1、2号横穴墓の検出されたB区のやや内湾する斜面からは少しほれれる。造構の谷側端部は、第1次試掘調査のトレンチ(1-1T)によって削られているが、残存する造構の谷側端部は標高45.50mで、尾根からの標高差約6mを測る。造構の主軸はN-39°Eである。

造構

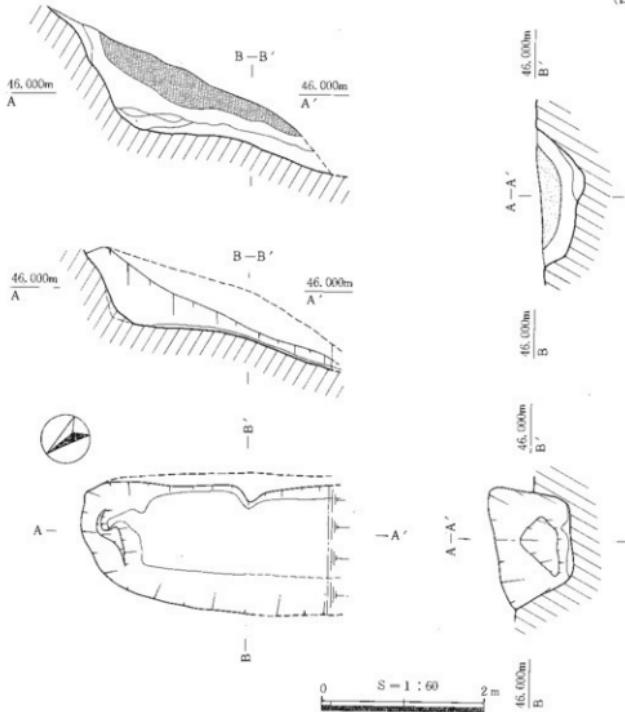
現存する造構の規模は、造構確認面では谷側端部の推定幅1.70m、現存長3.04mを測る。基盤層からの掘り込みの最深部は0.9mである。底面は最大幅1.02m、長さ2.30mを測る。底面は奥から谷側に向って1.15m地点までは傾斜4°で緩やかに降っている。それ以後傾斜18°と少し急に降っていく。最奥部には幅30~10cm、奥行40cm、深さ90cm程度の舌状の掘り込みが見られる。底面は比較的平坦で、奥壁は掘削途中のためか凸凹が見られたが、側壁面は比較的平滑である。

遺物

造構内で遺物は検出されなかった。

造構の性格としては、立地が山の斜面であること、掘りかたが横穴墓の前庭に類似していること、ほぼ同じ斜面にB-1、B-2の各横穴墓が築造されていることなどから、横穴墓の築造途中で放棄された未完成横穴と考えられる。規模が他の未完成横穴と比べて極端に小さいことから、横穴墓築造のごく初期段階で放棄されたものと考えられる。築造途中で放棄した理由については不明である。

(西浦 日出夫)



挿図36 B-3号横穴造構図

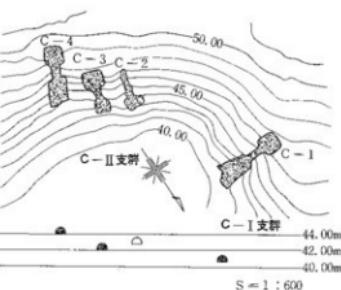
第3節 C区の横穴墓

概要 大塔山C区では北側の内湾する急斜面と南側のやや傾斜の緩い斜面に、I～IIIの3小支群9基の横穴墓を検出し、北側からC-1～C-9号横穴墓と呼称した。

C-I 小支群 C-1号横穴墓はA小支群の尾根を挟んで裏側に位置している。C-1号横穴墓より南側には、主軸間で12m離れたC-2号横穴まで横穴墓はみられなかったが、調査区に隣接している高圧鉄塔建設の際、横穴墓に伴うと考えられる溝状遺構が米子市教育委員会により確認されており、横穴墓群は北側へ広がっている可能性が考えられ、これをC-I小支群とした。

C-II 小支群 C-2号横穴は途中放棄された未完成横穴であり、東2mにはC-3号横穴墓がある。C-3号横穴墓の南側にはC-4号横穴墓があり、両者は主軸間で5.5m離れている。以上3基の横穴、横穴墓をC-II小支群とした。高低差でみるとC-3号横穴墓が最も低く、C-4号横穴墓はこれより2m高い。C-II小支群は約45°の急斜面の中腹につくられている。

C-III 小支群 C-5～9号横穴墓はC区南側の緩斜面に主軸間で5～6mの間隔を持って隣接している。最も南側のC-9号横穴は途中放棄の未完成横穴であり、これより南側は横穴墓が築造されておらず、これらをC-III小支群とした。高低差でみると未完成のC-9号横穴が最も高いが、後の4基はC-5号からC-6号が0.8m、C-6号からC-7号が0.5m高くなり、C-7号とC-8号はほぼ並んでいる。C-5号からC-7号横穴墓は基盤層が軟弱で玄室天井等が大きく崩落していた。また、C-5、6号横穴墓は平安時代に盗掘を受けたようである。



挿図37 大塔山横穴墓C-I・II小支群位置図

1. C-1号横穴墓(挿図38～44、図版12・13・38～40)

立地 C区北側の内湾する東斜面に築造され、C区の横穴墓中最も北側に位置する。本調査に先立つ試掘調査において、C-15Tにより横穴墓の存在が確認された。谷側端部の標高は40.27mでC区尾根上より約6.23m下である。前庭主軸はN-90°-Eで、真東に開口する。

前庭 前庭は床面で長さ3.75m、幅は谷側端部で3.06m、前庭奥壁側で1.85mを測る。床面の平面形は基本的には長台形を呈するが、谷側端部は丁寧な加工はみられず不整形で、ほぼ中央が舌状に飛び出す平面形となっている。床面は2段に加工され、10～15°の傾斜で羨道へ向かい緩やかに上り、よく加工されて凹凸が少ない。中央部やや右よりに僅かな窪みがある。前庭側壁は粗く加工され、横断面形は不整な逆台形を呈す。基盤層への掘り込みは、最も深い前庭奥壁側で床面まで3.55mに達する。前庭奥壁の下位中央に羨道が掘り込まれている。

前庭埋土は、砂質土層(I・III層)と枯質土層(II層)が互層状に堆積する土層と、自然堆積と考えられるブラック・バンド(黒色土層)となる。I層は5cm大の地山ブロックを多量に含み、後述するように羨道直前に完形となる須恵器平瓶が押し潰されたと思われる状態で検出されたことなどから、前庭は最終埋葬終了後埋め戻されたものと考えられる。羨道付近でI・II層は羨道に向かって流れ込んでおり、埋め戻し後閉塞施設(木蓋?)が腐朽し、前庭埋土が玄門部へと流入したものと考えられる。前庭埋土には追葬が行なわれた形跡は認められなかった。

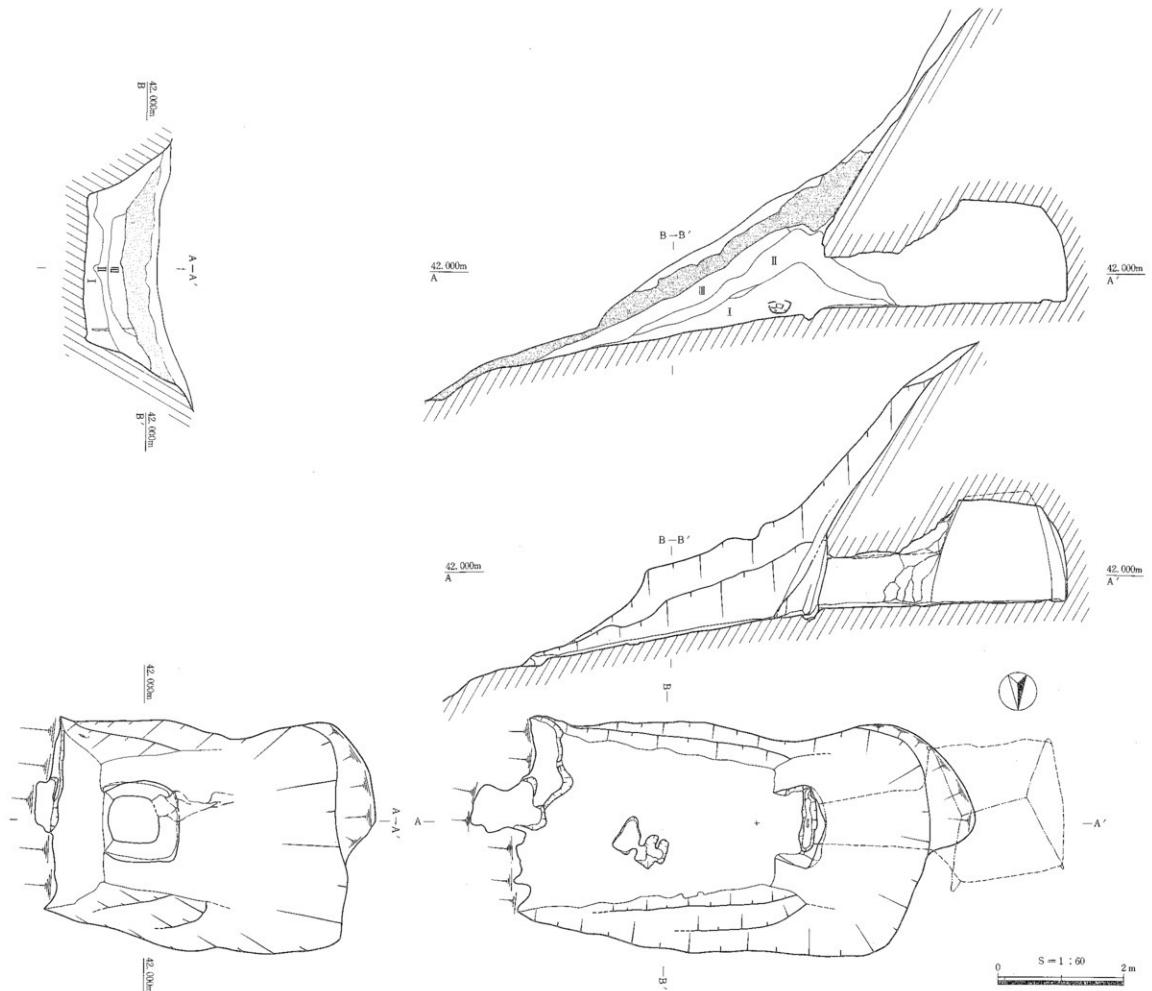


插图38 C-1号横穴墓造模图

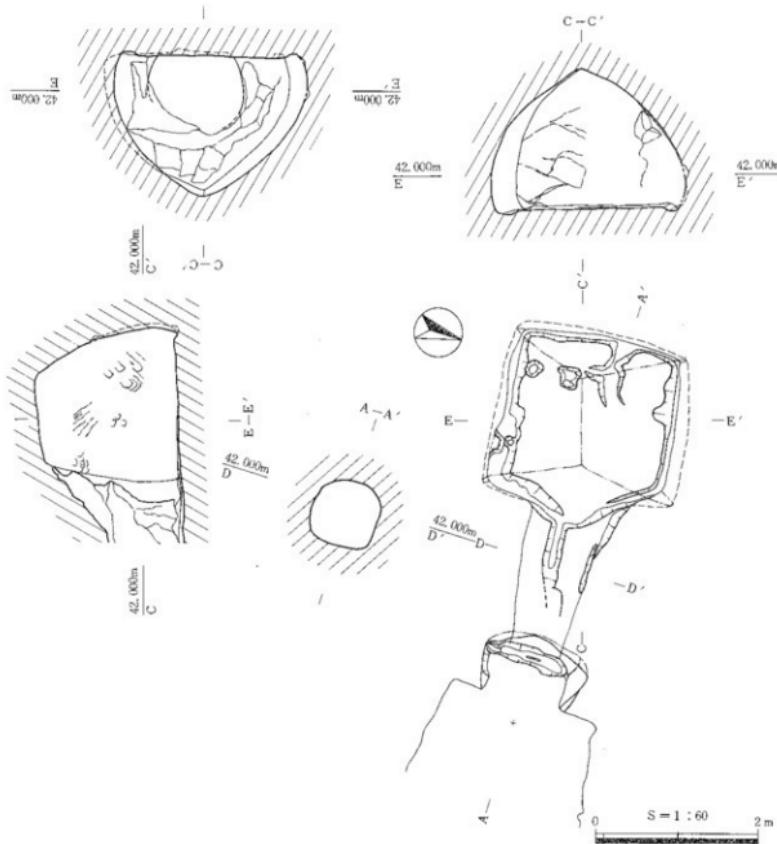
羨道

羨道は前庭奥壁の左・右両側を袖状に掘り残し、幅0.95~1.30m、高さ1.20mの正面観溝九方形に削り込んでいる。前庭床面との間には段差は認められない。床面の幅0.90m、奥行は側壁沿いで0.48mあるが、袖部自体は床面から0.20m立ちあがった付近から除々に玄門側に奥行をせばめ、約1.5mの高さで前庭奥壁に解消している。天井部は僅か0.08mの実行を測るのみである。

玄門直下には主軸に直交して長さ105cm、幅24cm、深さ10cmの断面U字状の溝があり、中央部を更に長さ2cm、幅13cm、深さ2cm掘り込んでいる。閉塞はおそらく木蓋の類を溝にはめ込み、玄門正面壁に立てかけたものと考えられる。蓋受の刺し込みや、閉塞の押え石の類は認められなかった。

玄門

玄門床面は、羨道床面より約5cm高くなり、長さ1.90mを測るが、羨道側最大幅0.60m、最大高0.80m、玄室側最大幅0.95mで、玄室側ほど幅が広くなっている。床面には玄門付近中央部に主軸に平行して、幅20cm、深さ5cm前後の断面U字状の玄室から続く排水溝が掘られているが、羨道部までに



擇図38 C-1号横穴墓玄室造構図

は達していない。床面と側壁の境は明瞭ではなく、横断面は丸味をおびる釣鐘状を呈する。天井部は玄門付近で大きく崩落している。

玄室

平面は、左側壁際で長さ2.10m、幅は玄門側で2.10m、奥壁側で1.95mを測るが、玄門側は玄門中央の排水溝に向けて突出しており、排水溝の合流点から奥壁までの奥行は2.43mとなる。平面形は正方形を基本としながらも実際には不整な五角形を呈している。玄室の立面形態は天井と壁の区別のない断面三角形で、高さ1.75mを測り、妻側に玄門がつく。床面壁際には幅10~20cm、深さ5cm前後の断面U字形の排水溝が巡り、先述した玄門中央の排水溝に続く。床面はほぼ水平である。横断面形をみると両側壁が強く外湾して立ち上り、床面より0.3mの所で内傾して棟線へ至っており、最も広い部分で床面幅より広く2.40mを測る。断面三角形とは言え、釣鐘状を呈している。縱断面をみると、横断面と同様、奥壁は外湾気味に立ち上がり、床面より0.25mの所で最も張り出し、続いてやや外湾気味に内傾し棟線に至る。棟線は開口方向より17°北へ振れ、玄室床面主軸ともずれを生じている。前壁は崩落しており、遺存状態は良好とは言えないが、左側壁の中央部から奥壁側にかけて幅3~7cmの工具痕が明瞭に残っている。

碌床、木棺

玄室右側に1~10cm大の基盤ブロックの角礫が散かれていた。そのうち右側壁際の部分で幅2~3cm、長さ90cmにわたり礫が溝状に散かれていなかった。玄室内からは鉄釘が出土しており、これを考慮すると、この溝状の部分は木棺材の痕跡と思われ、礫は木棺内にも散かれていた可能性がある。木棺の規模等は不明であるが、出土した鉄釘の中には木目方向が異なる木質が付着したものもあり、この木棺は組み合わせ式であることが想定される。木質の観察によると、木棺材の幅は3.5~4.8cm(平均4.1cm)である。木棺材の幅は差異が認められること、また、鉄釘にも大小が認められることにより、木棺は使用部位により厚さが異なり、それに合わせて鉄釘も使い分けられた可能性が考えられる。木棺の材質はヒノキと考えられる。

棺台

玄室左側には、人頭大の角礫が前壁側に1個、奥壁側に47cmの間をあけ2個置かれていた。前壁側の礫と奥壁側の礫の間は120cmである。前壁側にはもう1個の角礫があったと考えられるが、前壁の崩落土との区別がつかず除去してしまった。これらの礫の並び方を見ると、棺台に使用されたものと考えられる。

人骨

玄室内からは、2体分の人骨が検出された。玄室中央部や右側の人骨は壮年男性で、中央部や左側に見られた人骨は熟年女性と考えられる。双方とも原位置を保っているとは考えられず、集骨行為により二次的に移動されたものと思われる。

後述するが、玄室左側の棺台と考えられる場所には直刀が置かれており、壮年男性骨が本来この場所にあったものと思われる。

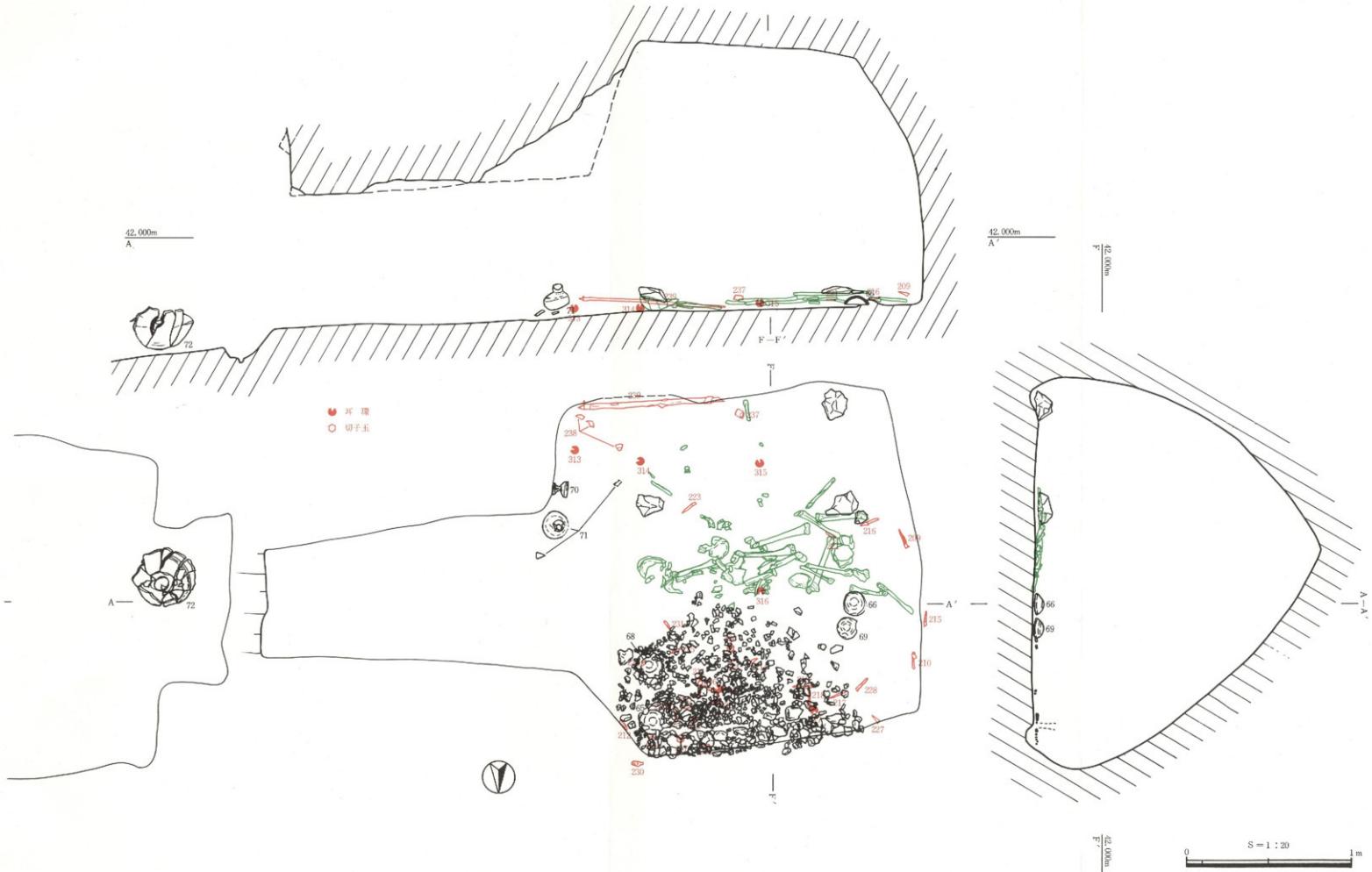
また、玄室内より耳環が3セット出土していることから、3体分の埋葬があった可能性もある。

遺物

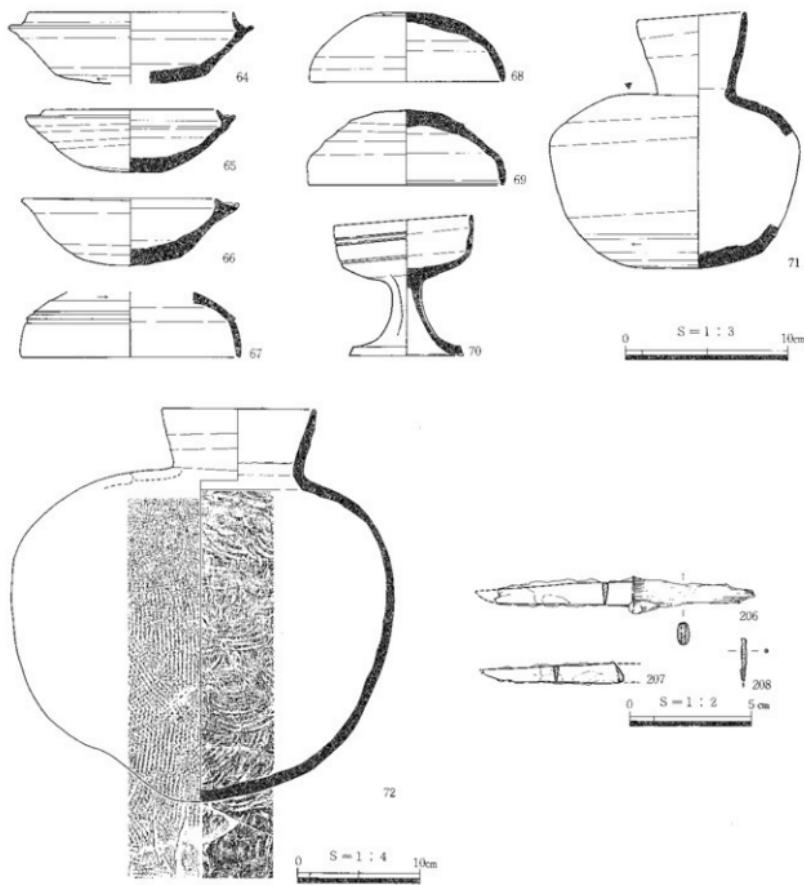
遺物検出前の表土ハギ作業中、須恵器杯身片64、杯蓋片67が出土した。これらは、C-1号横穴墓出土状況に伴うものではなく、他所から混入したものである。

前庭からは、狭道の床面上から須恵器大型平瓶72が、埋め戻しの際上圧で押し潰された状態で検出された。この土器は最終埋葬に伴い前庭に据えられたものと考えられる。

玄室内からは、左側玄門付近より小型の須恵器平瓶71が、床面よりやや浮いた状態で、また、玄室第三象限前壁際で須恵器高杯70も、床面から浮いた所で横転した状態で検出された。71の下からは口縁部に当る部分が出土しており、なんらかの影響で動かされており原位置を保つものではない。第四象限からは、木棺内に散かれたと思われる礫に埋もれるような状態で須恵器杯身65、杯蓋68が並んで検出された。65は伏せた状態であった。これらは、木棺内と思われる箇所で土器枕として利用されたものと考えられる。第一象限では、須恵器杯身66、杯蓋69が並んで検出された。69は伏せた状態であつた。



挿図40 C-1号横穴墓遺物出土状況図



插図41 C-1号横穴墓出土遺物実測図 土器・鉄器(1)

須恵器の他には、直刀、刀子、鉄釘、耳環、切子玉が出土している。直刀239が第三象限左側壁に沿って切先を奥壁方向に向け刃を左側壁に向かした状態で検出された。直刀周辺には鐸238が破損した状態で、また、切先側には軸尻237が検出された。また、木棺内と考えられる箇所で刀子206が検出された。他に玄室内耕土中より刀子刀身部だけのもの207が検出されたが、出土地点は不明である。

鉄釘209~236は、木棺が置かれたと考えられる箇所に密着しているが、かなり散乱した状態で検出された。完形となるものが17本、破片が11個体分である。このうち、出土地点と接合関係が確認されたものは、213の1本である。213は2つの部分からなり、それぞれ約60cm離れていた。

耳環は玄室内より6個出土した。313・314は第三象限、315・316は第二象限、317は第一象限、318は第四象限からそれぞれ検出された。大きさ等により、313と314、315と316、317と318が対となるが、明らかなセットとして検出されたものではなく、追葬時人骨集骨の際、散乱したものと考えられる。

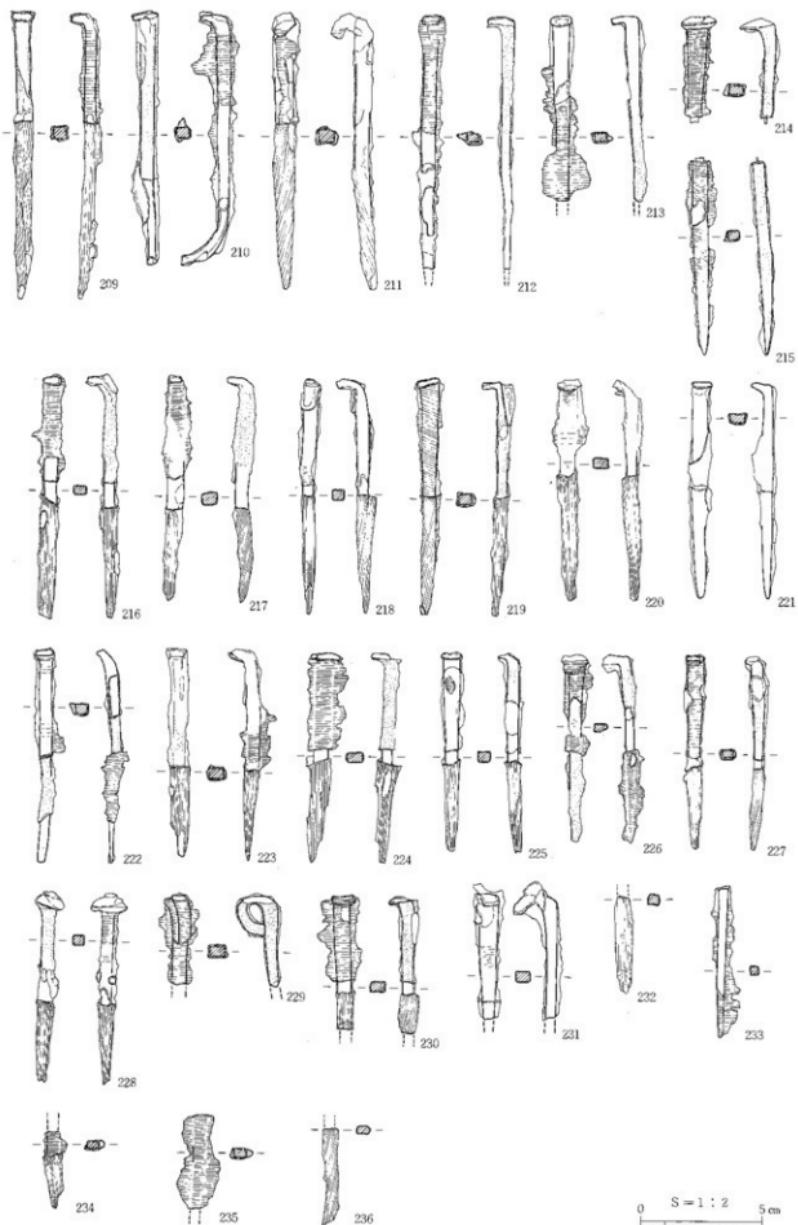


図42 C—1号横穴墓出土遺物実測図 鉄製品

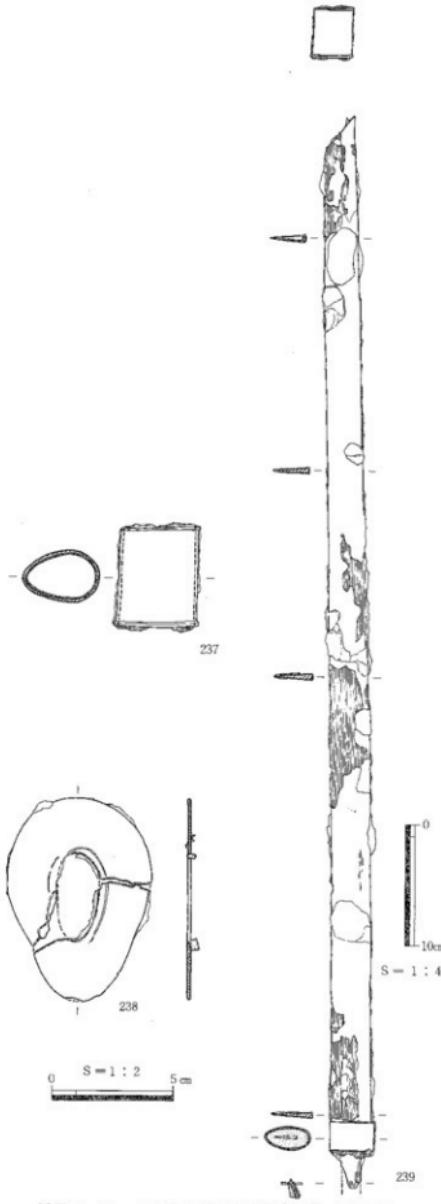
0 S = 1 : 2 5 cm

切子玉は、406・407の2個が第四象限から出土している。406は木棺内に散かれたと考えられる礫上から検出された。407は右側壁際、木棺外の礫の下から検出された。

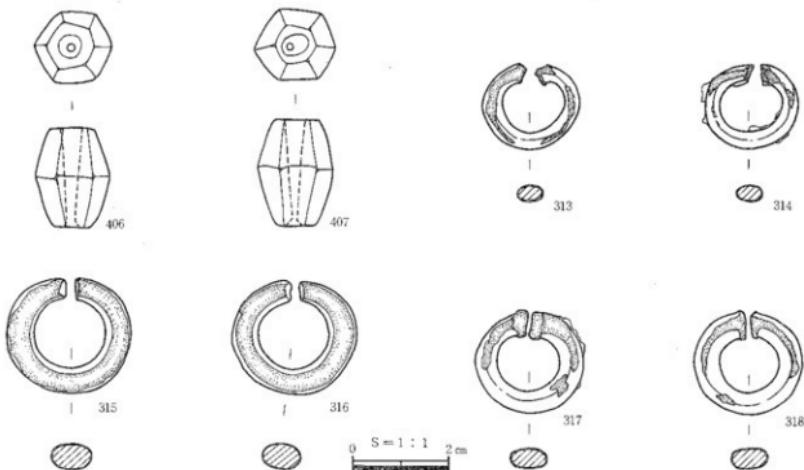
時期 出土した須恵器をみると、玄室内の須恵器はすべて大塔山土器編年3期の特徴を備えており、製造時期もこの時期と考えられる。また、前庭床面出土の平瓶も同時期のものと考えられるが、出土状況よりこの平瓶は最終埋葬に伴つたものと考えられ、形態的特徴が示す時期より下るものと思われる。

(近藤 哲雄)

註 鉄釘の周囲に残存していた木質について
は、鳥取県工業試験場、鳥取大学農学部に
樹種鑑定を依頼した。光学顕微鏡による組
織観察の結果ヒノキと断定された。



插図43 C-1号横穴墓出土物実測図 鉄器(2)



挿図44 C-1号横穴出土遺物実測図 玉・耳環

2、C-2号横穴 (挿図45、図版14)

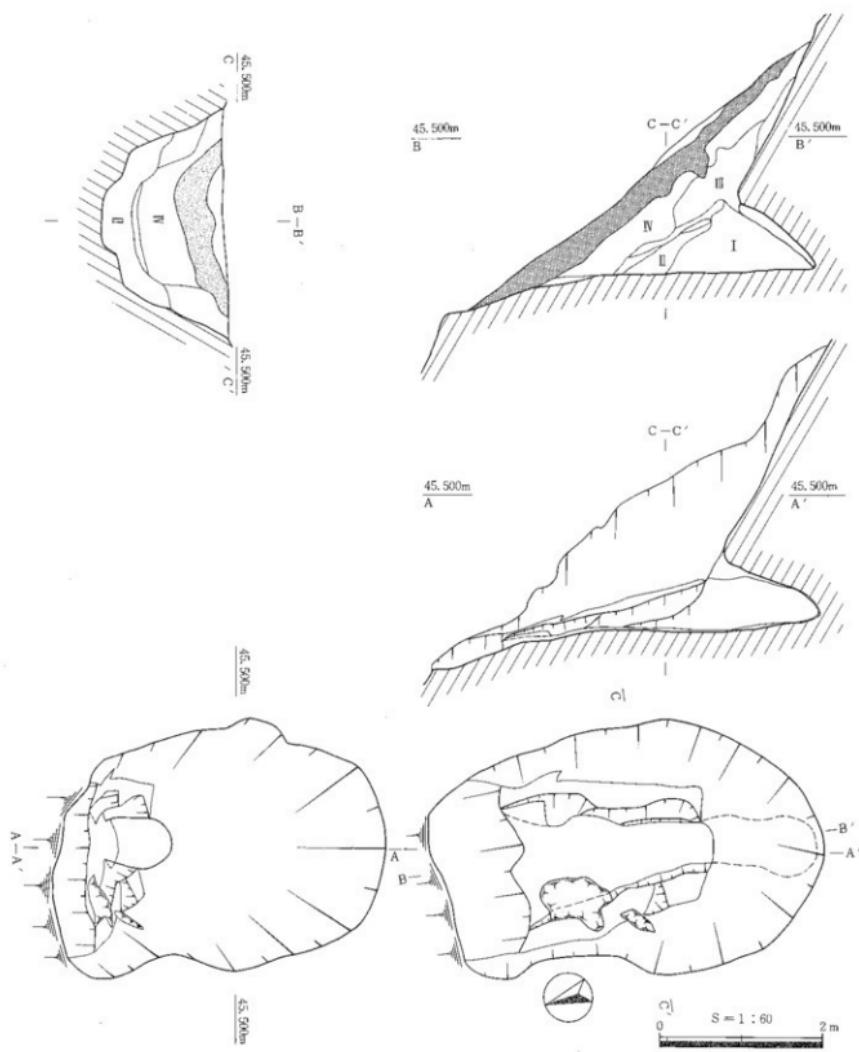
立地 C-II小支群において最西端に位置し、傾斜45°にも及ぶ急傾斜の硬質な岩盤に掘穿されている。造構の谷側端部の標高は42.86mで、主軸をN-20°Wにとる。

造構 造構確認面の規模は、全長4.85m、最大幅3.15mを測り、基盤層への掘り込みは、前庭奥壁側中央が最も深く3.27mを測る。前庭に相当する箇所の床面は、長さ3.50m、幅は奥壁側で1.40m、谷側で1.85mあり、平面形は谷側へ若干広がる長方形に近い台形を呈している。前庭奥壁側から1.5m付近までは平らで20°の傾斜をもって緩やかに降っている。また、奥壁から2.60mまでは両側をステップ状に幅45cm内外、高さ20cm内外を掘り残しており、表面は荒削りのままで、仕上げの加工はなされていない。それより谷側では、ステップにはさまれた狭道部へ続く通路状の掘り込みの床面は、両側と比較して掘削工程が表面を調整する段階にまで至っており、前庭床面になるものと思われる。前庭奥壁は65°の水平斜度をもち良く加工されているが、前庭側壁は凸凹があり、未調整である。狭道部あるいは玄門に相当する箇所を床面で長さ1.25m、最大幅0.75m、最大高0.85m掘った状態で築造を放棄しており、玄室は掘削されていない。狭道に相当する箇所の床面、内壁もほとんど未調整で、最奥部は湧水を伴う硬質な岩盤が露出していた。造構に堆積した各土層をみると、I～Ⅲ層までが0.2～3cm程度の礫を多く含んでおり、堆積状況からも築造放棄後、埋め戻したものと考えられる。その後Ⅳ層、ブラック・バンド(黒色土層)が徐々に堆積したものであろう。

遺物 造構内での遺物の検出はなかった。

本横穴は、狭道掘削途中で湧水を伴う硬質な岩盤にあたったため、築造を断念し途中放棄した未完成横穴と考えられる。

(中村 慎二)

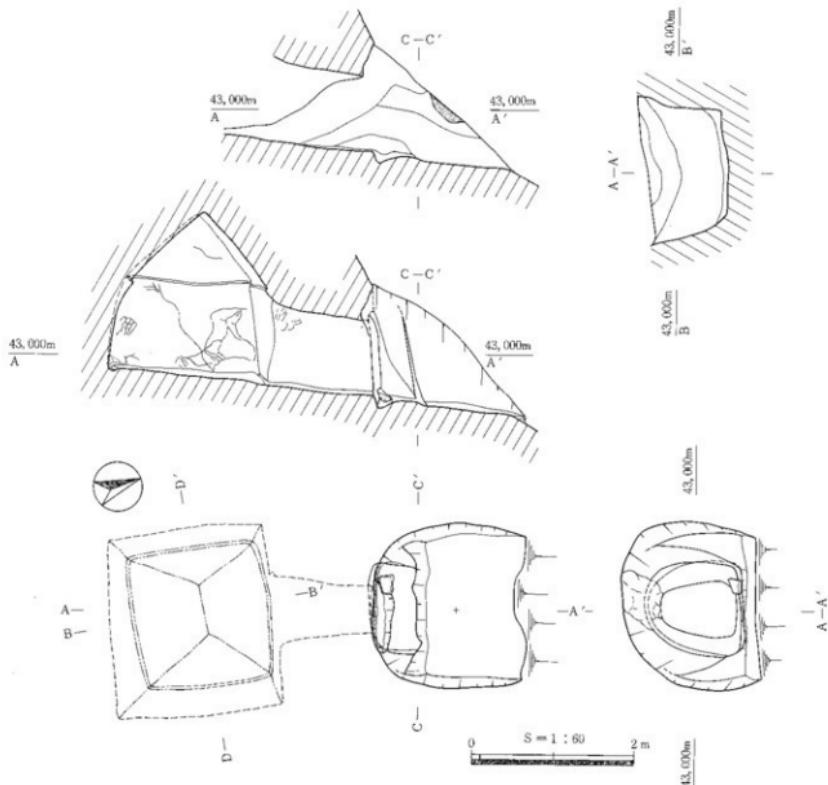


掲図45 C-2号横穴造構図

3、C—3号横穴墓(挿図46~50、図版14・15・40・41)

立地 C区北西側の傾斜45°の内湾する急斜面に、C—2号横穴、C—4号横穴墓にはさまれて築造されている。前庭端部の高さは標高42.20mで、尾根からの標高差は約9mを測る。主軸はN=19°Wで、開口方向は北北西である。地表観察では、確認されていなかった。

前庭 前庭は、急斜面に掘り込まれているため、他の横穴墓と比べて、規模は極端に小さい。床面で、長さ1.20m、前庭奥壁側幅1.70m、谷側幅1.75mを測る。基盤層への掘り込みは、最も深い前庭奥壁側で、床面まで1.19mしかない。床面の平面形はほぼ長方形を呈す。床面は丁寧に加工されており、凹凸は少なく平坦で、谷側に向って6°の傾斜をもって降っている。前庭側壁面も平滑で、加工は丁寧であり、前庭の横断形は、長方形に近い逆台形を呈す。前庭奥壁は、床面幅1.70m、漢道右側で最高1.10mを測るが、前庭の掘り込みが少ないため、漢道上位に壁体を形成していない。前庭埋土は礫を多く含んでいることから、埋葬終了後にある程度埋め戻していると考えられる。玄門に堆積している土は、玄門の閉塞施設（おそらく木蓋）が腐朽した後、前庭埋土が流れ込んだものと考えられる。ま



挿図46 C—3号横穴墓遺構図

た、前庭埋土の状況からは追葬行為の痕跡は認められない。

棗道

棗道は、左右両側を袖状に掘り残しており床面も前庭床面より4cm程高い。袖部自体は、立ち上がるにつれて、除々に前庭奥、側壁に解消されていき、天井部は一部崩落しているため推定であるが、数cmを測るのみであろう。床面の幅1.05m、奥行0.28m、推定高1.2mを測り、前庭同様に規模は小さい。正面観は釣鐘状を呈す。

閉塞

閉塞は玄門と棗道の間で行なわれている。玄門正面壁の中央付近に幅0.60m、高さ0.95mの玄門が掘り込まれている。その直下に主軸方向に直交して、長さ94cm、幅23cm、深さ12cmの断面V字状の溝が掘り込まれている。閉塞は木蓋の類を溝にはめ込み、玄門壁にもたせかけたものと考えられる。蓋の押えに用いられたと思われる基礎ブロックが、溝の右端に1個置かれていた。

B—B'

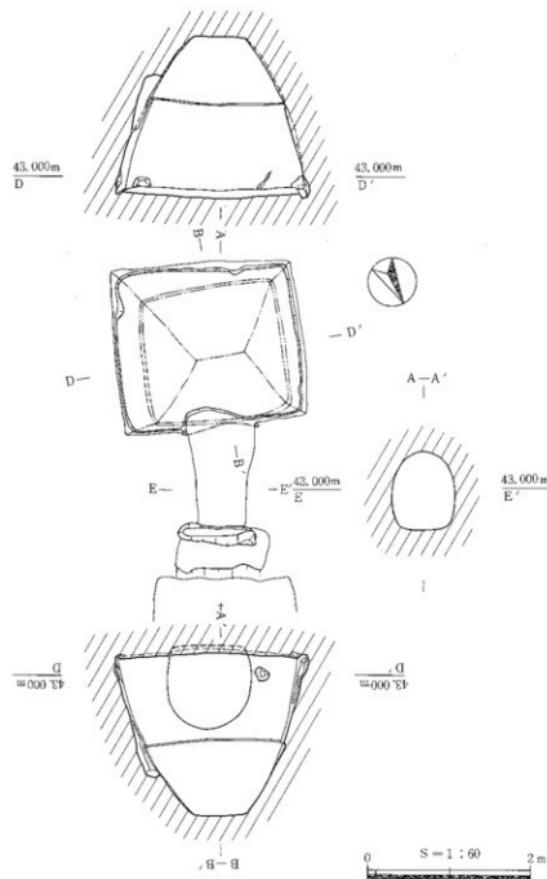
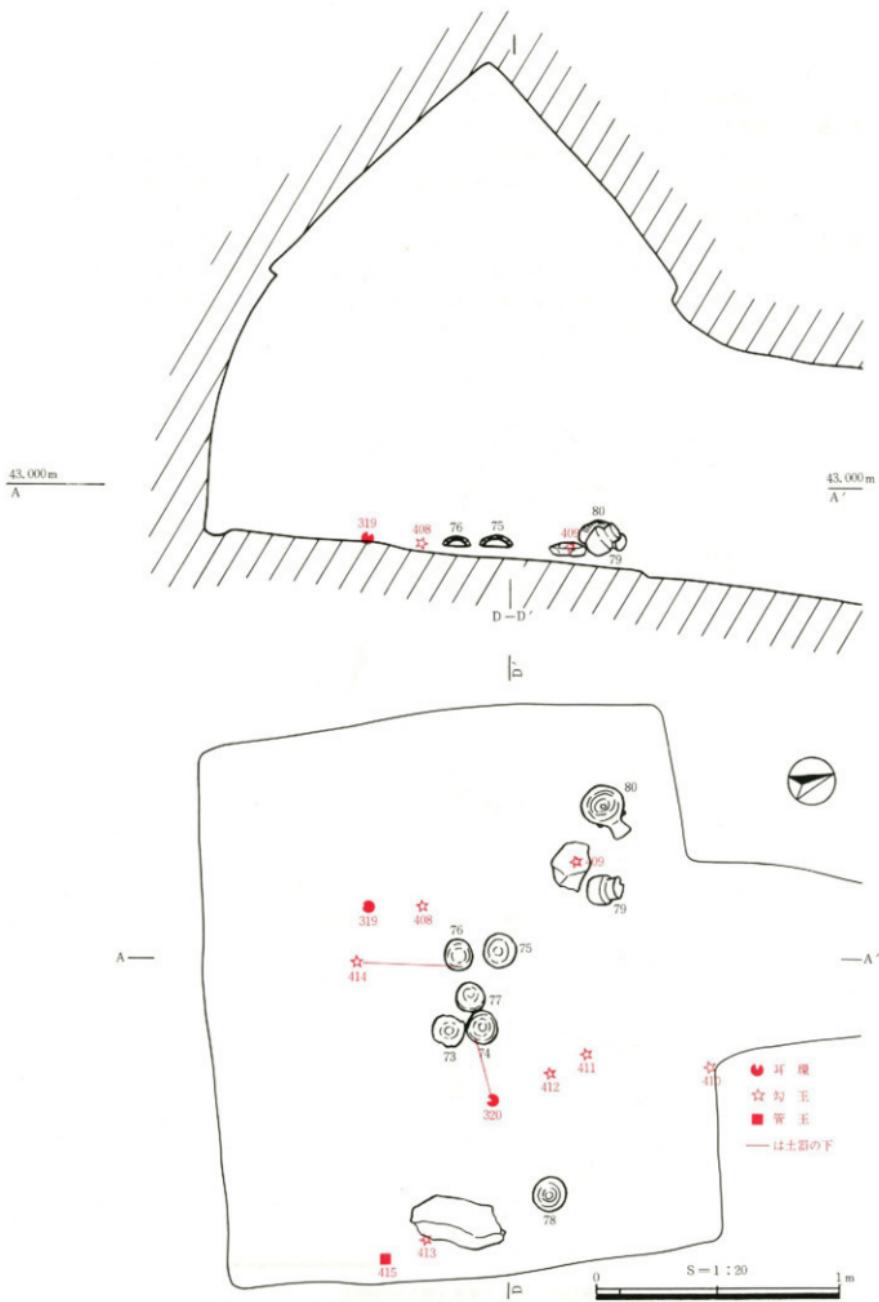


図47 C—3号横穴墓玄室造構図

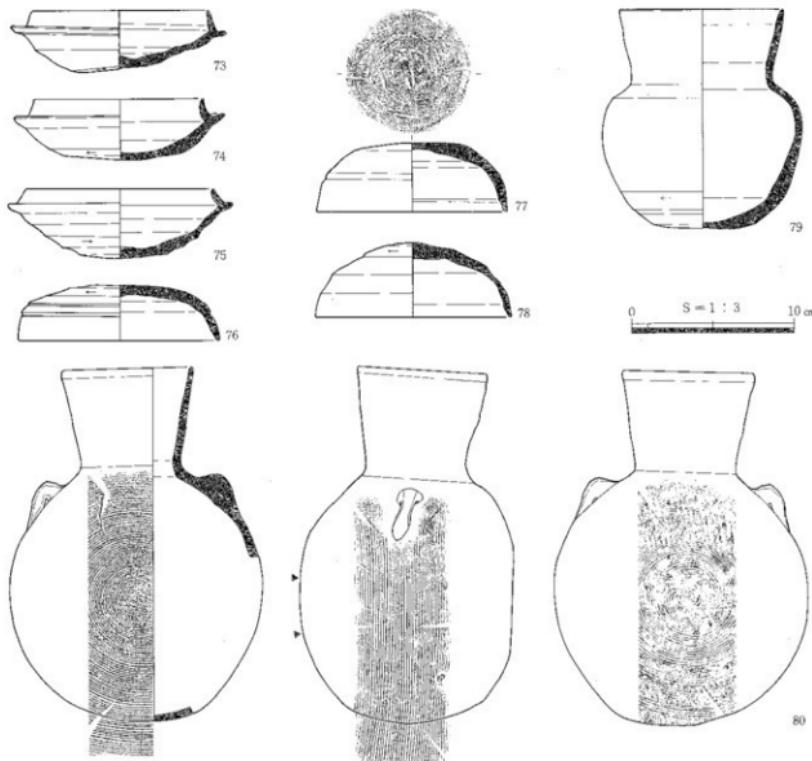


插図48 C-3号横穴墓玄室内遺物出土状況図

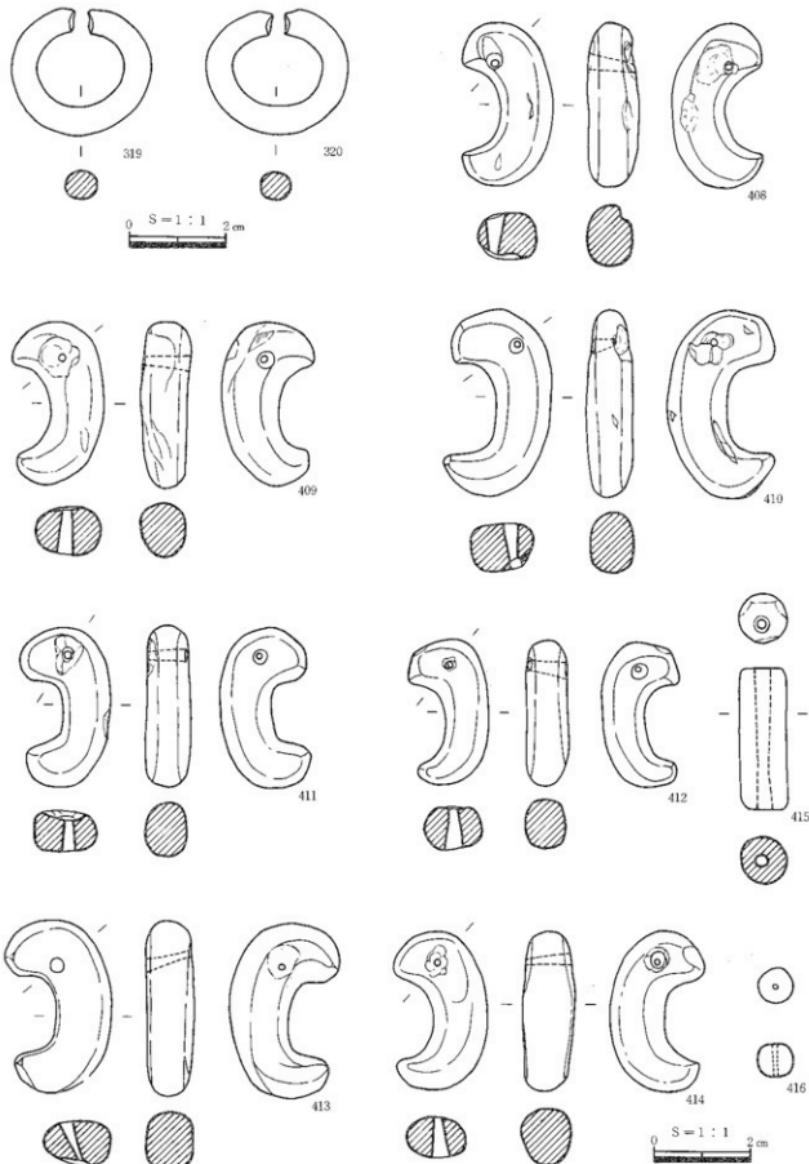
玄門 玄門は羨道より7cm程高く、床面で長さ1.25mを測り、玄室に近づくにつれて幅が少し広くなる。羨道側最小幅0.58m、高さ0.91m、玄室側最大幅0.85m、高さ1.06mである。横断面形は天井部に棟線のない釣鐘状を呈している。玄門右奥に幅3cm内外の工具痕が残り、仕上げは丁寧である。前庭、羨道、玄門を通して、排水溝は認められなかった。

玄室 玄室は幅2.33m、奥行2.06m、天井部の高さは中央部で2.02mを測る。床面の平面形はほぼ正方形で、壁際に幅3~5cm、深さ2~4cmの断面逆台形の排水溝が巡っている。この排水溝底面が玄門床面に続いており、玄室は玄門床面より2cm程高い。玄室床面は平坦であるが、入口に向って約6°の傾斜をもって降っている。

玄室形態は、壁と天井の間に3cm前後、軒先部分を掘り込み、壁と天井を区別して家形を呈しているが、縦断面形は軒先部分で傾きに変化ではなく断面三角形に類する。山本清氏のいう便化家形(山本、1962)に分類されると考えられるが、築造工程では、断面三角形の形態に整形した後、軒先の部分を新たに掘り込んだものと推定され、基本的には断面三角形形態に属するものであろう。縦断面形でみると、奥壁は外湾しながら立ち上がり、床面から1.10mのところで3cm程の掘り込みを設け、壁と天井の部分を明瞭に区分している。玄門は平側についており、棟線に沿って天井部各稜線は、内傾しな



挿図49 C-3号横穴墓出土遺物実測図 土器



插図50 C-3号横穴墓出土遺物実測図 耳環・玉類

から真直ぐに棟部に至る。棟線は明瞭に整形されている。横断面形をみると、両側壁は約15°内傾して1.10m立ち上がって3cm程の掘り込みを持った後、やや外湾しながら棟部に至り、弛緩した台形を呈する。壁には幅3.5cm程度の工具痕も残り、全体的に造りは丁寧である。駿面には、上限0.9mに達する玄室の水没を示す痕跡があり、床面には泥土が堆積していた。両側壁が一部崩落しているが、全体的に遺存状態は良好といえる。

玄室の水没等の悪条件によるものか、人骨は全く検出されなかった。

遺物

遺物は前庭、羨道、玄門には、全くみられず玄室内だけに限定して出土した。玄室の第四象限に直口壺79、提瓶80が横転した状態で検出された。また、水晶製勾玉409は、床面におかれた基盤ブロック上におかれていた。玄室中央付近には杯身73・74・75、杯蓋76・77の5個体がかたまって、杯身は床面に伏せた状態で検出された。このうち74と77はセットになる。耳環320は杯身74の下から、メノウ製勾玉414は杯蓋76の下から検出されている。玄室の第三象限奥壁側には、杯蓋78が検出され、その付近の基盤ブロック上にメノウ製勾玉413がおかれていた。これらの基盤ブロックは玄室壁体が崩落したものではなく、外部から持ち込まれたものである。須恵器以外の遺物は合計で耳環一对、水晶製勾玉2個、メノウ製勾玉5個、碧玉製管玉1個が玄室内で、ガラス小玉1個が玄室内排土中から検出されたことになる。C—3号横穴墓では、副葬品の中に直刀、鉄鎌等の武器類は一切出土しなかった。玄室内は湧水によって何度も水没しているため、床面には泥土が堆積しており、遺物の多くは泥土と混じって、床面のほぼ直上から出土している。遺物の出土状態に明瞭な規則性がみられず、また、玄室内には動物の巣もあり、遺物を動かした可能性もあることから、遺物が最終埋葬時の状態を維持しているとは断言できない。

時期

須恵器からみると大塔山土器編年の1期～2期の二時期が明瞭にみられる。築造時期は1期と考えられ、追葬が行なわれたと考えられるが、回数等は不明である。

(西浦　日出夫)



写真4 C区北側斜面保安足場

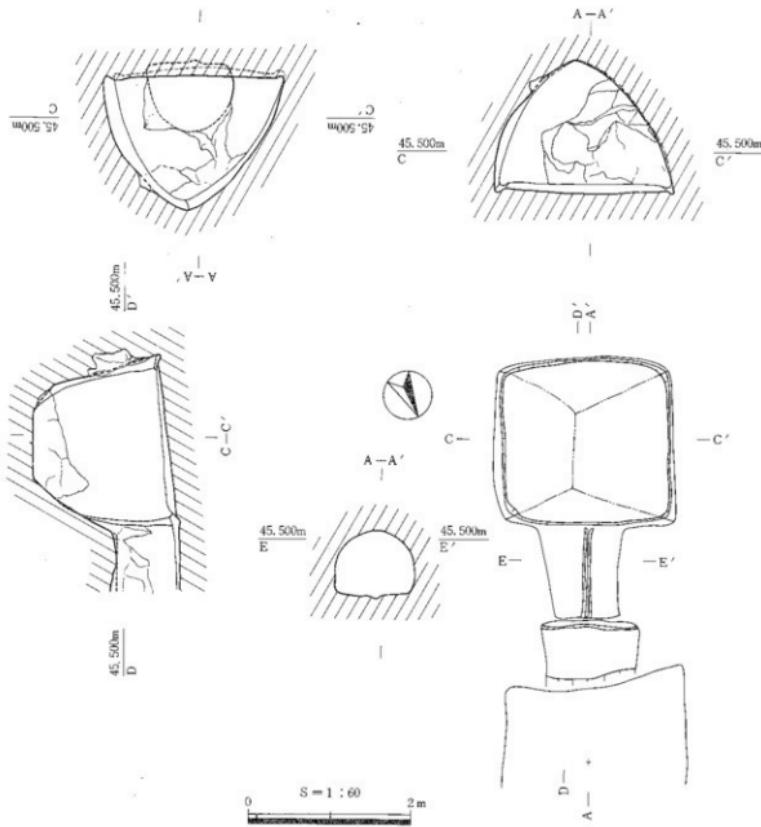
4、C-4号横穴墓（挿図51～59、図版16・17・41～44）

立地

C区北西側の傾斜42°の内溝ある急斜面に築造されている。第1次試掘調査のトレンチ(1-8T)で確認されており、C-II小支群中最も南側で高所に位置している。後背部に周溝を持つ横穴墓で、前庭端部の標高は44.25m、尾根からの標高差は約7mを測る。主軸はN-26°-Wで、開口方向は北西である。

前庭

前庭は主軸上で長さ2.64m、奥壁奥幅2.20m、谷側幅2.20mを測る。基盤層への堀り込みは、最も深い奥壁側で3.64mに達する。床面の平面形は、谷側端部がいびつだが、ほぼ長方形を呈す。横断面形は床面から0.5～0.6mまではほぼ垂直に立ちあがり、それより上は外傾してバチ状に開いている。床面は凹凸が少なく平坦で、谷側に向って約6°の傾斜をもって降っている。前庭奥壁は床面幅2.20mで、狭道左側で床面から最高1.00mまでは側壁と明瞭に区別されるが、徐々に側壁と奥壁の界線は不明瞭になっていく。



挿図51 C-4号横穴墓玄室遺構図

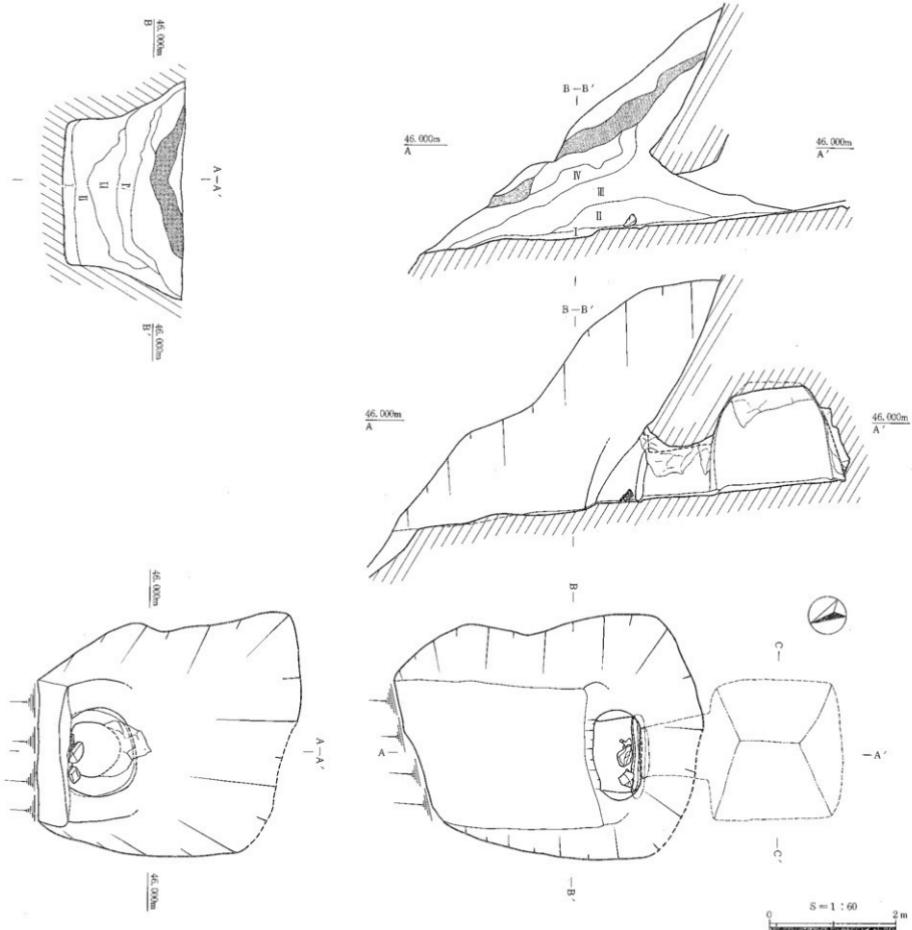
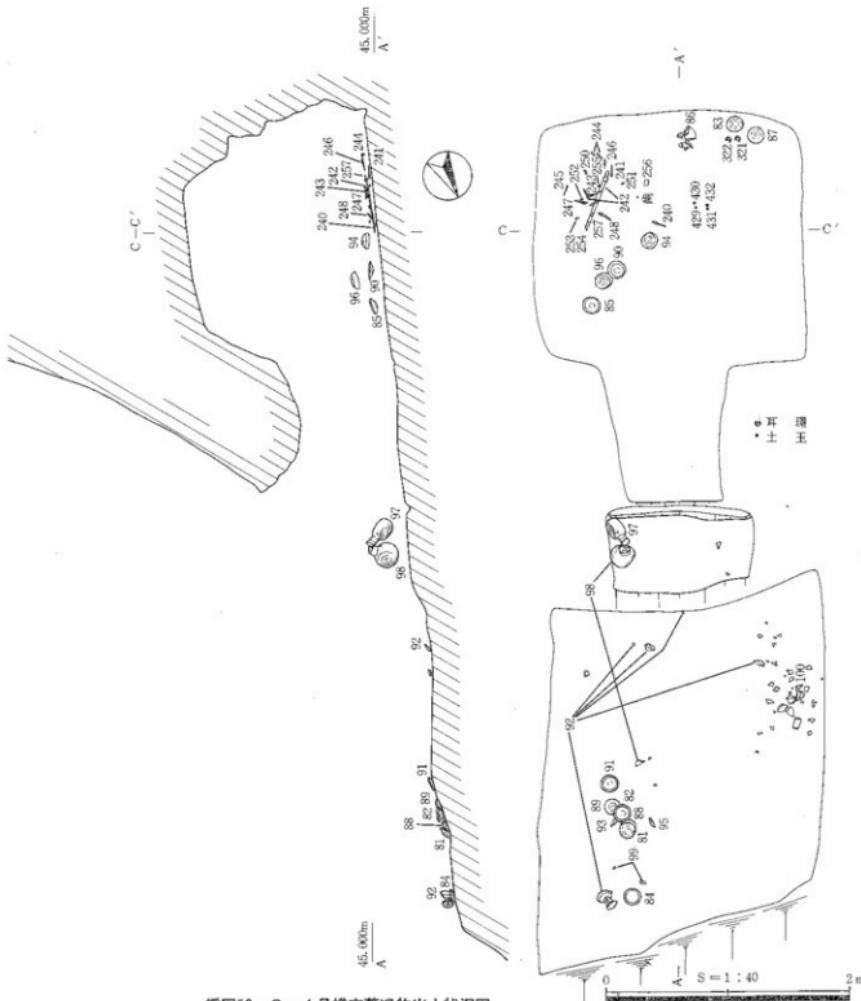


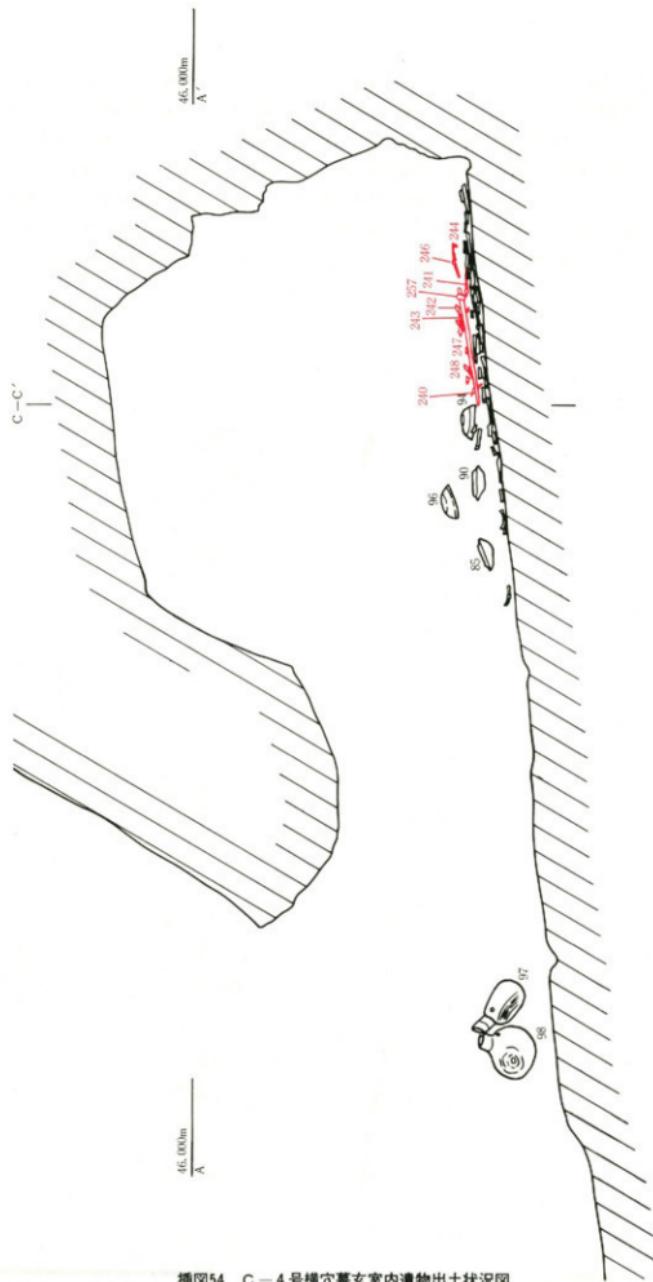
图52 C-4号墓穴建筑图

前庭埋土のⅠ層はよくしまった土で、玄門、玄室へも続くことから、追葬行為に伴う床面で、少なくとも最終埋葬段階には形成されたものと考えられる。Ⅱ～Ⅳ層は最終埋葬後に埋め戻したものと考えられ、上層には自然堆積と考えられるブラック・バンド（黒色土層）がみとめられた。玄門へ流れ込んでいるⅡ、Ⅲ層は、埋め戻し後、閉塞施設（木蓋？）が腐朽して流入したものと推定される。

護道

護道は前庭床面より10cm高く、左右両側を袖状に掘り残している。正面観は蒲鉾型を呈し、推定高1.10m、幅1.20mを測る。奥行は床面で0.65mを測るが、上位ほど除々に短くなり、天井部は推定0.10m足らずの奥行と思われるが、一部崩落しているため、正確ではない。前庭、護道には排水溝はみら





挿図54 C-4号横穴墓玄室内遺物出土状況図



0 S = 1 : 20 1m

れなかった。

閉塞 閉塞は玄門と羨門の間で行なわれている。玄門正面壁の中央付近に玄門が掘り込まれており、直下に主軸方向に直交して長さ118cm、幅10cm、深さ4cmの断面V字状の溝が掘られている。閉塞は木蓋の類を溝にはめ込み、玄門壁にもたせかけたものと考えられ、蓋の押えに用いられたと思われる基盤ブロックが溝上に数個置かれていた。

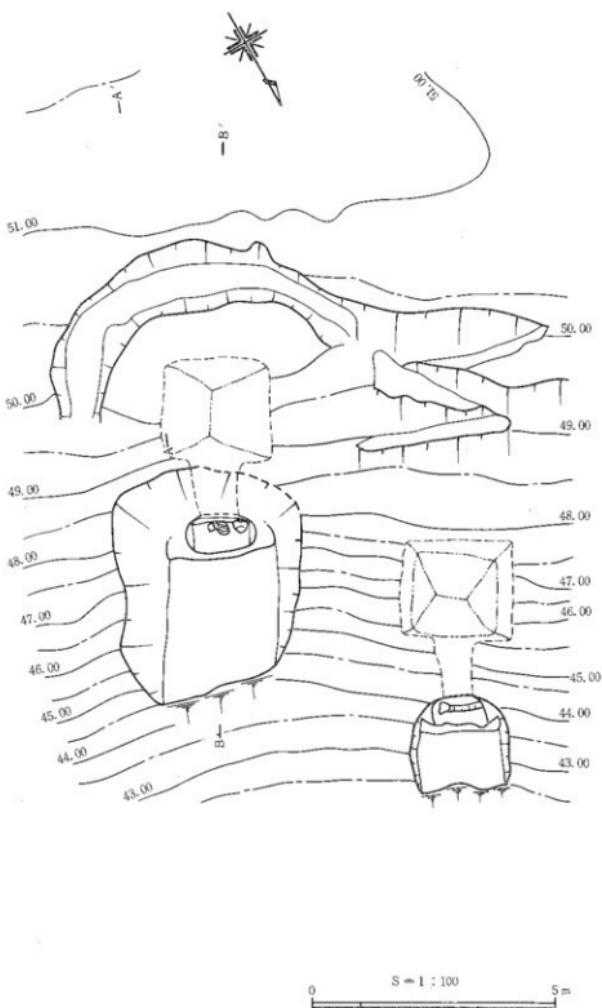


図55 C-3・4号横穴墓及び後背溝平面図

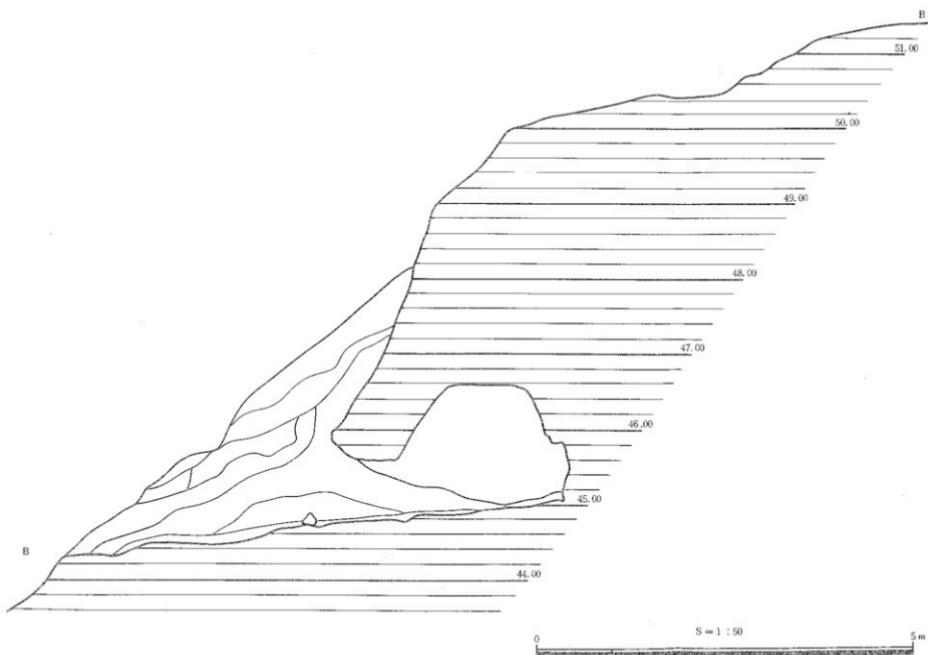
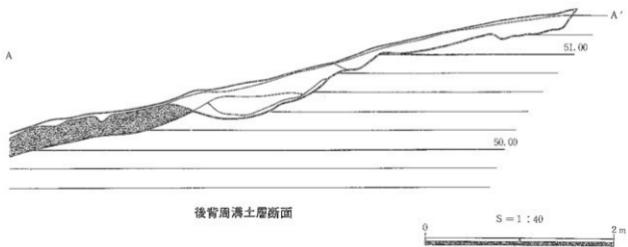


插圖56 C-4號橫穴臺・後背周溝斷面圖

玄門 玄門は羨道より2cm程高く、床面で長さ1.15mを測り、奥へいくほど幅が広くなる。羨道側で最小幅1.05m、推定高0.76m、玄室側で最大幅1.08mを測る。床面のほぼ中央に幅8cm、深さ2cmの断面U字状の排水溝が通る。天井部の崩落が著しいが、残存部からみると玄門横断面形は、やや偏平な釣鐘状ないしは蓮鉢形を呈す。壁面の整形は、やや幅広の工具で丁寧に仕上げられている。

玄室 玄室は床面で奥行2.07m、幅2.20mを測り、平面形はほぼ正方形である。玄室の立面部は、天井と壁の区別のない断面三角形で、高さは1.53mを測り、妻側に玄門がつく。床面壁際には、幅4cm、深さ3cm程の断面U字状の排水溝が通っている。この溝によって玄室は、玄門床面より3cm程高くなる。床面は、玄室、玄門を通して約6°入口に向って傾斜している。横断面形を見ると、両側壁はやや外湾しながら棟部に至る。棟部は明瞭ではあるが、やや甘く加工されており、やや玄室左側に片寄っている。縱断面形を見ると、奥壁はやや内傾しながら真直ぐに立ち上がり棟部に至る。各棱線は明瞭に加工されている。奥壁、前壁、天井部など崩落が激しく、遺存状態は良くなかった。また、壁面をみると何度か湧水によって水没した痕跡も認められる。

須恵器屍床 玄室床面の右半分に須恵器小型壺101と、底部を欠く中型壺101を割った破片が散かれて、須恵器屍床を形成していた。検出時において、須恵器の敷き方には粗密があり、敷かれた当時の状態とは考えられない。おそらく、追葬行為や壁面崩落によって動かされたと推定される。

後背周溝 後背周溝はC-4号横穴墓後背地、尾根上の中心軸をはずれて東側斜面直上の、標高49.80m～50.78mに位置する。頂部側外周で復元すると、直径約6mのほぼ半円形を描くように周溝が掘られている。幅は0.70～1.55mを測り、深さは0.10～0.35mと浅く、断面は不整形なU字形を呈す。周溝は地形に制約されて尾根側を高くしている。周溝に開まれる部分はおよそ15°谷側へ傾斜しているが、平坦面をなしている。加工の有無は不明である。この周溝は、立地状況からすると全周するものとは考えられない。

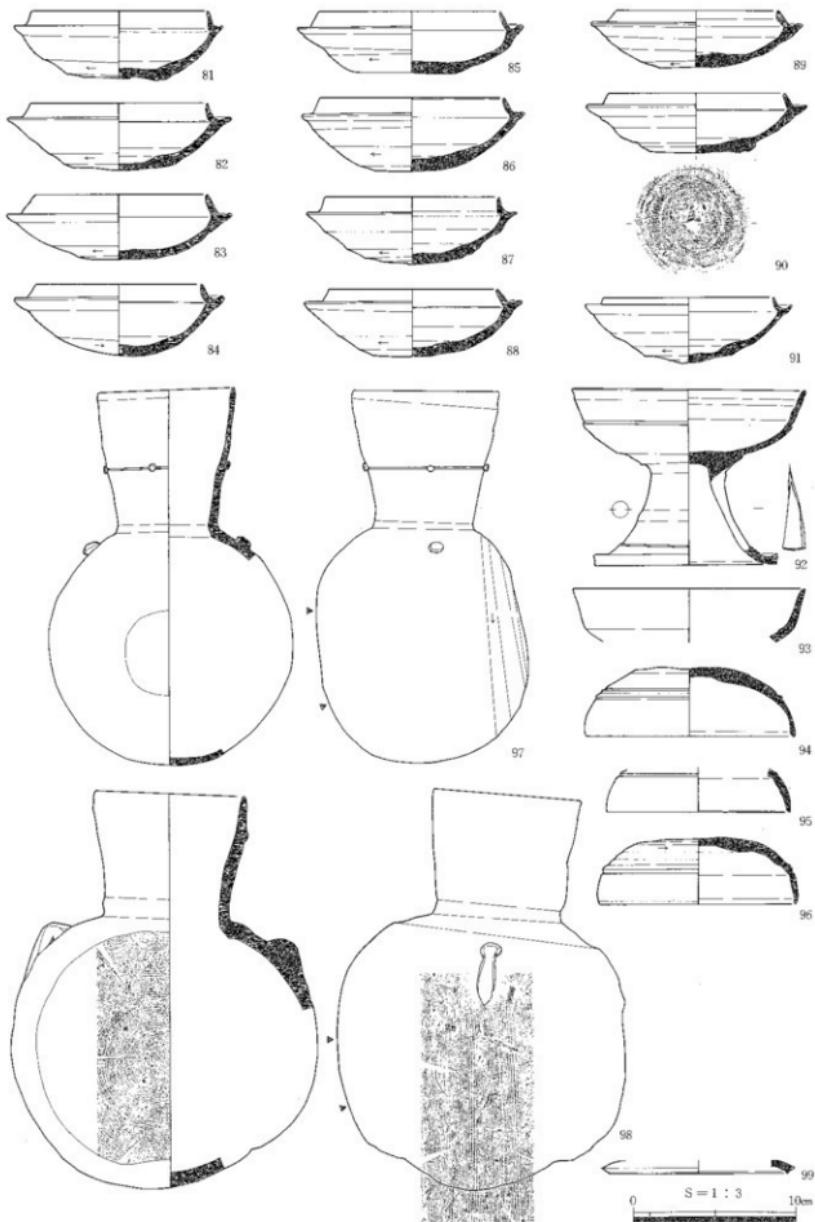
土層断面を観察すると、周溝に開まれる部分に暗褐色土層が、やや盛り上がるよう堆積しており、旧地表あるいは盛土と考えられ、B-2号横穴墓後背地にみられたような墳丘を有していた可能性もある。

人骨 玄室の中央付近で歯が1本出土した。性別等は不明であるが、若年のものと推定される。湧水等の悪条件のためか、この他には人骨は全く検出されなかった。

遺物出土状況 前庭左側の床面直上で、まとまつた須恵器群が検出された。杯身81・82・88・89・91が密集しており、このうち81・88・89は伏せた状態であった。やや離れて杯身84と横転した状態で高杯92が出土している。高杯92の破片は、前庭各所に散乱しており、前庭で意図的に割られた可能性も考えられる。前庭右側の奥壁寄りでは、須恵器屍床に用いられていた小型壺100の口縁部を含む破片が出土している。おそらく小型壺100を前庭で割り、胴部の破片を玄室内に持ち込み、須恵器屍床に用いたと推定される。

羨道左側壁に密着して、提瓶97・98が口縁部を互いにもたせかけるように出土している。提瓶98は口縁部を一部欠いており、欠けた破片の一部が前庭中央付近で出土している。提瓶は2つとも床面から浮いた状態で検出されており、形式的にも時期差がみとめられることから、二次的に移動し現位置に置かれたものと推定される。

玄室の第二象限において、鉄器類が密集した状態で検出された。直刀257は切先を入口側に向かって床面にほぼ密着した状態で検出された。近くに金具251・252・253・254、柄頭256が検出された。また、直刀のすぐ側に、付属品と思われる使途不明の金具255も出土している。周辺には鉄鏃が10本、玄室中央付近には刀子240が検出されている。この他に第一象限の奥壁寄りに杯身83・87が並んで、床面に伏せた状態で検出された。すぐ近くで耳環321・322が出土していることから、杯身83・87は枕として用いられた可能性が考えられる。また、第一象限中央寄りでは杯身86が破損した状態で検出さ



插図57 C-4号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)

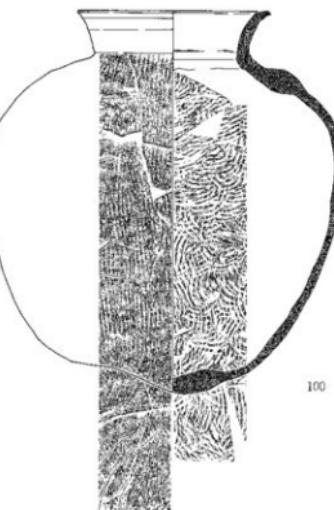
れている。玄室の中央寄りでは、土製小玉が4個検出された。土玉は玄室内排土中からも4個検出されている。第三象限では杯身85・90、杯蓋94・96が検出された。どれも床面から6~20cm浮いた状態で、流入した埋土や、崩落した基盤ブロックの上に来るよう検出されたが、追葬面等を示すものではなく、二次的移動によるものと考えられる。その他、玄室内排土中から、水晶製丸玉1個、ガラス小玉7個が出土している。

埋葬は、少なくとも、玄室右奥の土器を枕にして、須恵器屍床の上に1体と、鉄器類を側に置いて、床面に1体の計2体が考えられる。但し、埋葬順は不明である。

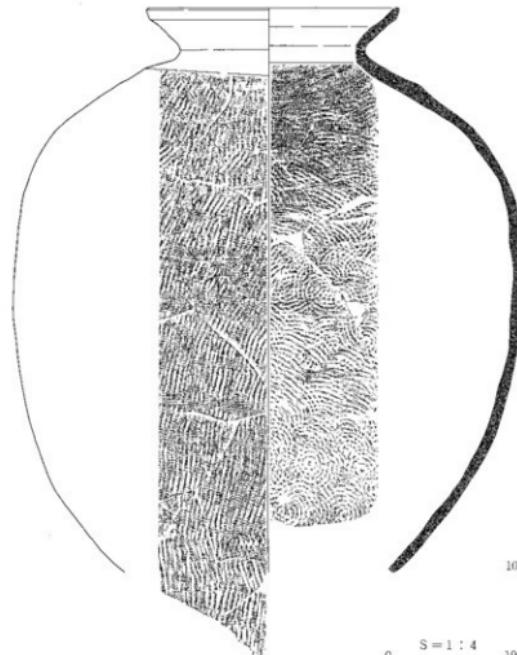
後背周溝からは遺物は検出されなかった。

時 期 出土した須恵器からみると、大塩山土器編年の1期~2期の二時期がみとめられる。築造時期は1期と考えられ、数次の追葬が行なわれたと考えられる。

(西浦 日出夫)

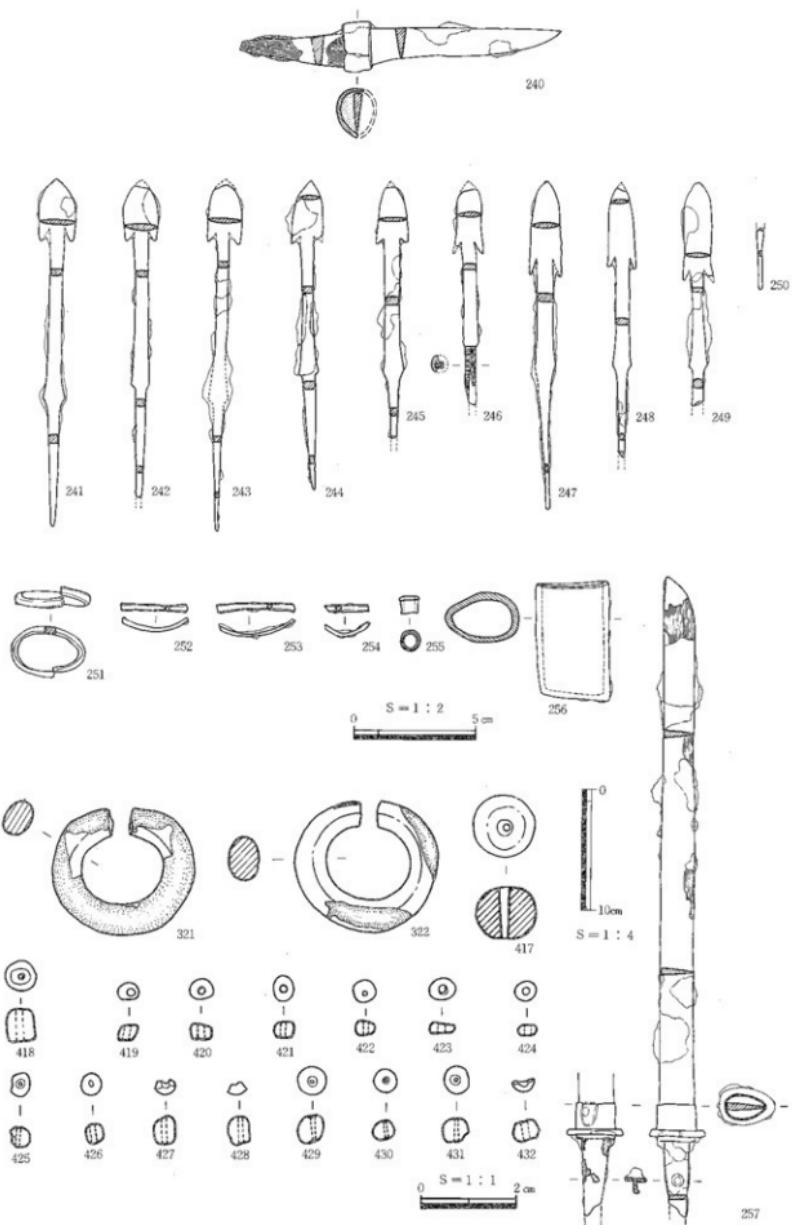


100



101

挿図58 C-4号横穴墓出土遺物実測図 土器(2)



插図59 C—4号横穴墓出土遺物 実測図 鉄器・耳環・玉類

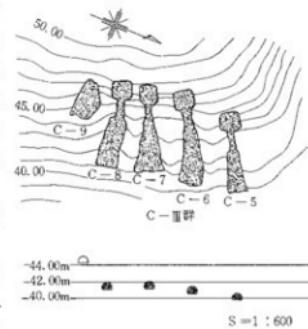
5、C-5号横穴墓（挿図61～64、図版18・45・53）

立地

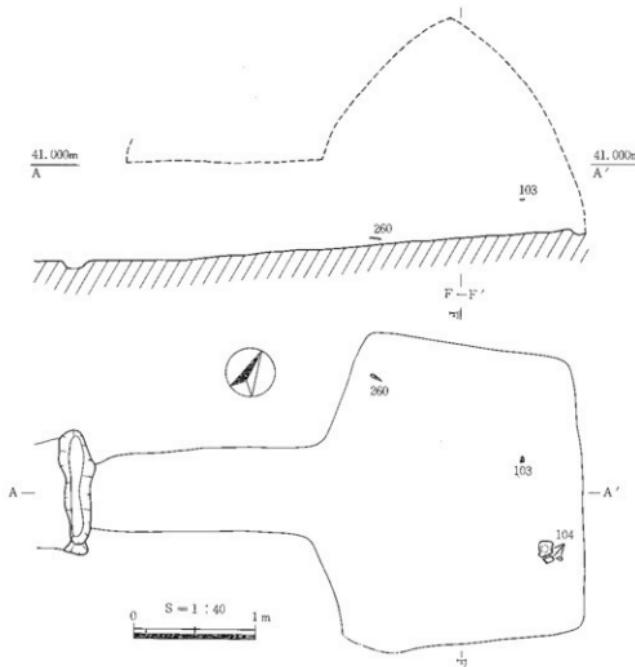
本調査に先立つ試掘調査において、C-5Tで存在が確認された横穴墓である。C区東側斜面の南側に5基の横穴墓が群集するC-III小支群の、最も北側の緩斜面に築造される。前庭端部の標高は32.828mで、C区尾根上との比高差12.3mを測る。C-III小支群中では最も下位に築造されるものである。主軸はN-62°-Eで、東北東へ開口する。

前庭

規模は床面で長さ4.95m、幅は谷側端部で2.30m、前庭奥壁側で1.35mを測る。谷側端部に加工はみられず、自然地形のままである。平面形は長台形を呈す。床面は丁寧な加工は施されず凹凸があり、約4°の傾斜で谷側へ緩やかに下る。前庭奥壁は丁寧な加工はみられず、凹凸が著しい。横断面は逆台形を呈す。基盤層への掘り込みは、既に前庭奥壁が崩落しており不明であるが、玄室天井を崩す前に計測したところ、漢道床面まで2.80mに達した。



挿図60 C-III小支群位置図



挿図61 C-5号横穴墓玄室内遺物出土状況図

前庭埋土は大きく分けて、横穴最終埋葬後に埋め戻されたと思われるI～III層と、これを切っている盗掘後に堆積したと思われる土層に分けられる。その上に自然堆積と思われるブラック・バンド（黒色土層）が認められる。盗掘後に堆積したと思われる層は、玄室内へも流入しており、動物の排泄物と思われる炭化層を含んでいる。前庭奥壁及び羨道上部の崩落は、崩落土と思われる土層がみられないことにより、おそらく盗掘の際に起こり、取り除かれたものと思われる。

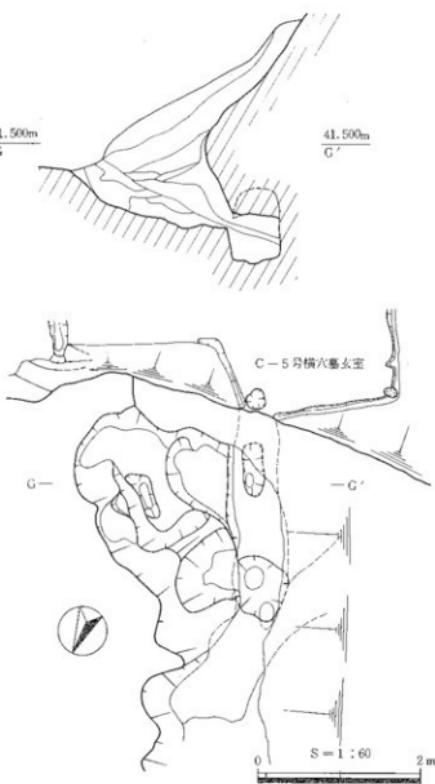
羨道 羨道は左、右両側を袖状に掘り残しており、床面は前庭床面との間に高さ8cmの不明瞭な段差をもつていて。床面は長さ0.40m、幅は前庭側0.82m、玄門側0.95mを測る。天井部は崩落しており規模は不明であるが、正面観は残存部よりして、隅丸方形か釣鐘形を呈すると思われる。

閉塞 閉塞は羨道と玄門の間で行われている。床面には主軸に直交して長さ55cm、幅20cm、深さ8cmの断面U字形の溝が掘り込まれており、この溝に木蓋？をはめ込んで玄門正面壁にもたせかけたものと思われる。木蓋の押さえ石などはみられなかった。

玄門 床面は平坦で、長さ1.80m、幅は羨道側で0.50m、玄門側で0.80mを測り、横断面形は釣鐘形を呈するようである。羨道との間に段差はみられない。高さは崩落のため不明である。前庭、羨道、玄門を通して排水溝は検出されなかった。

玄室 玄室は前壁、奥壁の崩落の状況が著しく、現状のままでは大変危険で調査することが困難であると判断され、玄室天井部を崩す作業から始めた。規模は左側壁の長さ1.70m、主軸上の奥壁から玄門までの長さが2.20m、幅は玄門側で約2.60m、奥壁側で2.20mを測る。平面形は、前壁が玄門側へ張り出しており、不整形な六角形を呈し、玄室はやや横長である。立面形態は、崩落前に実測したところ天井と壁の区別のない断面三角形で、高さ1.82mを測り、平入りの形態であった。床面壁際には幅5～10cm、深さ5cm前後の排水溝が巡り、前壁側の溝は、壁づたいに玄門へ僅かに延びている。右側壁際の溝は前壁側の隅角で消えている部分がある。

不明遺構 C-5号横穴墓の北隣りに接するもので、玄室右隅に幅0.5m、高さ約0.5mの穴が穿たれ北西側へのびており、平面形は不整形である。C-5号横穴墓玄室の排水溝が右側隅で途切れていることからこの穴はC-5号横穴墓玄室掘穿ときほど時間的な隔たりのない時期に掘穿されたものと思われる。



挿図62 C-5号横穴墓不明遺構実測図

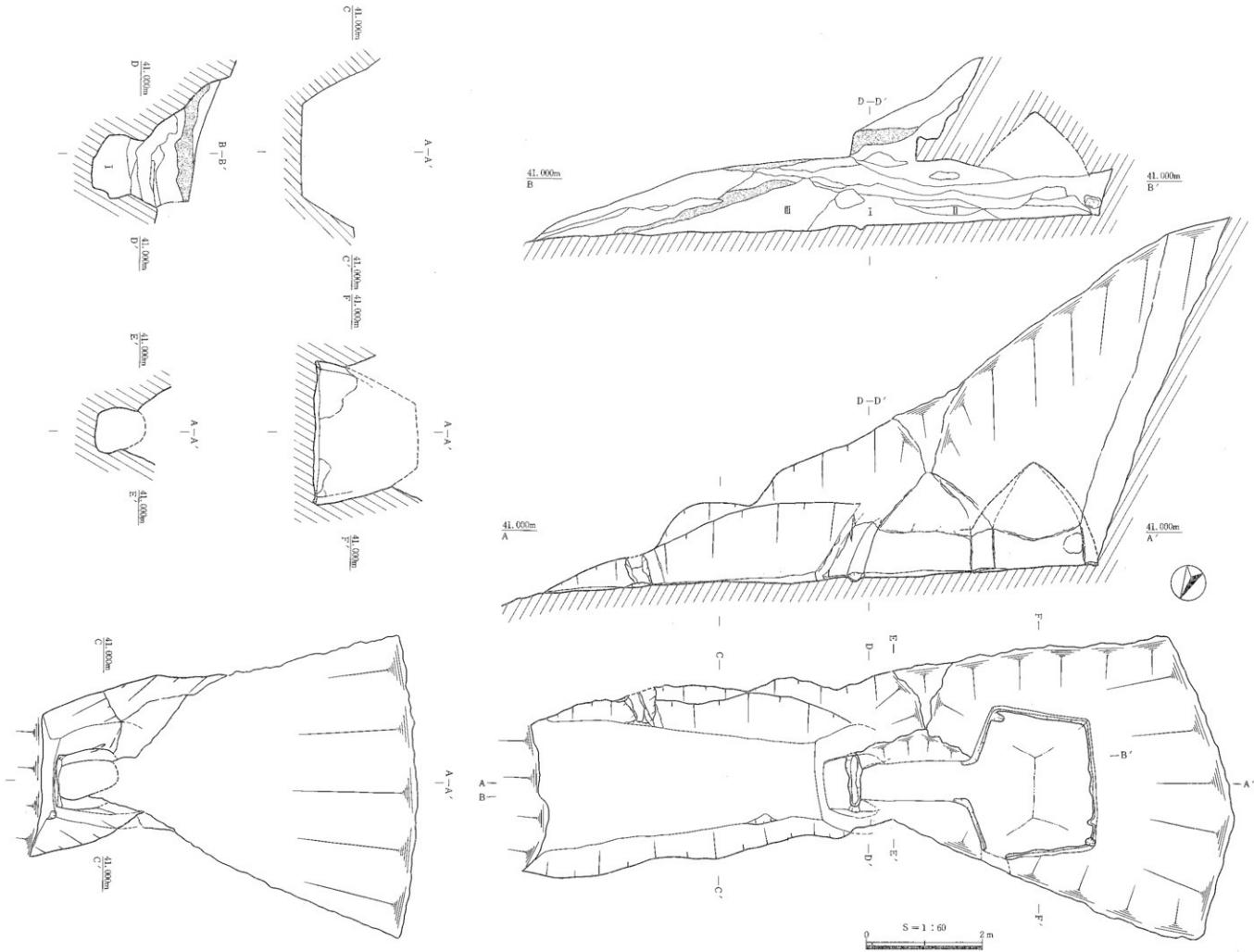


插圖63 C-5號橫穴墓遺構圖

不明遺構に接続して、更に奥（西側）ヘトンネル状の穴が掘られているが、この穴は動物の掘ったものと考えられる。また、C—5号横穴墓前庭北隣りは平坦面をなしており、人為的な加工がなされたものであろう。両者及び、C—5号横穴墓との関係は不明である。

遺物

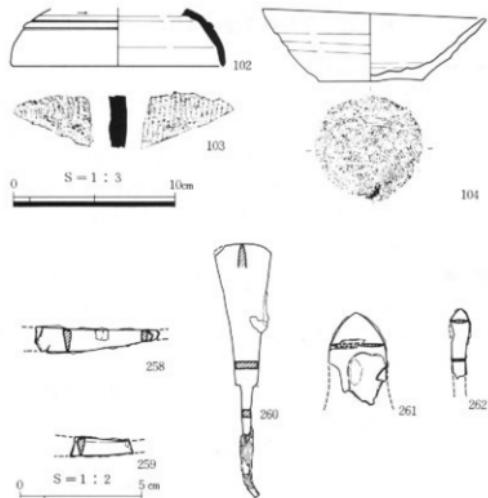
出土状況 前庭埋土のうちブラック・バンド（黒色土層）中より須恵器片が出土している。この須恵器片は、C—8号横穴墓の前庭より出土した提瓶164と接合した。

玄室からは、第一象限から床面より約35cm浮いた地点で土師器杯104が、また、第二象限から床面より約30cm浮いた地点で須恵器片103が1点出土した。第三象限からは、床面直上からほぼ原位置を保ち鐵鑼260が検出された。その他、出土地点は不明であるが、玄室内堆積土中より刀子破片258・259が検出された。玄室の遺物出土状況及び堆積土の状況からみて、C—5号横穴墓は数回にわたる盗掘が行われたと考えられる。

時期

不明遺構北側から須恵器杯蓋102、鐵鑼片261・262が出土している。横穴墓に伴う遺物が不明確なため、製造時期は不明であるが、玄室平面形が不整な六角形状を呈すること、前庭の加工が難いことなどから、本横穴墓群の中ではやや新しい段階の製造と推定される。盗掘時期は土師器皿104が平安時代のものと思われ、おそらくその時期に最も新しい盗掘が行われたものと考えられる。

(近藤 哲雄)



插図64 C—5号横穴墓出土遺物実測図 土器・鉄器



写真5 C—5号横穴墓実測風景

6、C—6号横穴墓（挿図65～69、図版19・20・45～47・53）

立地

C—6号横穴墓は、C—5号横穴墓の南隣りに位置し、両横穴墓主軸間で5.5m離れている。主軸はN—64°—E（A—A'）で、東北東方向に開口しているが、横穴墓の平面形は弓なりにやや湾曲している。傾斜角18°の斜面に掘り込まれており、前庭端部標高は40.75m、尾根上との比高差約10.8mを測る。また、横穴墓自体、玄室奥壁から前庭端部に向けてゆるやかに傾斜しており、主軸上で、玄室奥壁沿いの床面の標高41.77m、傾斜角は約4°である。

なお、本横穴墓も、渓道から奥が進構検出時にすでに崩落していたため、玄門、玄室の天井形態の詳細は不明である。

前庭

前庭は、主軸上で長さ6.85m、前庭前端で幅2.90m、前庭奥壁側で幅1.70mの広さがある。床面はほぼ平坦で丁寧に加工されており、前庭前端に向けて徐々に広がりを増す。しかし、左側壁が前庭前端近くで内湾するため、平面形態は不整形な印象をうける。両側壁は丁寧に整形されており、直線的な傾斜をもって立ち上がるが、途中で傾斜角をややゆるやかに変える。その結果、横断面形態は、バチ形を呈する。一方、前庭埋土のうち、Ⅲ層、Ⅳ層の渓門付近に集中して多量に含まれる礫は、渓門より奥が崩落した際に生じたものと考えられる。また、Ⅴ層中の土器片は平安期以降の土師器杯117・118である。以上の堆積状況は、横穴墓初期の崩落が土師器杯の時期よりも以前に起ったことを示すと同時に、土師器杯の時期に、崩落した土砂をかき出して盗掘に入った可能性を示すと考えられる。少なくとも、追葬をうかがわせる土層堆積は確認できない。

渓道

渓道は、前庭奥壁の左、右両側を掘り残して袖とし、床面は段をもち、前庭床面より約14cm高くなる。天井部を欠くものの、掘り込みの正面觀は隅丸方形を呈すると思われる。袖自体は、約1.3m立ち上がって側壁の棱線に合流したところで奥壁に解消してしまう。くり抜き部分の現存最大幅は1.24m、奥行は床面主軸上で0.76mを測る。天井部の奥行はほとんどなかったものと推定される。

閉塞

閉塞は渓道と玄門の境で行なわれている。渓道の玄門側床面を主軸に直交して長さ110cm、幅16cm、深さ10cmの断面U字形の溝状に掘り込んであり、上に入頭大の基盤ブロック三個がおかれていた。木質は残存していなかったが、木蓋を溝にはめ込み、礫でおさえをして閉塞していたものと考えられる。

玄門

玄門は、玄門正面壁を袖に掘り込まれ、渓道より6cm高くなっている。もともと幅の広い玄門ではあるが、奥に行くほど幅が広くなり渓道側で最大幅0.89m、玄室側で最大幅1.13m、主軸上で全長1.52



写真6 C—6号横穴墓調査風景(大塔山式ベルコンで働く作業員)

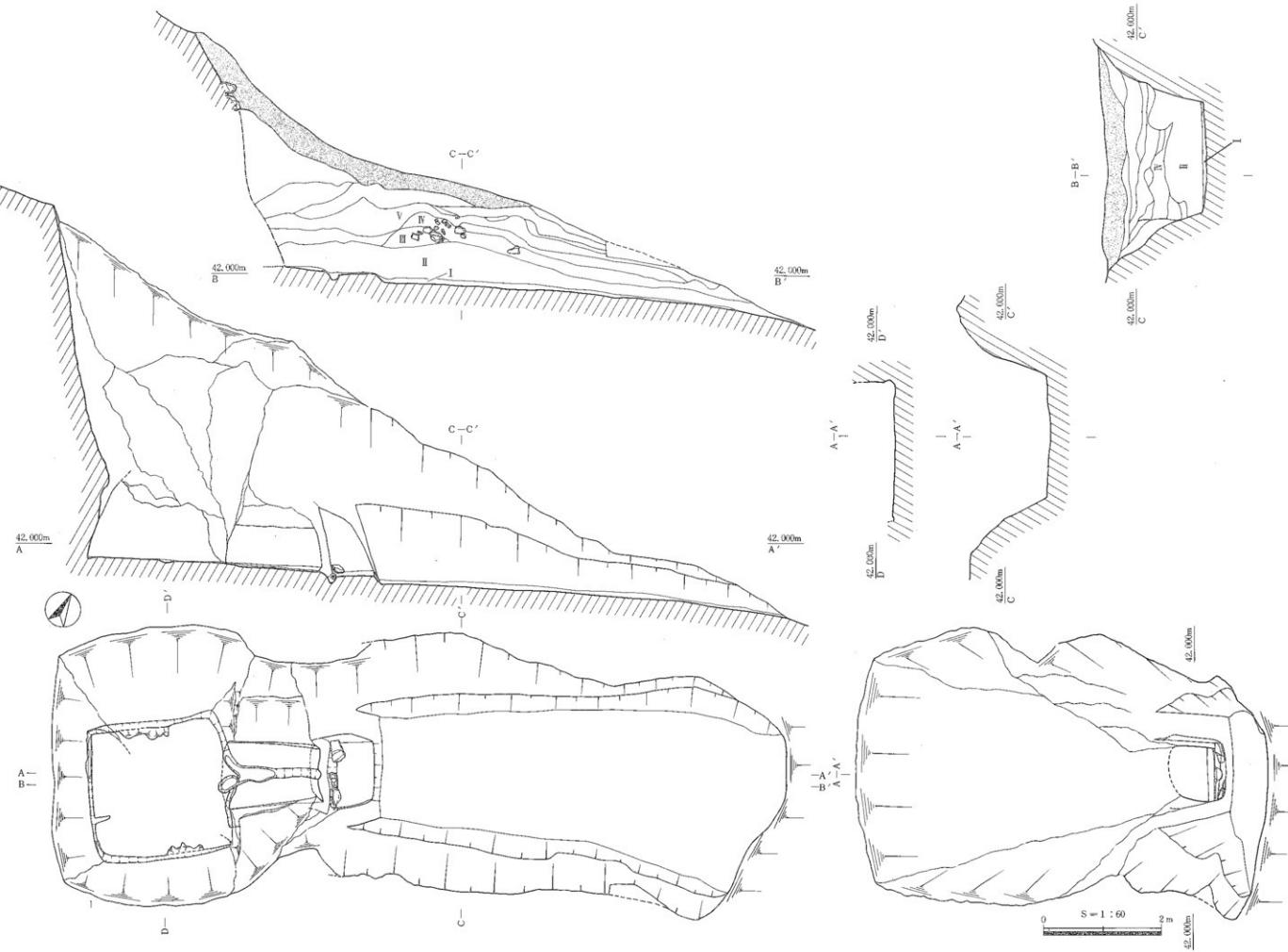


插图65 C-6号墓穴造形图

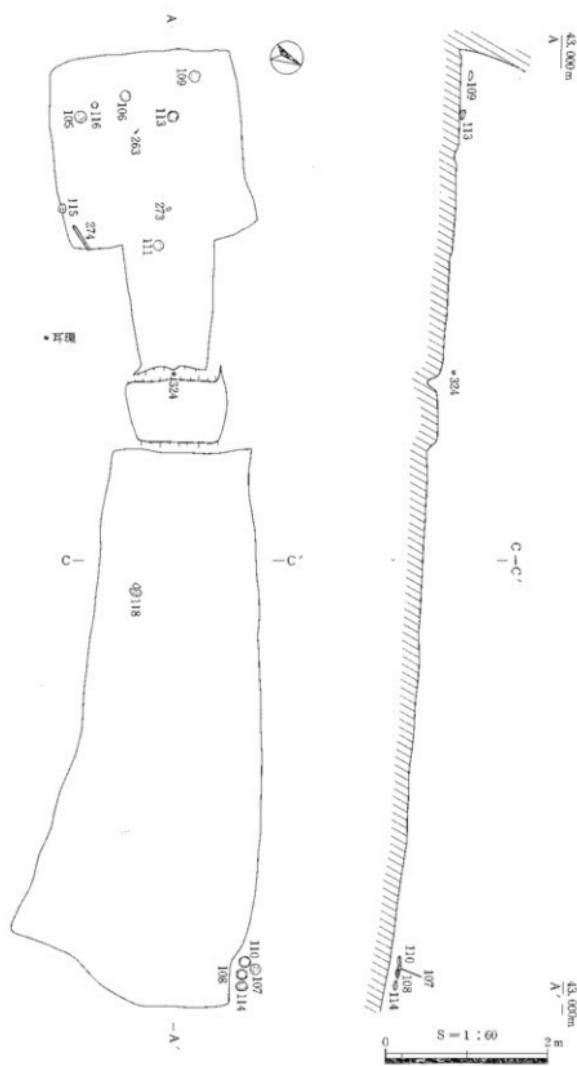


插图66 C—6号横穴墓出土状况图

mを測る。横断面は側壁の立ち上がりから、ややいびつな釣鐘形の断面形態を呈すると想定される。床面の中央には深さ約3cmの断面U字形の排水溝が走り、閉塞部の溝へそそいでいる。この排水溝は、羨道側では幅16cmだが、玄室に近づくにつれて幅広になり、玄室内排水溝が左右から合流する付近では幅が34cmである。

玄室 玄室は、主軸長2.37m、玄室横断軸(D-D')長2.35mと、床面平面形はほぼ正方形である。壁際に幅約6~8cm、深さ約3cmの排水溝が巡るが、左前壁際で一部途切れる。床面は比較的凹凸が激しい上、屍床の施設もない。また、天井形態は、崩落によって必ずしも詳らかではないが、右奥コーナーに残存していた接線の立ち上がりから、半入りが推定され、おそらく断面三角形の立面形態をとるものである。

遺物 遺物は、前庭直下の斜面、前庭前端のⅡ層直上面、羨道および玄室のⅠ層直上面から横穴墓にともなう須恵器、金属製品が、また、前庭Ⅳ層直上面から後世の土師器杯片がそれぞれ出土した。

前庭直下斜面出土の杯蓋112は、後述する前庭前端の一群众からの流れ落ちと考えられる。前庭前端右側で床面より外側に、杯身107・108・110、杯蓋114がまとまって検出された。107は伏せた状態で、114は裏返して置かれていた。107と112、110と114がセットとなる。玄門の羨道寄りで床面より浮いて出土した耳環324は、対になる323が玄門Ⅱ層中から出土しており、追葬時にかき出された可能性も考慮される。玄室からは、玄門との境で杯身111、第一象限では杯身109、杯蓋113、輪底273が検出された。第二象限では杯身105・106、有蓋台付鉢116に刀子263、第三象限では、116の蓋115と直刀274が出土した。出土状況はそれぞれ原位置を保っているとは考えにくい。大塙山横穴墓群の中でも比較的大型の横穴墓でありながら、遺物の絶対量が少ないと、前庭埋土の堆積状況などの状況証拠を勘案して解釈する必要がある。

時期 出土した須恵器からみると、大塙山土器編年の1期~3期の三時期が認められる。従って、築造時期は1期と考えられ、以後、数次の追葬が行なわれたと考えられる。

(松井 潔)

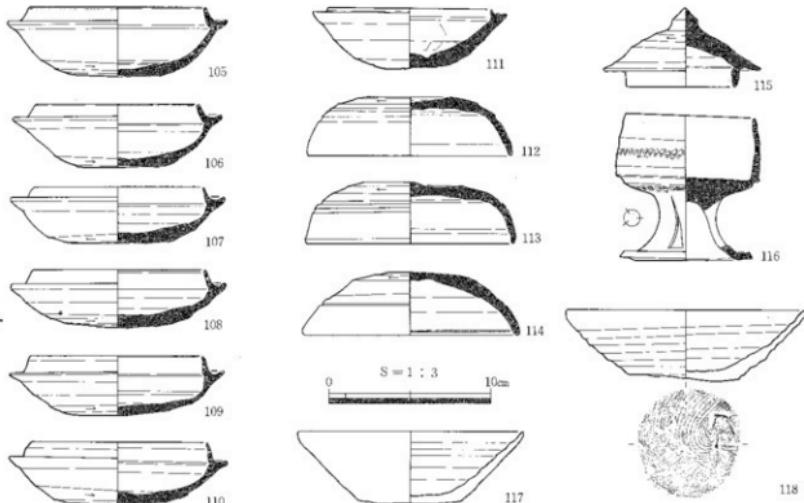
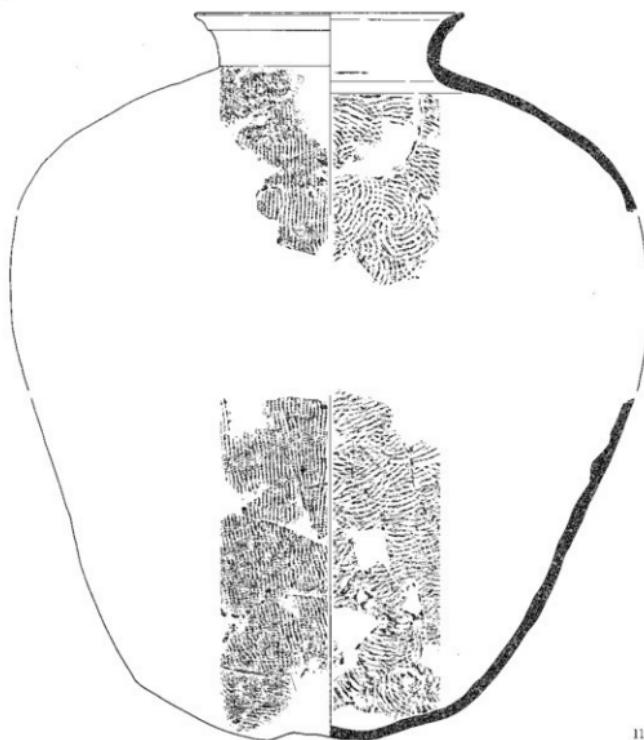
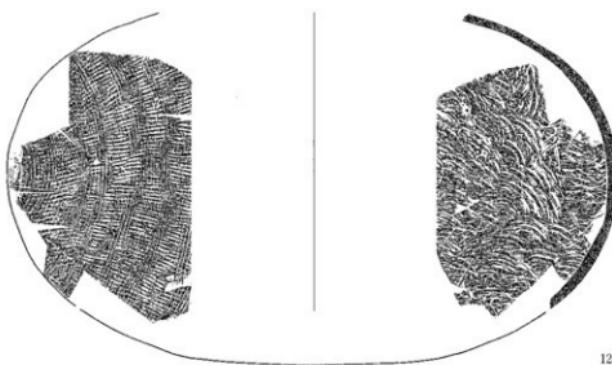


図67 C-6号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)



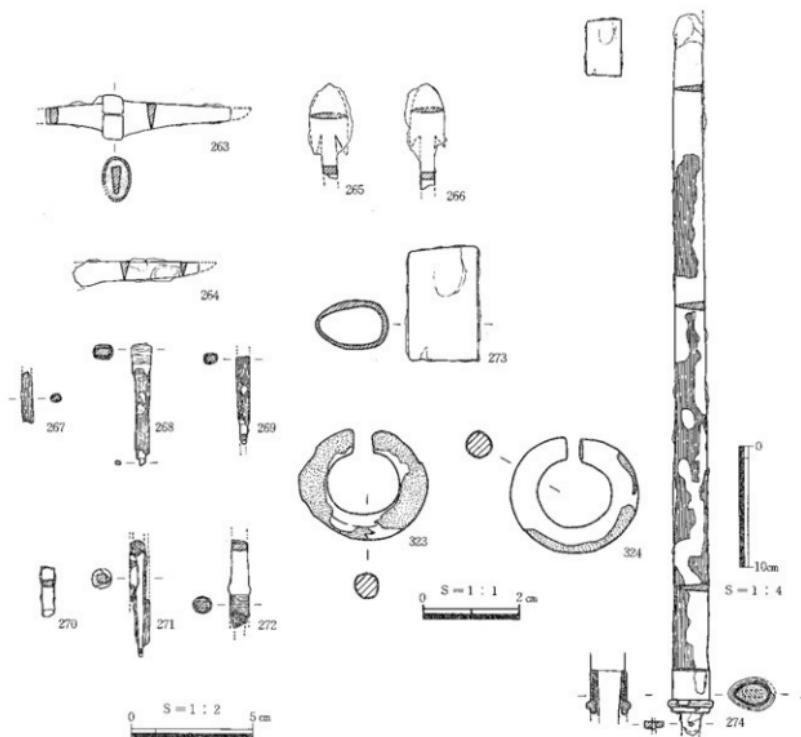
119



120

挿図68 C-6号横穴墓出土遺物実測図 土器(2)





挿図69 C-6号横穴墓出土遺物実測図 鉄器・耳環

7、C-7号横穴墓 (挿図70~75、図版21・22・47~50・53)

立地 C-7号横穴墓はC-6号横穴墓のすぐ南隣りに位置し、両横穴墓主軸間で5.5mの位置関係にある。主軸はN-68°-E (A-A')で、東北東方向に開口している。傾斜角20°~30°の比較的急峻な山腹に掘り込まれており、前庭前端の標高は主軸上で41.24mを測り、尾根上との比高差が約10.6mある。また、横穴墓自体も玄室奥壁から前庭前端に向けてゆるやかに傾斜している。主軸上で玄室奥壁沿いの床面の標高42.37m、傾斜角約5°であるが、前庭のほぼ中央で傾斜が変わり、前庭前端に向けて傾斜角約13°とやや急になる。

なお、本横穴墓も、特に羨道と玄門の崩落が激しく、この部分の天井形態の詳細は不明である。

前庭 前庭は、主軸上で長さ5.64m、前庭前端で幅4.00m、前庭奥壁側で幅1.36mの広さがある。平面形態は、端正な台形状を呈するが、床面の加工は雑で、特に前半分で凹凸が激しい。また、羨道部から前庭中央にかけての床面には、ほぼ主軸に沿って、幅約26cm、深さ約3cmの断面U字形の浅い溝が走る。羨道と玄門の間の閉塞用溝に端を発しており、排水溝と考えられる。両側壁も、床面同様荒く仕

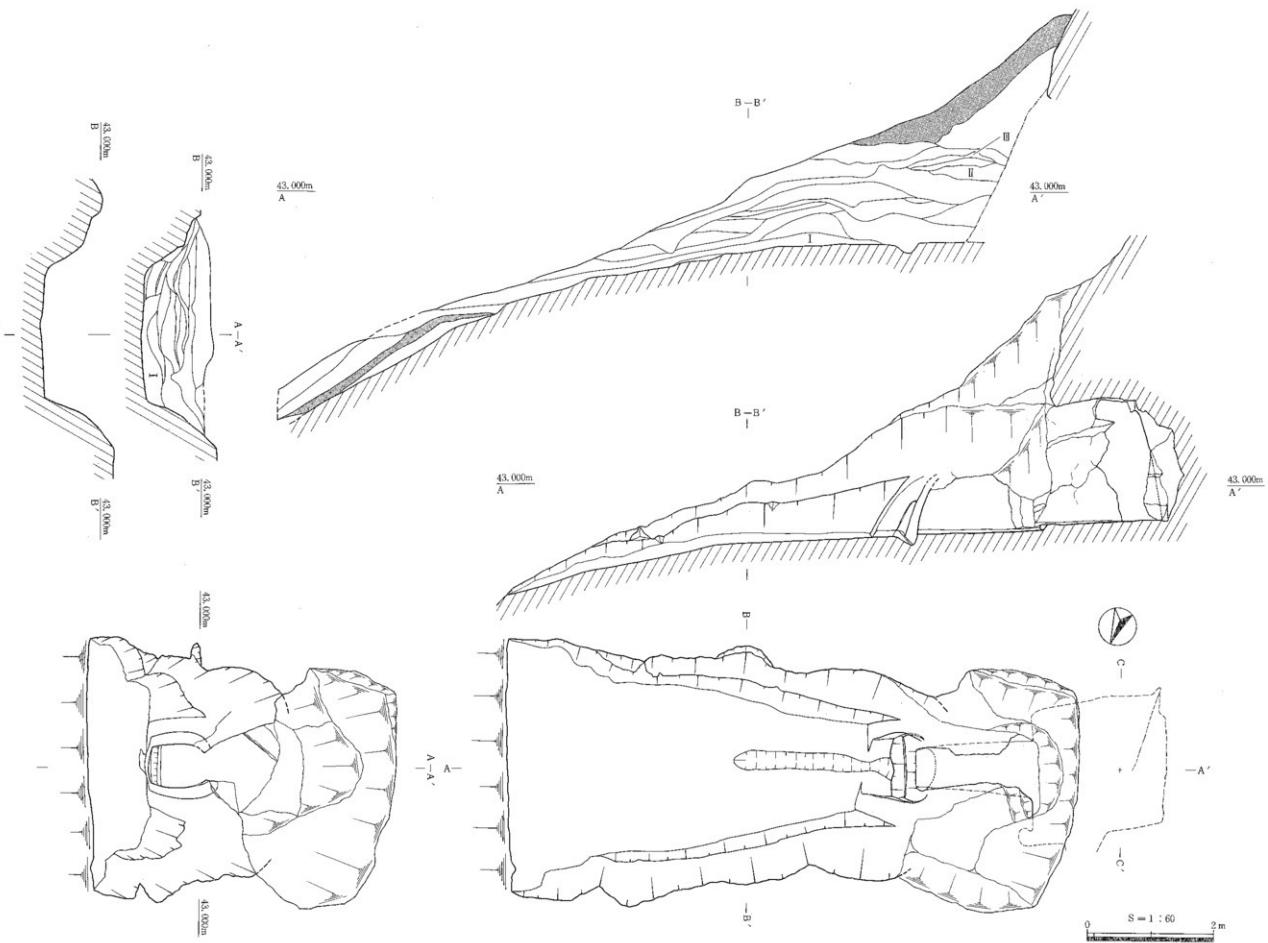


图70 C-7号横穴窑素描图

上げられており、床面から直線的に立ち上がり、途中で傾斜をややゆるやかに変える。その結果、横断面形態はバチ形を呈する。一方、前庭埋土のうち、Ⅱ層とⅢ層は、基盤層のブロックを大量に含むべきわめて軟質の砂層であることから、羨道と玄門の初期崩落土と考えられる。間層ははさむことから、崩落が断続的におきたことがわかる。なお、少なくとも土層堆積からは、追葬は確認できない。

前庭直下には、ブラック・バンド（黒色土層）の上にⅣ層、Ⅴ層の2層が堆積し、さらにⅥ層直上面には前庭から流れ落ちた蓋杯がのっていた。ブラック・バンド（黒色土層）は、前庭前端の直下でカット面を形成していたことから、横穴墓築造以前の旧地表と考えられる。旧地表が、あたかも盛土でパックされた如くに遺存していることと、Ⅴ層直上面の蓋杯が、本横穴墓の中では古相（2期）を示す一群であること、そして、Ⅳ層、Ⅴ層が基盤ブロックを含み、土色も基盤層に近似することから、この2層は横穴墓築造時の排土である可能

性が強い。

羨道

羨道は、前庭奥壁の左、右両側を掘り残して袖を形成するが、袖自体は、左袖で約0.9m、右袖で約0.6m立ち上がって側壁中位の稜線に合流したところで奥壁に解消してしまう。掘り込みの正面観は、天井部を欠くものの、釣鐘状を呈すると推定される。くり抜き部分の現存最大幅は、1.07m、奥行は床面主軸上で0.77mを測る。天井部の奥行は、ほとんどなかったものと推定される。

閉塞

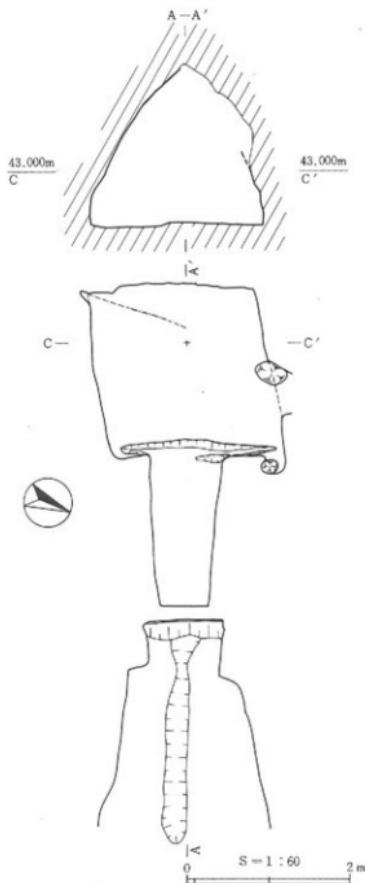
閉塞は羨道と玄門の境で行なわれている。羨道の玄門側床面を主軸に直交して長さ100cm、幅35cm、羨道床面からの深さ13cmの溝状に掘り込んでいた。木質は残存しておらず、他横穴墓にみられるような基盤ブロックも置かれていなかったが、木蓋を溝にはめ込んで閉塞していたものと思われる。

玄門

玄門は、玄門正面壁を袖に掘り込まれており、床面は羨道より約3cm高くなっている。羨道側で最大幅0.70mだが、奥に行くほど幅が広くなり、玄室側では現存最大幅が0.89mある。また、全長は主軸上で1.86mを測り、大塔山横穴墓群中では最も長い。横断面は、側壁の立ち上がりから、羨道同様、釣鐘形の断面形態を呈すると想定される。なお、床面に排水溝は認められなかった。

玄室

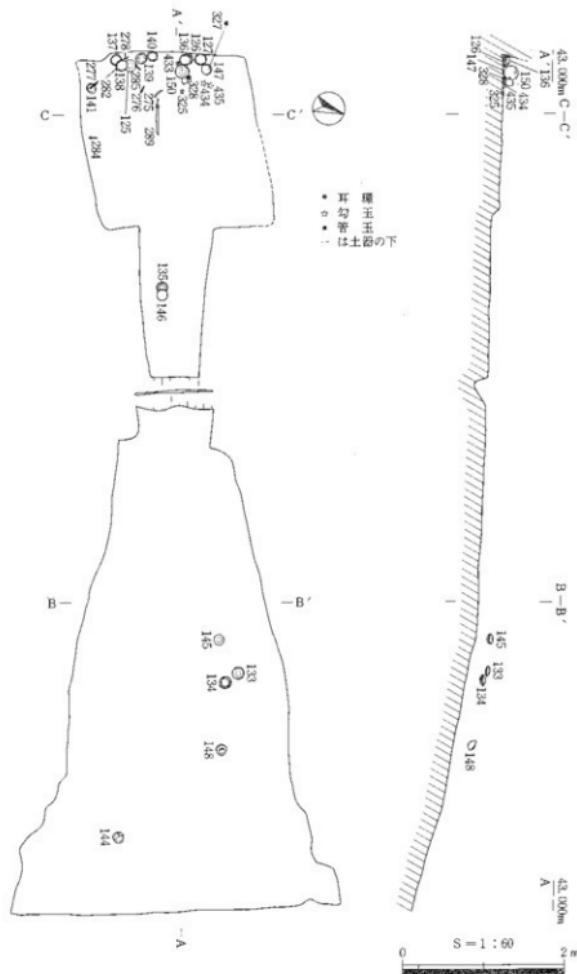
玄室は、主軸長2.13m、玄室横断軸（C-C'）長2.12mで、ややいびつな正方形となる。床面は、全体に玄門床面より約10cm高くなっており、凹凸が著しい上、尻床の



挿図71 C-7号横穴墓玄室造構図

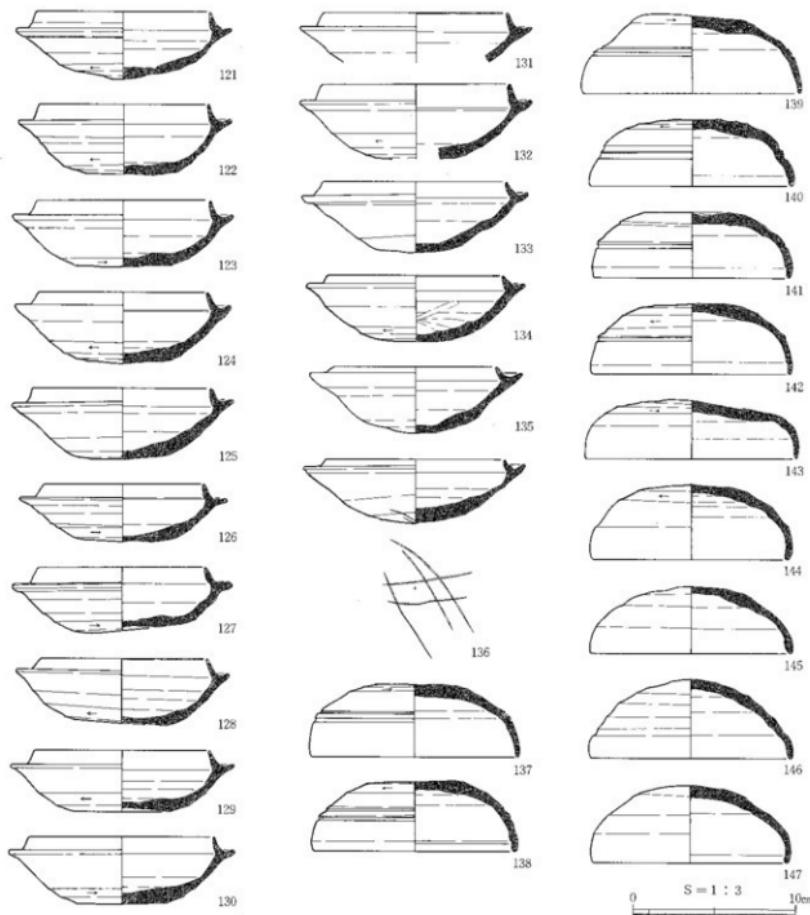
施設もない。また、排水溝も巡っていない。天井は崩落によって右半分がすでに失なわれていたが、左半分の一部に残存していた棟線の立ち上がりから、妻入りの断面三角形の立面形態をとることは明らかである。残存する棟線はいずれもほとんど直線的で、壁同士を明瞭に画している。棟線は残っていなかったが、床面から天井頂部までの高さは、玄室横軸上で1.9m前後となる。

遺物 遺物は、先述した前庭直下のV層直上面の一群の他、前庭からはI層直上面で、右側壁寄りの蓋杯
出土状況 133・134・145と短頭蓋148および前庭前端近くの杯蓋144が、玄門床面からは蓋杯135・146が出土して

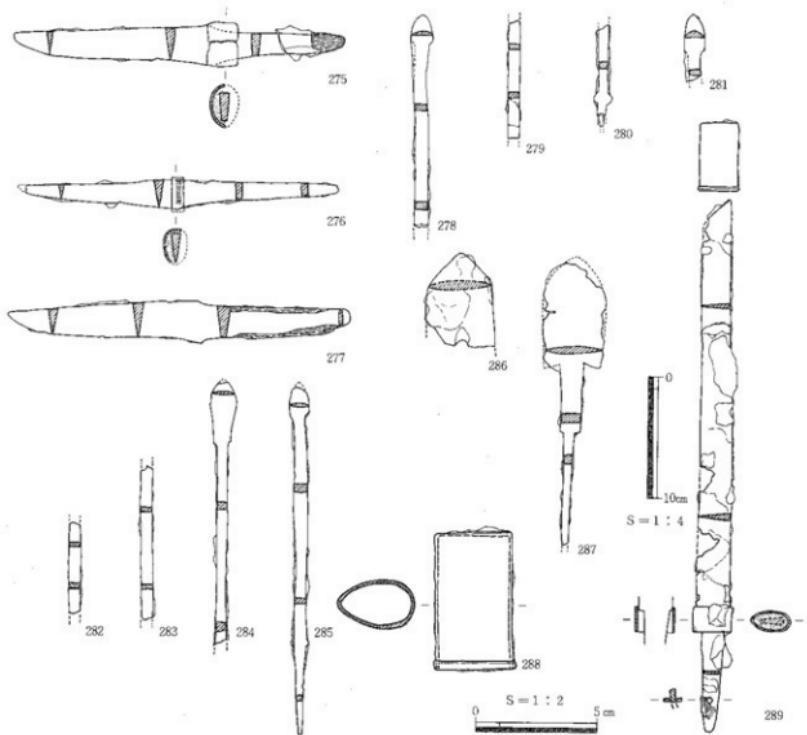
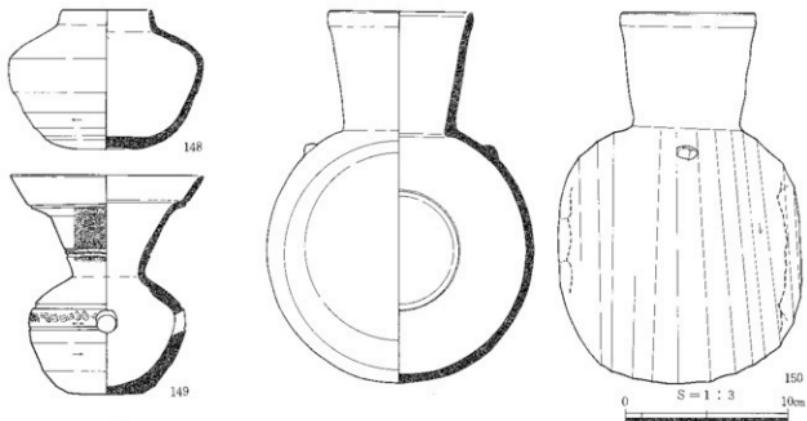


插図72 C-7号横穴墓遺物出土状況図

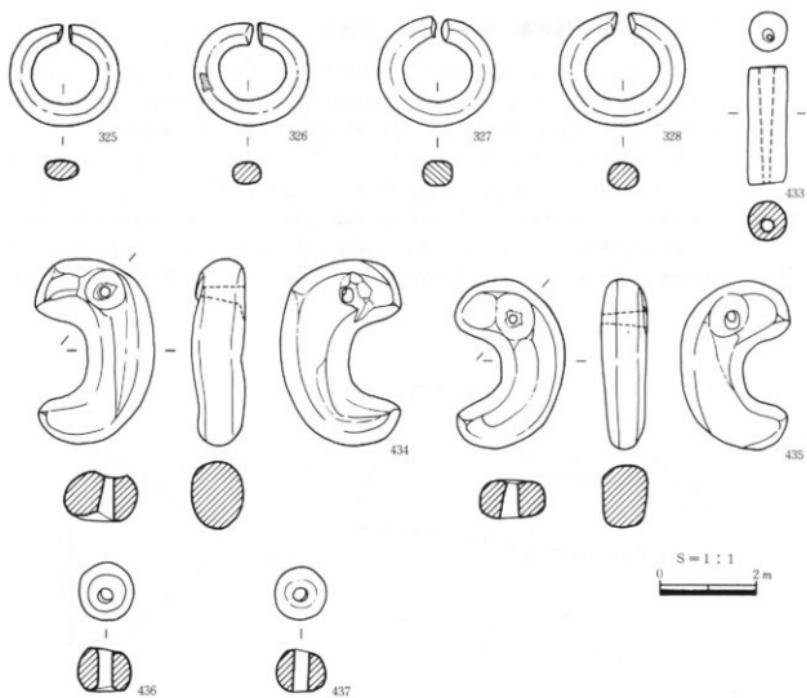
いる。このうち、V層直上面出土の杯身123と杯蓋142、杯身134と杯蓋144、杯身135と杯蓋146はセットである。また、玄室内では、第一象限の奥壁沿いから蓋杯127・136・147、提瓶150、耳環325～328、碧玉製の管玉433、メノウ製と碧玉製の勾玉434・435が出土し、第二象限からは蓋杯125・137～141、鉄製の刀子275～277、鎌278・279・282・284・285・287、直刀289が出土した。このうち、杯身127は前庭出土の杯蓋145と、杯身125は杯蓋137とそれぞれセットの可能性があり、杯蓋138はV層直上面出土の杯身124とセットである。この他、玄室内からはガラス製の丸玉436と火成岩製の丸玉437が出土している。玄室内の遺物のうち、第一象限、第二象限の奥壁寄りの一部は、あたかも片付けられたような様相を示しており、この中に新古の遺物が混在することから、この状況を追葬にともなうものと想定することも可能である。



挿図73 C-7号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)



擇図74 C-7号横穴墓出土遺物実測図 土器(2)・鉄器



挿図75 C—7号横穴墓出土遺物実測図 耳環・玉類

時 期 出土した須恵器からみると、大塙山土器編年の2期～3期の二時期が認められる。従って、墓造時期は2期と考えられ、以後、数次の追葬が行なわれたと考えられる。

(松井 漣)



写真7 C—7号横穴墓玄室内発掘調査風景

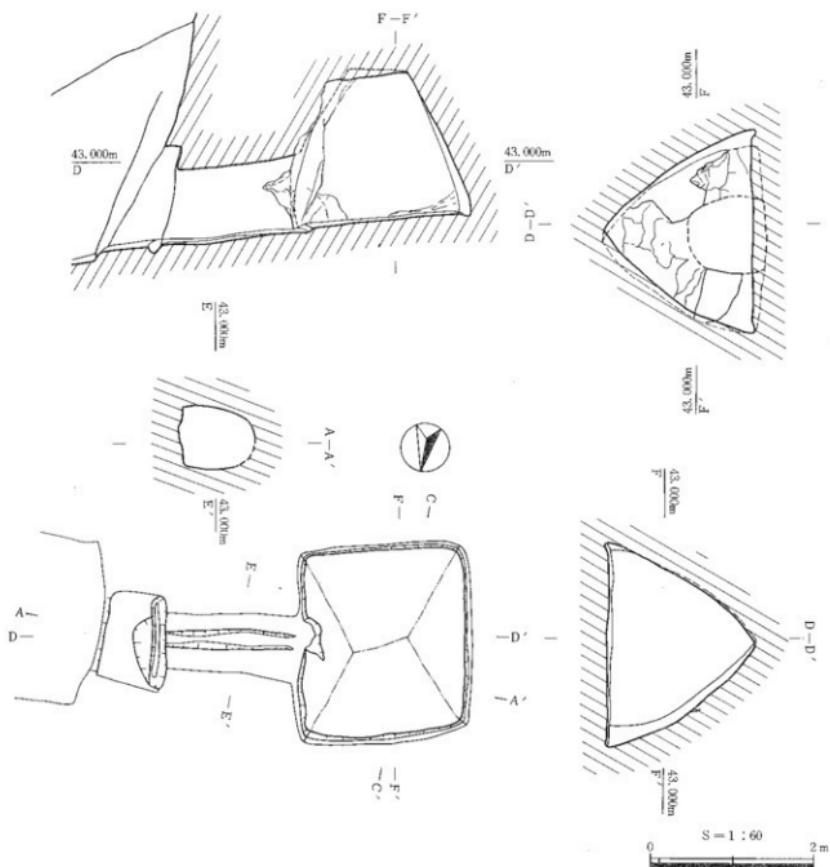
8、C-8号横穴墓（挿図76~82、図版23~25・50~53）

立地

C-7号横穴墓とC-9号横穴の間にあり、主軸間ではC-7号横穴墓とは5.5m、C-9号横穴とは4.5m離れて隣接している。C-Ⅲ小支群の完成横穴墓としては最も南に位置する。C区頂部より10.70m下方の南側緩斜面に築造され、前庭端部で標高41.17mを測る。前庭主軸をN-83°-Eにとり、東方向に開口している。羨道、玄室は前庭より南よりに折れて築造されている。そのため、羨道、玄室については主軸とは別にN-79°-E方向の軸（D-D'）を設定した。

前庭

前庭床面の長さは6.18mあり、前庭奥壁側幅2.00m、谷側幅2.68mを測り、基盤層への掘り込みは最も深い前庭奥壁側で床面まで2.95mに達する。床面の平面形は谷側ほど幅の広くなる長台形を呈し、横断面形は側壁が外反しながら立ち上がり明瞭なバチ状となる。床面は前庭端部付近に多少凹凸がみ



挿図76 C-8号横穴墓玄室遺構図

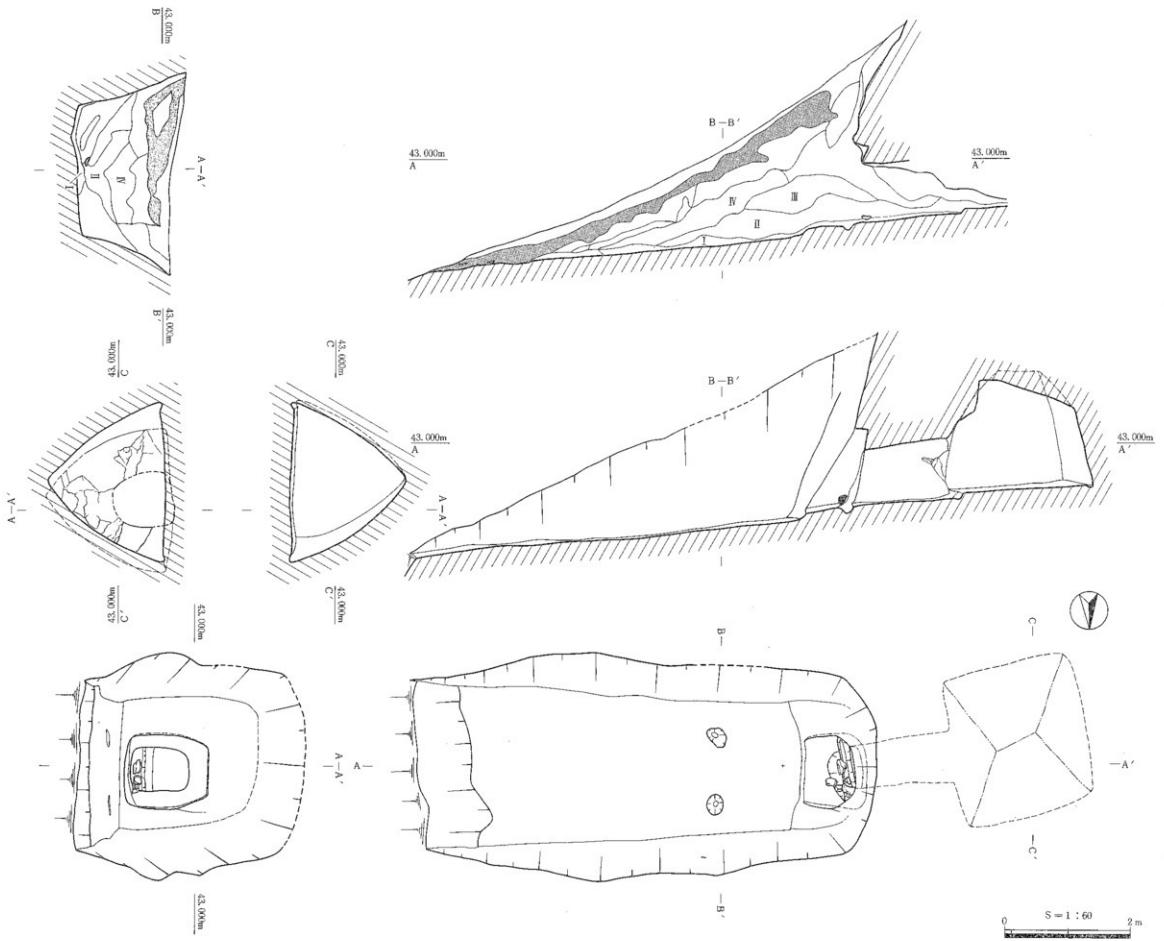
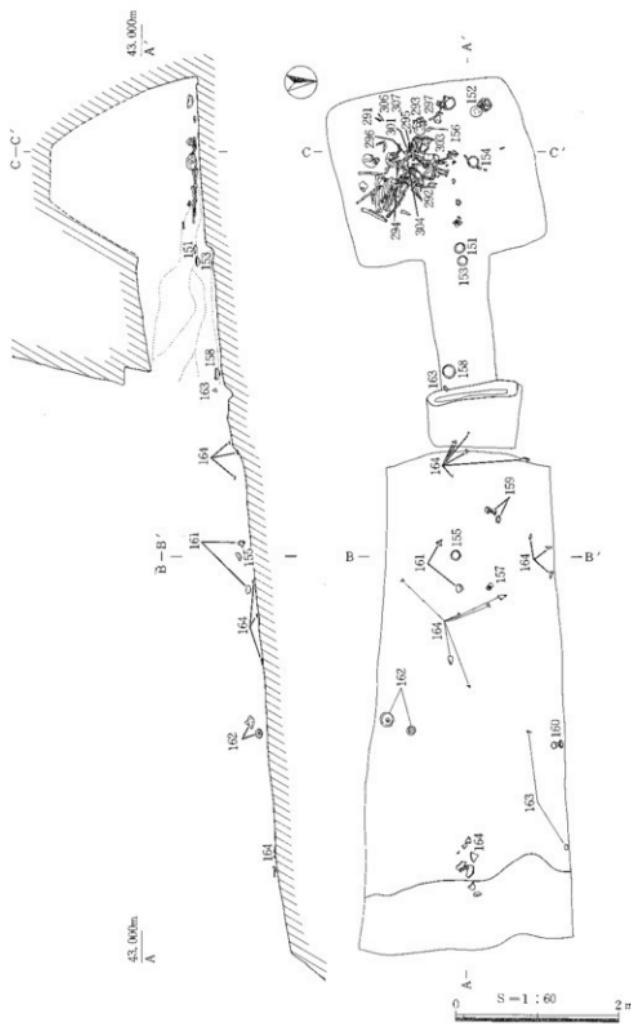
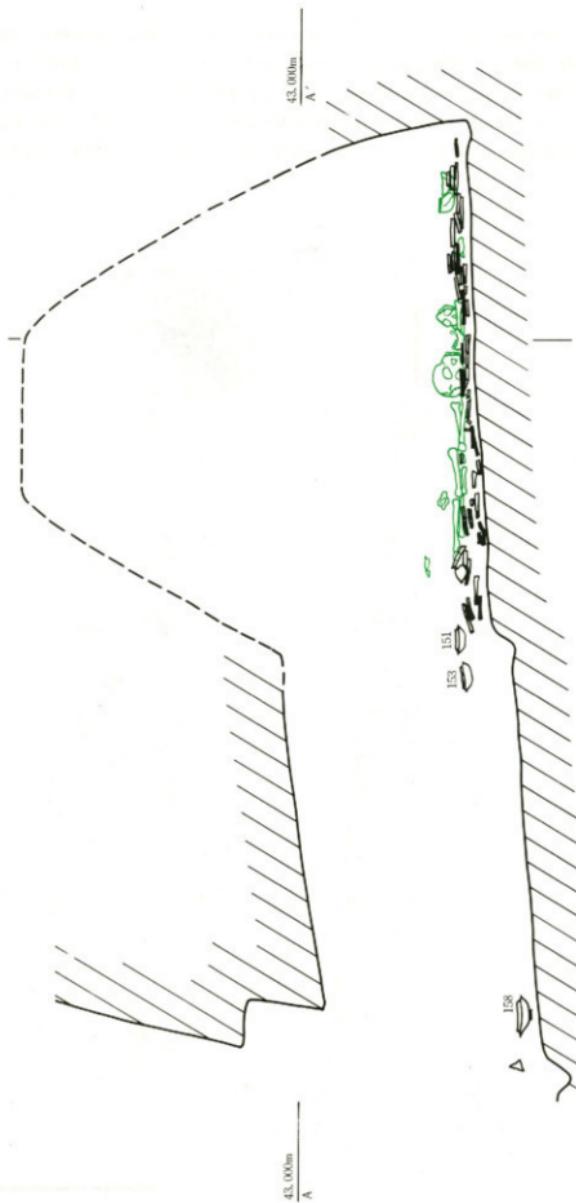


插图77 C—8号横穴墓断面图

られる以外丁寧に加工され、谷側へ 6° の傾斜をもって緩やかに降る。前庭奥壁から谷側へ1.20m降った床面に長軸30cm、短軸25cm、深さ4~10cmの対になった楕円形のピットを検出した。ピット内には基盤の礫を含む粘質の明茶褐色土が入っていたが、遺物は出土しなかった。最奥部正面には幅2.10m、高さ2.95mの前庭奥壁を造っており、前庭床面から推定高2.20mまでは特に丁寧に壁面を調整している。前庭奥壁下位中央付近のやや右よりに溝道が掘り込まれている。前庭埋土は床面直上に厚さ10cm



挿図78 C—8号横穴墓遺物出土状況図



擲図79 C-8号横穴墓玄室内遺物出土状況図



尾床の須恵器片は
遺物番号 163

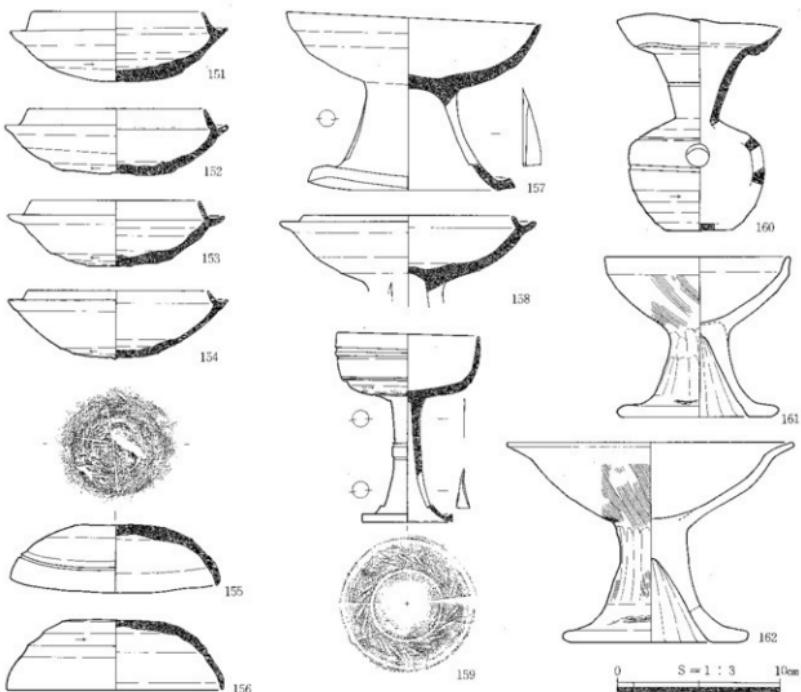
以下の粘質土Ⅰ層が貼り付いており、遺物がこの面より出土することから、埋葬時は概に床面として形成されていたものと推定される。Ⅰ層の上には基盤ブロックを多く含むⅡ～Ⅳ層があり、最終埋葬後少なくとも閉塞施設が完全に隠れるくらいには埋め戻されたと考えられる。さらに上層には、自然堆積と考えられるブラック・バンド（黒色土層）の堆積がみられた。渓門付近では各土層は玄門に向って落ち込んでおり、玄門、玄室にかけてかなりの土が流入していたが、埋め戻し後閉塞施設（木蓋？）が腐朽して前庭埋土が玄門へと流入したものと考えられる。

追跡行為の痕跡は、土層断面からは認められなかった。

羨道 羨道は段差をもって前庭床面より8cm高く、下端幅1.20m、上端幅0.75m、高さ1.27mを測り、正面観は整正な隅丸台形に掘り込まれている。奥行は非常に短く、床面の奥行0.60m、幅1.16m、天井部奥行0.20mを測る。前庭、羨道には排水溝は検出されなかった。

閉塞 閉塞は玄門と羨道の間で行なわれている。玄門正面壁の中央付近に幅0.70m、高さ0.90mの玄門が掘り込まれており、直下に主軸方向に直交して長さ110cm、幅20cm、深さ8cmの断面U字状の溝が掘られている。閉塞はおそらく、木蓋の類を溝にはめ込み、玄門壁にもたせかけたものと考えられ、蓋の押えに用いたと思われる基盤ブロックが溝上に数個置かれていた。

玄門 玄門の中心軸は主軸から左へ約5°曲がり、床面が谷側へ緩やかに降っている。床面で長さ1.60m、最大幅0.80m、最大高0.95mを測り、中央に幅15～25cm、深さ3cmの断面U字状の排水溝が通る。玄



挿図80 C-8号横穴墓出土遺物実測図 土器(1)

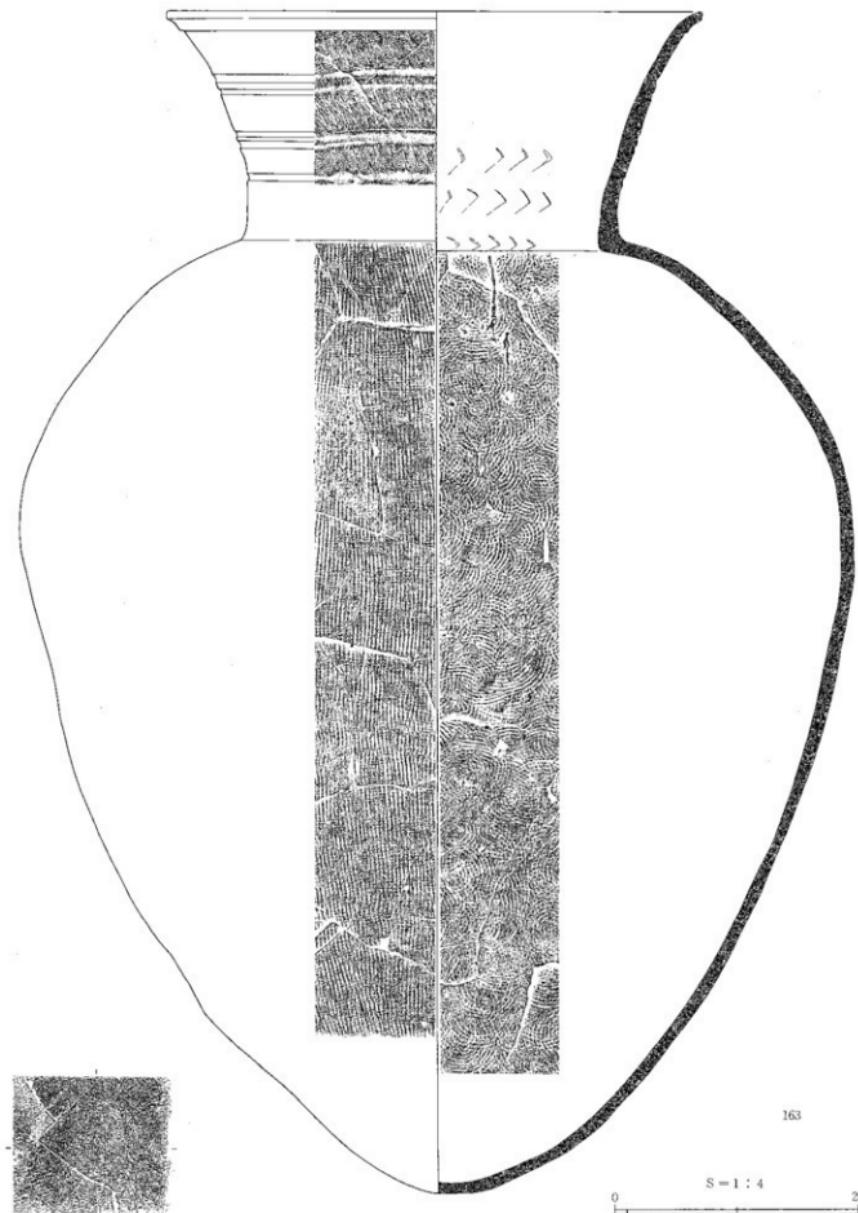
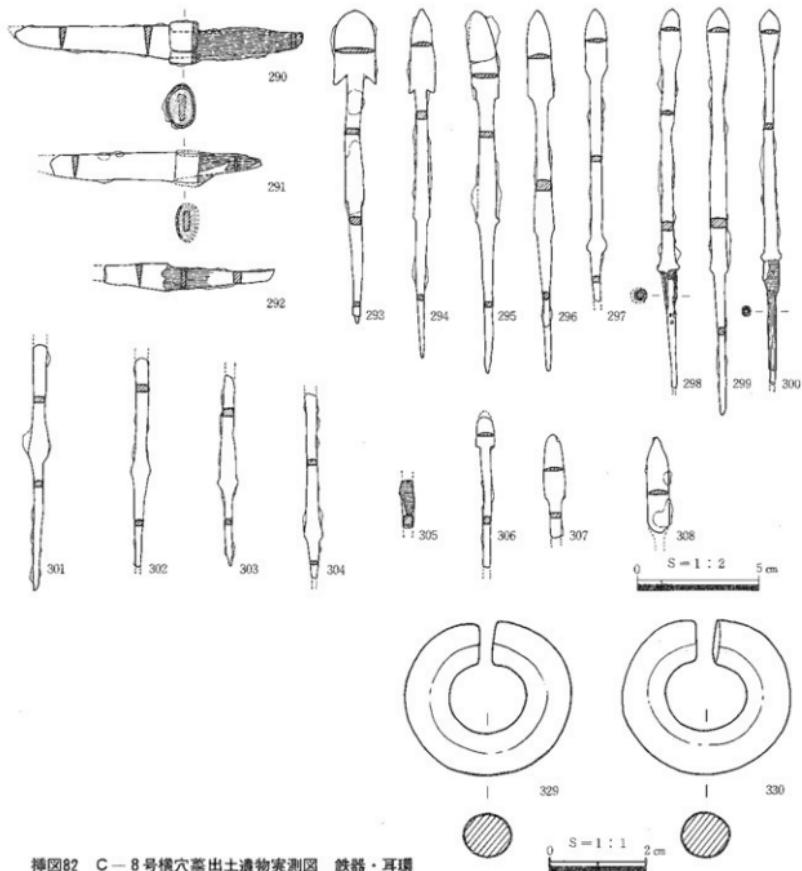


插图81 C—8号横穴墓出土遗物实测图 土器(2)

門横断面形は釣鐘状を呈し、床面、壁面とともに幅の狭い工具で丁寧に加工され平滑に仕上げられている。

玄室 玄室床面は長さ2.20m、奥壁側幅2.20m、前壁側幅2.35mのほぼ正方形である。立面形態は天井と壁の区別のない断面三角形で、高さ1.80mを測り、妻側に玄門がつく。床面壁際には幅10cm内外、深さ2~7cmの側溝が巡るが、玄門の溝との接続は不明瞭であった。玄室床面は、約3°玄門に向けて傾斜している。横断面形をみると奥壁が玄室床面に対して約70°の傾斜をもって立ち上がり、前壁はほとんど崩壊しているため推定線ではあるが、台形状を呈する。天井部の棟線は主軸から左へ約25°向きを変え深く掘り込まれ、左、右側壁を分離しており、各稜線も明瞭である。側壁、奥壁面ともやや幅広の工具で丁寧に加工されており、前壁を除きほぼ良好な遺存状態であった。

須恵器 須恵器大型甕163を破碎した破片が、玄室床面中央、玄門付近を除いて散かれ、須恵器屍床を形成していた。検出時において須恵器片の敷き方には粗密が認められ、敷かれた当時の旧状を留めてはいる。



挿図82 C-8号横穴墓出土遺物実測図 鉄器・耳環

かった。おそらく、追葬行為に伴い動かされたものと推定されるが、あえて復元すれば左、右両側に屍床を設けたものと考えられる。

人骨

玄室内中央付近で数多くの人骨を検出したが、原位置を保つものではなく、四肢骨の周辺に頭蓋骨が点在するという状況で、流入土に乗っている骨もあり、湧水による水没に伴い移動したものと考えられる。頭蓋骨でみると、熟年の男性が2体、壮年～熟年の女性が1体、壮年の女性が3体、9才前後の小児1体の合計7体の埋葬が確認された。ただし、四肢骨は比較的の遺存状態が良いにもかかわらず、3～4体分しか検出されなかった。

遺物

遺物は前庭表土中から須恵器横瓶165の破片が出土した。横瓶165はC-7号横穴墓から出土した破片を主体に接合しており、隣接するC-7号横穴墓から破片が流入してきた可能性が強い。提瓶164の破片は、前庭、狭道の広範囲にわたり散乱した状態で検出され、一部の破片はC-5号横穴墓の前庭ブラック・バンド(黒色土層)中からも出土した。出土レベル高も、ブラック・バンド中、IV層直上、前庭・狭道床面密着と多岐にわたる。玄室内の須恵器屍床に使用した大型壺163の破片もブラック・バンド、IV層、前庭床面直上から出土しており、大甕が横穴墓後背尾根上で壊され玄室内にもち込まれた可能性を示唆している。須恵器高杯157の破片は大甕片に混じって玄室内と前庭床面直上より、それぞれ出土した。これらの土器は埋葬に伴う祭祀行為に用いられたと考えられるが、その接合関係が何を示すかは不明である。その他前庭において、須恵器杯蓋155、須恵器高杯159、須恵器庭160、土師器高杯161・162が床面から浮いて出土しており、これらは埋葬時の床面Ⅰ層上面が形成されていたことを物語るものである。ただし、庭160は床面から56cmも浮いており、他の土器の埋葬時期と異なる可能性がある。閉塞付近の玄門床面から脚部を欠損した須恵器有蓋高杯158が出土した。玄門奥側床面から約15cm浮いて須恵器身151・153が検出されたが、流入土上に乗っており、2次的な移動をしたものと考えられる。玄室内には大型壺163が須恵器屍床として割り敷かれていた他、第一象限に須恵器杯身152・154、第二象限に須恵器杯蓋156がいずれも床面直上におかれていた。須恵器以外には須恵器屍床破片に混じって鉄器が人骨周辺で出土し、刀子290、鉄鎌293・300・301・303は須恵器屍床下、鉄鎌294・296・298・302は頭蓋骨下より検出された。中空の大型耳環329・330は80cm程離れて玄室中央付近で出土した。C-8号横穴墓は規模、加工とも大塔山横穴墓群で第1級の横穴墓であるにもかかわらず、副葬遺物は直刀も玉類も持たず貧弱な点が注目される。

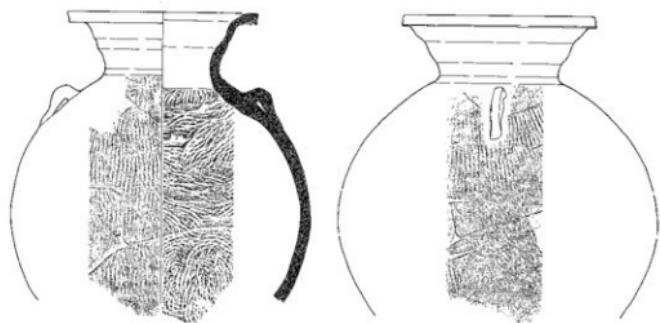
時期

出土した須恵器からみると、大塔山土器編年の1・2期の二時期が認められる。従って、築造時期は1期、そして以後、数次の追葬が行なわれたと考えられる。

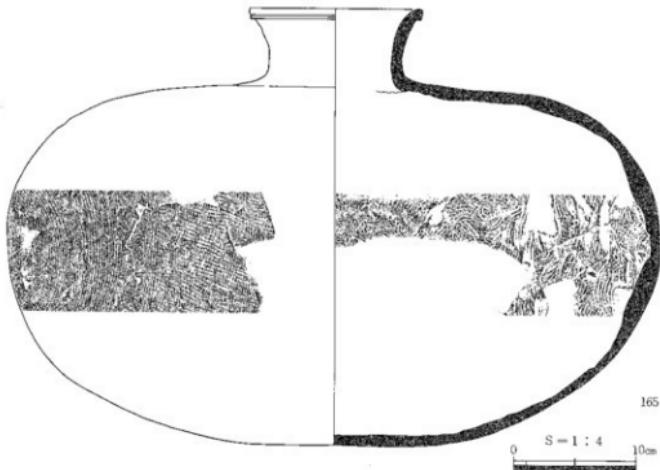
(中村 慎二)



写真8 C-8号横穴墓発掘調査風景



164



165

挿図83 C-5(164)、C-6+C-7(165)、C-8(164、165) 各横穴墓出土遺物実測図 土器

9、C-9号横穴（挿図84、図版25）

立地 第1次試掘調査のトレンチ（1-10T）によって確認されており、C-8号横穴墓の南側と隣接し、C-III小支群中最も南側にある。傾斜24°の斜面に掘削されており谷側端部は標高44.40m、尾根からの標高差は約7mを測り、C-IV小支群中最も高所にある。主軸はN-89°-Eでほぼ真東に向いている。

造構 造構の規模は造構確認面で、長さ5.35m、最大幅3.55mを測る。前庭に相当する部分の床面は、奥壁側幅1.42m、谷側幅1.78m、中央部の最大幅2.95mで、やや楕円形を呈している。床面の長さは、4.50mを測り、奥壁から谷側に向って傾斜10°で、1.3m程降ったところに高低差35cmの段を持つ。段より下位は、再び谷側に向って傾斜16°で降っていく。床面の加工は雑で凹凸が多い。基盤層への掘り込みは、奥壁側が最も深く1.4mを測り、谷に向って徐々に浅くなる。奥壁に向って左側の側壁は1m内外掘り込んであり、壁面も平滑だが、右側の側壁は2cm程度しか掘り込まれていない所もある。前庭奥壁の左端に幅0.78m、奥行0.56m、最大高0.65mの穴が穿たれており、穴の内部には岩盤が露

出している。奥壁の右側は比較的丁寧に加工されている。

連構内では、遺物は検出されなかった。

本遺構は、後部掘削途中で築造放棄した未完成横穴と考えられる。土層の堆積を見ると、床面に近い層は径3mm~3cm程度の礫を多く含んでいることから、築造を断念した後、ある程度埋め戻しを行なっており、その上に自然堆積のブレック・バンド(黒色土層)の堆積がみられた。築造を放棄した理由として、後部掘削途中に硬質な岩盤に当り、築造を断念したものと考えられる。また、前庭の掘り込み不足が原因とは思われるが、築造場所が丘陵の頂上に近く、高所過ぎることも横穴墓築造に支障があったのではないかと考えられる。

(西浦 口出夫)

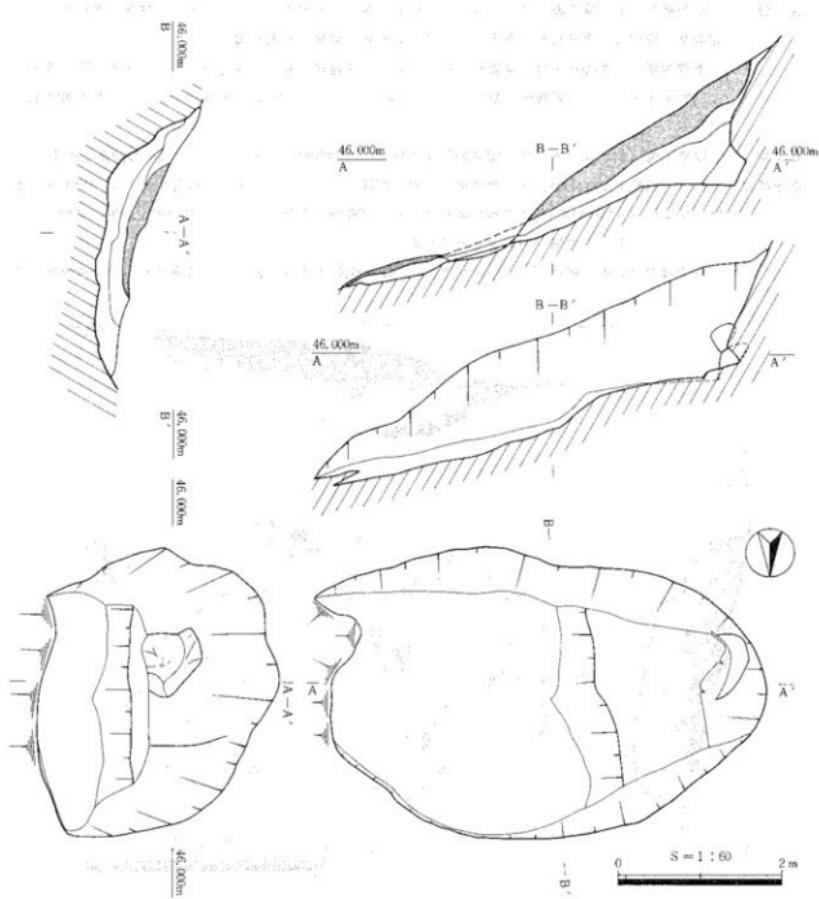


図84 C-9号横穴遺構図

第4章 その他の遺構と遺物

大塔山地区の発掘調査では、横穴墓群を中心に調査が行なわれたが、調査の過程で横穴墓以外の遺構と遺構に伴わない若干の遺物を検出した。本章では、これらを一括して、取り扱うこととする。

第1節 不明遺構

1. 不明遺構1.(挿図85・86、図版26・53)

立地 B区の最も南側の緩斜面に立地する。

遺構 東西軸3.30m、南北軸2.25m、深さ約0.60mを測り、不整形なプランを呈す。床面も凹凸が多い。

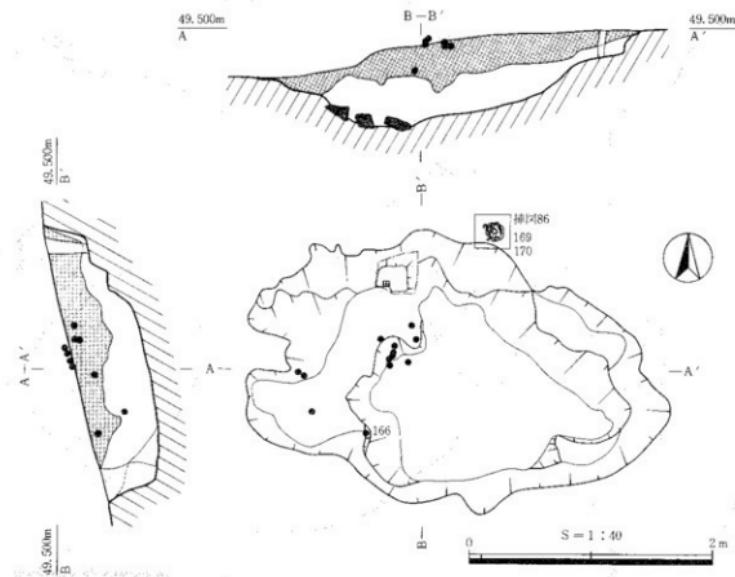
北側及び西側は、自然地形を利用したものと思われ、硬質な岩盤が露出している。

遺構内埋土は黒褐色土層と黄褐色土層からなる。黒褐色土層は1cm大のブロックをわずかに含み、土器片を含んでいる。黄褐色土層は、0.5~1.0cm大のブロックを含み、わずかではあるが炭化物を含んでいる。

遺物 遺構上面(表土中)からは、須恵器杯身片167、土師器杯片168が出土している。黒褐色土層中には、

出土状況 土器片が散乱していたが、主に中央部からやや西側にかけて分布する。図化できるものは弥生土器甕口縁部166のみであり、その他は細片のため、器種等は不明である。土器の出土状況は挿図85にドットで示しておく。遺構の性格は不明である。

不明遺構の北側に隣接して、土師器杯169と須恵器壺170が表土直下より検出された。検出時は、土



挿図85 不明遺構1遺構図

師器は須恵器の周辺に散乱していたが、一部須恵器にかぶさった状況がみられた。須恵器は、口縁部を既に欠いており、本来は口縁部を欠いた須恵器の口を土師器杯で覆って埋置したものと思われる。須恵器が出土した地点は黒褐色土層中であり、掘りかたは確認できなかった。

時 期 不明遺構の時期は、166が弥生時代中期～後期と考えられるが、積極的根拠とは言い難い。不明遺構に隣接する土師器及び須恵器は、平安京の須恵器編年で9世紀後半に位置づけられている。

(近藤 哲雄)

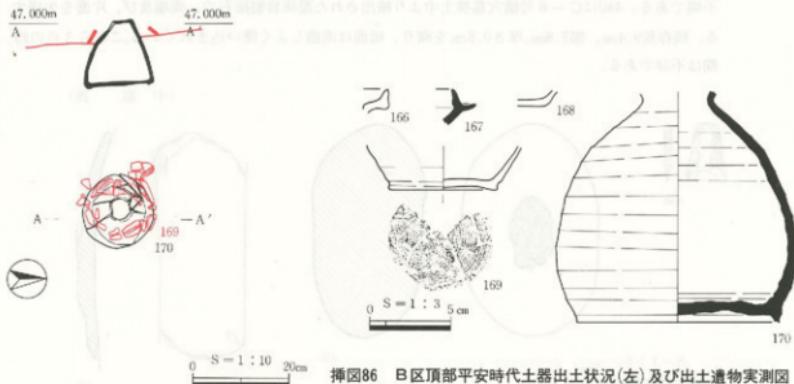


図86 B区頂部平安時代土器出土状況(左)及び出土遺物実測図

(166～168は不明遺構1出土)

2. 不明遺構2.(挿図87、図版26)

立 地 C-1号横穴墓の上方、標高47.57m～47.98mの緩斜面に立地する。

遺 構 東西1.09m、南北0.59mを測り、不整形な平面形を呈す。底面はまず基盤層を深さ0.30m程度掘った後、東側を更に約0.30m程度粗く掘り込んでいる。

埋土は、しまりのない黄赤褐色土層のみである。この層はC-1号横穴墓上方において、ブラック・バンド（黒色土層）上に堆積しているのが観察された。この遺構からは、遺物は検出されなかつたため、時期・性格は不明である。

(近藤 哲雄)

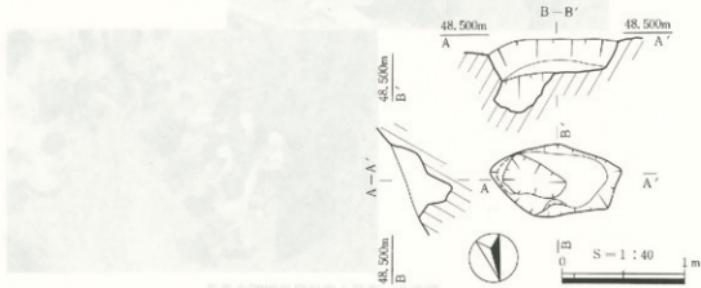
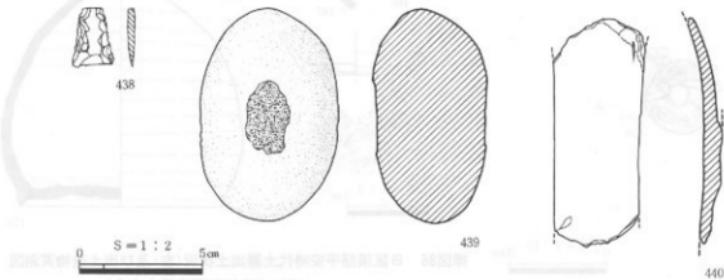


図87 不明遺構2遺構図

第2節 遺構外遺物（挿図88、図版53）

調査区全域で、横穴墓あるいは不明遺構に伴なわない遺物として石製品3点と若干の土器片を検出している。土器片は細片であるため、石製品のみを図化した。A-2号横穴墓排土中より出土した石鎌438は淡灰色を呈する安山岩製で、平基無茎の形態をとる。先端を欠損し、残存長2.3cm、厚さ0.3cmを測る。C-4号横穴墓下の斜面で出土した擦石439は、全面が磨滅し、長さ8.7cm、幅5.7cm、厚さ4.7cmを測る。両平担部中央に敲打痕がみられ、重量321gである。石材は表明観察では断定できず、不明である。440はC-6号横穴墓排土中より検出された凝灰岩製砥石で、両端及び、片面を欠損する。残存長9.4cm、幅3.8cm、厚さ0.8cmを測り、砥面は渦曲しよく使い込まれている。これら3点の時期は不詳である。

(中原 齊)



挿図88 遺構外出土石製品実測図



写真9 車尾小学校現地説明会風景

第5章 考察

大塙山横穴墓群の発掘調査の結果、6世紀後半～7世紀前半の横穴墓群と時代及び性格不明の遺構・平安時代の若干の遺物が検出された。いうまでもなく当遺跡の中心は14基（未完成横穴4基を含む）に及ぶ横穴墓である。近年、鳥取県西部では、米子市・日野郡江府町・日南町で横穴墓の発掘調査例が急増しており、当地域における横穴墓の様相が徐々に明らかになりつつある。以下にはこれらの成果を踏まえて、当横穴墓群の遺構や遺物について若干の考察を行ない、それらの持つ問題点や課題等を抽出して報告の資を果したい。なお本章で触れない遺構や遺物の詳細については本文及び観察表にて替えることとする。

第1節 横穴墓の構造

各部名称 従来、横穴墓はその発生、展開において横穴式石室との強い親縁性が考えられており、山陰においても山本清氏は横穴墓の形態を詳細に検討して、その構造的特徴が横穴式石室・石棺式石室あるいは横口式家形石棺の構造と極めて類似していることを指摘している（山本1962）。したがって、横穴墓の各部名称も横穴式石室の構造に準じており、一般的には横穴墓の構造は玄室・羨道・前庭（墓道）からなるとされてきた。すなわち、玄室は死者を埋葬し副葬品を納める空間であり、羨道は外部より玄室へ通じる通路で、ここを閉塞することにより墓の内部と外部は遮断される。前庭（墓道）は横穴墓に通有な羨道前方の空間を指す。幅の広い切通し状を呈し、横穴墓が立地する斜面から地中深くに位置する入口（羨道）への通路であると共に、埋葬に伴う特別な空間と考えられてきた。本報告書では、横穴墓の構造を玄室・玄門・羨道・前庭に分けて記述した（例言の模式図参照）。従来、二重構造の羨道（狐谷1977）と呼ばれていた部分を、閉塞部を境に玄室側を玄門・前庭側を羨道と呼称したものであり、安来市高広横穴墓群の発掘調査報告書（高広1984）の呼称を採用している。但し、後述するようにこれは単なる名称変更に留まらず、山陰の横穴墓を考える場合の重要な意味をもってくるものである。

1. 玄室

横穴墓の構造の研究は玄室形態がすべてであったといつても過言ではない。それは、確かに玄室の平面形や天井形態が分布や時期を考える際に特徴として抽出し易く、形態分類の指標とされてきたからであるが、一方で盗掘等による既開口の横穴墓や開発行為に伴って工事中に発見された横穴墓を対象とせざるを得なかったため、羨道・前庭の構造が不明であったことも理由とされるであろう。玄室形態の分類は平面形あるいは立面形態を指標に試みられ、ほぼ大枠は示されている（山本1962、門脇1980、狐谷1977、田中1983、陰田1984）。

ここで門脇後彦氏の分類を掲げると、

I 四注式系	A 三角形断面形	a 妻入	b 平入
		a 妻入	b 平入
B 整正家形	a 妻入	b 平入	
	a 妻入	b 平入	
II 九天井系	C 半球形	a 妻入	b 平入
	D 方形断面形	a 妻入	b 平入

となる。この分類は山陰の横穴墓を天井形態で、I四注式系と、II九天井系に2大別する点に意味立地面形があり、門脇氏のいう二元的横穴墓觀（門脇1985）に沿うものであると考える。A～Dは玄室断面形の形態分類であり、a・bは玄門の付く位置での分類である。II九天井系については不整形なもの

含むがゆえにさらに細分、整理の必要があり、石見西部を対象とした田中義昭氏の検討もある（田中1983）。ここでは、I・四注式系の分類に沿って大塔山横穴墓群の玄室形態を検討すると、C-3号横穴墓を除いて、すべてIa・四注式系三角形断面形（以下「断面三角形」と略す）に属することになる。C-3号横穴墓は天井と壁との境に段差を掘り込み、軒先の表現を施しているが、床面から棟線へのカーブは、段がなければ断面三角形を呈しており、山本氏のいう「便化家形」に相当する。「便化家形」は「整正家形」と「断面三角形」等との中間形態と推定され、家形への強い指向を示すものである。

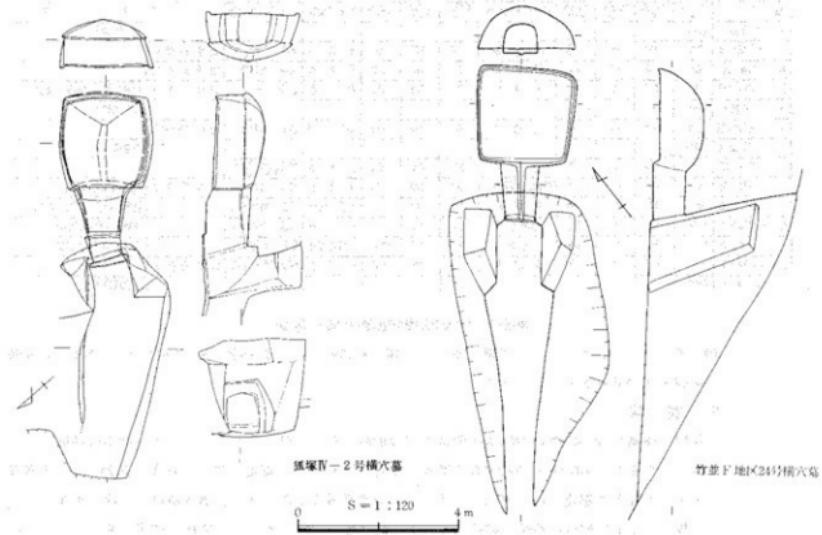
妻入・平入 ろうが、基本的には断面三角形に属すものと考えた。次に、妻入・平入の別は大塔山横穴墓群10基のうち妻入6基、平入4基とほぼ同数となっている。かつて門脇氏は日野川以西の米子周辺地域を断面三角形の分布する地域であるとし、米子平野は平入、西伯町域は妻入を中心とした分布地帯であるとした（門脇1980）。しかしながら横穴墓の導入から終焉までを継続的に把えうる陰田横穴墓群の調査によると、断面三角形妻入が主流としてある中に、平入形態の出現はやや遅れて、陰田Ⅲ・Ⅳ期にのみみられるのである（陰田1984）。陰田Ⅲ・Ⅳ期に限ってみると妻入7基、平入5基となり、大塔山横穴墓群の構成とほぼ等しい。断片的な資料であるが、この地域は初期を除けば西伯町域同様断面三角形妻入形態が主流としてある中で、一時期、安来平野の横穴墓の影響を受けて、断面三角形平入・便化家形という玄室形態が成立したと推定される。

平面形態 門脇氏は平面形については、IAaとCを除く他の形式の横穴墓はほぼ正方形を呈し、IAaは奥に細長く、Cは不整形となり、立面形態の分類の中に含まれるとしている。大塔山横穴墓群では、正方形を基本形とし、縱横どちらかに若干長いものがみられるが、極端に細長い長方形や台形といったものはみられない。この正方形基本の中で、やや微細に観察するとC-1・C-5号横穴墓は前壁が玄門に向けて突出し、平面的には五角形ないしは六角形を呈している。また、C-7号横穴墓は各辺の長さは等しいが正方形としてはかなり歪んでいる。立面形態をみてもB-1号横穴墓は断面三角形とはいながら断面釣鐘形に近く、C-1号も壁～天井のカーブがかなり外湾して弛緩した三角形を呈している。形態的にはC-1号横穴墓に代表される変形あるいは、粗雑化したものが新相を示すようである。

2. 玄門・羨道

ここでいう玄門・羨道構造は、松江市狐谷横穴墓群の調査報告の中で「二重構造の羨道」として「単純構造の羨道」と分類されているものである（狐谷1977）。狐谷では単純構造の発展ととらえ、閉塞部を境にして玄室側が本来の羨道であるとし、前庭側はその付属物とみている。高広遺跡の調査報告では、この二重構造の羨道をもつ横穴墓を出雲地方の石棺式石室と比較し、「二重構造の羨道」が石棺式石室の〈削り抜き玄門と羨道〉と同一のものであるとの見解を示しており、この観点から閉塞部を境にして玄室側を玄門、前庭側を羨道と呼ぶことを提倡している。ここでは、玄門・羨道構造をとるものを作A類、羨道をもたない玄門単純構造をB類と分類しておく。また、高広報告は横穴墓の伝播と構造変化の契機についても言及し、先述した門脇氏の二元の横穴墓觀に従い、丸天井系の横穴墓が導入期横穴式石室と共に九州から伝播し、出雲地方で石棺式石室の影響を受けて、玄門・羨道の二重構造をもつタイプへと構造変化をとげたことを推定している（足立・丹羽野1984）。かつて山本清氏が指摘した横穴墓と石棺式石室の類似を具体的に説明したものと考える。確かに出雲地方の横穴墓には安部谷横穴墓群をはじめ、明らかに石棺式石室をコピーしたものが存在し、横穴墓は伝播した地域の横穴式石室形態の影響を受けることを示す好例といえよう。

大塔山横穴墓群はすべてA類の玄門・羨道構造をとる。しかし、羨道が長い天井を有する高広横穴墓群（A-1類）と比較すると羨道の長さは玄門の1/2以下であり、必然的に羨道の天井は無いに等しく、最高でも奥行20cmを測るのみである（A-2類）。また、A-2号横穴墓のように前庭奥壁に解消されてしまい、天井を持たない羨道（A-3類）も少なくない。米子平野においてはむしろA-1類



插図89 九州北西部の横穴墓

のような長い羨道はみられず、例外なくA-2類と3類で占められる。これらを高広横穴墓群に代表されるA-1類の簡略化したものとみなしえるであろうか。羨道時期をみると、少くともA-1類が2・3類より先行するという事実はみられず、むしろ大塚山横穴墓群は、A類の羨道構造をもつ横穴墓では最も古相を示す須恵器を出土している。転じて、山陰の横穴墓の源流たる九州の横穴墓をみるとA-1類こそみられないが、A-2・3類の類例は多いようである。福岡県行橋市竹並横穴墓群では、やはり6世紀後半に玄門前面の両側に土柱状の掘り残しをするようになり、山川郡大任町狐塚横穴墓群ではA-2・3類とともにみられる(竹並1979、狐塚1976)。これらは横穴式石室の玄門前面の石積(羨道あるいは前庭側壁と呼んでいる)を表象したものと考えられ、羨道の未発達な九州型の横穴式石室を模したるものといえよう。高広報告ではA-1類の玄門・羨道構造は、石棺式石室の影響のもとに山陰で成立したとされているが、丸天井系横穴墓受容以後も九州との継続的な交流の結果として玄門・羨道構造がもたらされ、石棺式石室の分布する、松江から安来地域では、その外観を模倣したと解釈するべきではなかろうか。石棺式石室との関連だけでは説明できない。四注式系玄室形態がすべて九州にみられることからみても、そう考えた方がスムーズであろう。

玄門 以下、やや細く検討すると、玄門の奥行は1.15~1.90mまであるが、A-2号横穴墓を除けば玄室の長さの1/2以上ある長いものであり、幅は羨道側に比べて、玄室側が広くなるのが普通である。横断面形は、方形のものはみられず、すべて釣鐘形を呈している。特にB-1号横穴墓は天井が尖り気味で後縁をもっており、玄門天井を尖頭アーチ形に加工する意図がみられる。また、C-1号の横断面形は釣鐘形を意識するものの、天井が低く、床面と壁面の区切が不明瞭で、不整な円形あるいは隅丸方形に近くなっている。こうした傾向は東宗像横穴墓群(東宗像1985)、陰田横穴墓群にもみられ、玄室の細部形態同様、新しい段階ほど、加工が粗雑になるものと思われる。

羨道 羨道は奥行28~90cmあり、玄門より幅広で、天井も高く床面は一段低くなっている。前述の如く天井の有無でA-2類と3類に分類される。これは正面觀にも現われ、2類は隅丸方形(B-1・2号

横穴	No.	玄門 幅 [cm]	側溝幅 [cm]	側溝高 [cm]	玄門 側溝 幅 [cm]	玄門 側溝 高 [cm]	側溝幅 [cm]	側溝高 [cm]	玄室平面形 状	玄室天井形態	床 底	床 面	考
A - 1 号横穴墓	(770)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	未完成横穴
A - 2 号横穴墓	888	424	55	116	釣鐘形	263	280	230	正方形	断面三角形容人	須恵器 展床	—	—
B - 1 号横穴墓	810	385	54	155	釣鐘形	204	184	165	長方形	断面三角形容人	須恵器 展床	—	—
B - 2 号横穴墓	928	436	90	160	釣鐘形	222	203	186	台形	断面三角形容平入	櫛床・板台	後背埴輪上に埴化・頃溝	—
B - 3 号横穴	(384)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	未完成横穴
C - 1 号横穴墓	870	375	48	190	釣鐘形	243	210	175	不整五角形	断面三角形容人	櫛床・木棺・棺台	—	—
C - 2 号横穴	(475)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	未完成横穴
C - 3 号横穴墓	502	120	28	125	釣鐘形	206	233	209	正方形	断面三角形容人 (狭口深型)	須恵器 展床	—	—
C - 4 号横穴墓	678	264	65	115	釣鐘或薄鐘形	207	220	153	正方形	断面三角形容人	須恵器 展床	後背埴輪上に頃溝	—
C - 5 号横穴墓	957	495	40	180	釣鐘形	220	220	—	不整六角形	断面二角形容平入	盒器・玄門・玄門大井舟落	—	—
C - 6 号横穴墓	1186	685	76	152	釣鐘形?	237	235	—	正方形	断面三角形容人	玄室・玄門大井舟落	—	—
C - 7 号横穴墓	1052	564	77	186	釣鐘形?	213	212	(190)	不整五方形	断面三角形容人	須恵器 展床	—	—
C - 8 号横穴墓	1073	618	60	190	釣鐘形	220	235	180	正方形	断面三角形容人	須恵器 展床	—	—
C - 9 号横穴	(506)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	未完成横穴

摺表2 大塔山横穴墓群遺構一覧表

横穴墓（）ないし台形（C - 8号横穴墓）、3類は釣鐘形（A - 2号横穴墓）を呈する。この他には前庭と羨道床面の段差をもつものが多い。

3. 前 庭

玄門・羨道前面の細長い空間を山陰地方では前庭（部）と呼びならわしている。呼称は地域によって様々であるが、山陰地方の横穴墓の源流たる九州においては墓道と呼び、前庭と区別するのが普通である。すなわち墓道とは玄室入口に通じるための単純な通路であり、横穴墓群の前面に墓道がいくつか集って広場状の空間を前庭と呼んで、横穴墓に対する何らかの祭祀的空间と考えられている。出雲～西伯者の横穴墓も導入初期の丸天井系の横穴墓には狭長で断面U字形を呈する「墓道」が接続しているが、以後は、平面的には谷側幅が広い長台形を呈し、横断面逆台形を呈するタイプが普及している。これは、当地域では墓道が集中する（前庭的）空間が発達せず、かわりに通路であると同時に祭祀の空間としての「前庭」が各横穴墓個別に付帯し、幅広の空間となって定着したものと考える。これを本来の墓道に前庭の機能が加わったものとして、大塔山横穴墓群にみられるようなタイプは前庭と呼ぶこととする。

4. 小 結

大塔山横穴墓群の構造は四注式系断面三角形の玄室・羨道（A - 2・3類）と幅広の前庭が接続するタイプであり、当地域の展開期の横穴墓の形態として最も普遍的なものである。その構造を改めて検討すると、山陰の横穴墓は墓制としての導入期のみならず展開期まで九州地方の継続的な影響を受けていることが窺えたが、一方、前庭の形態にみられるような九州ではあまりみられない要素も加えられており、「山陰的」な横穴墓として定着している。これは、山陰各地の普及型の横穴式石室にもいえることであり、家父長制家族の発達に伴う群集墳の一形態として、被葬者の機能的要請に応じて成立したものと考えられる。

（中原 齊）

註1. 但し、平入形態の展開する時期には陸田横穴墓群と大塔山横穴墓群では違いがある。土器編年で比較すると陸田Ⅲ・Ⅳ期は大塔山土器編年の中2・3期に対応し、平入形態の導入は大塔山横穴墓群が早いようである。

註2. 高広横穴墓群では、（前庭・羨道・玄門・玄室（擬圓四注式））のタイプに対し、（羨道・羨道・玄室（丸天井式））のタイプを分類している。分類の主旨は認めるとしても各部名称として機能的に全く同じ部分を玄門と羨道に呼びわけるのは用語の上での混乱を起しかねない。もともとこの部分は玄室への通路として構造的に必要不可欠なものである。したがって（二重構造の羨道）を羨道・玄門と呼ぶのであれば、単純構造のものも玄門と呼ぶべきであろう。

註3. 安来市域でも黒井田町黒鳥2号横穴墓は、米子平野の玄門・羨道と同形態のA - 2類であり、高広横穴墓群と黒鳥横穴墓群は2km足らずの近距離である（黒島1983）。

註4. 玄門前面に石積の入り構造を有する例は少くない。松江市十王免2号横穴墓や、安来市矢田I - 3号横穴墓等が著名であるが鳥取県日野郡江府町・日南町の山間部にも類例は多い。（十王免1968、内ノ倉山1986）

註5. 米子市、西伯郡の横穴式石室の様相を検討した角田徳幸氏は、盛行期の横穴式石室A類の祖型を九州に求めている（角田1985）。

第2節 後背墳丘・周溝を有する横穴墓について

B-2号 大塔山横穴墓群中では、墳丘・周溝を有する横穴墓としてB-2号・C-4号横穴墓の2基が確認されている。B-2号横穴墓の後背尾根上には調査前の地表観察でも僅かな墳丘状の高まりが確認されていたが、発掘調査の結果、推定長径6.0m、短径4.0mの半円形の墳丘と周囲を巡る周溝が検出された。

墳丘は旧地表を平坦に加工した後に盛土したもので、現存で45cmの盛土がみられる。周溝は棱線側をほぼ半円形に巡っているが、掘削は全体に粗雑で、北西側では掘りかたが不明瞭になっている。

墳丘には主体部の存在は認められなかった。(挿図31、図版10)

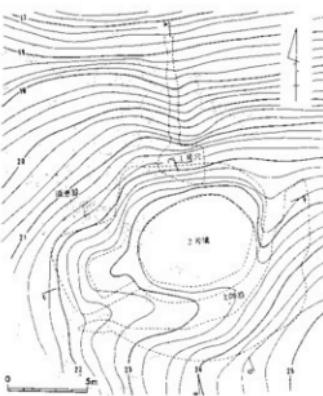
C-4号 C-4号横穴墓の後背尾根上には直径約6.0mの半円形の周溝が検出されている。周溝は立地状況からすると全周するものではなく、当初から半円形であったと考えられる。周溝に囲まれている部分は谷側へ15°傾斜しているが、僅かに盛土状の土層が確認されており、B-2号横穴墓同様、盛土墳丘を有していた可能性もある。周溝内外には埋葬施設は検出されていない。(挿図55・56、図版17)

竹並 墳丘をもたないことで、高塚古墳と区別されていた横穴墓にも後背尾根上に標識としての墳丘をもつものがあることが初めて確認されたのは、1974~76年に調査された福岡県行橋市竹並横穴墓群においてであった(竹並1979)。竹並横穴墓群は5世紀後半~8世紀前半代まで營造された総数948基に及ぶ大横穴墓群である。このうち墳丘を有する横穴墓は総数14基が調査され、竹並Ⅱ期(6世紀前半代)に出現し、Ⅲ期(6世紀後半)まで築造されている。Ⅱ期の横穴墓の玄室形態はⅠ期(初期横穴墓)の形態を引き継ぎながら大型化し、墳丘中央直下の玄室に至る長い墓道を設けている。墳丘規模は10m前後を測るが、Ⅲ期には墳丘はやや小規模化している。竹並と前後して、福岡県宗像市久戸古墳群で3基、山口県山口市朝田墳墓群で1基、墳丘を有する横穴墓が発見された(久戸1979、朝田1976)。これらの類例より、墳丘を有する横穴墓は、5世紀末~6世紀前半に北部九州で成立したものと考えられる。横穴墓自体は、横穴式石室や横口式石棺等の古墳埋葬施設の影響をうけて発生、展開したと考えられているが、墳丘を伴う横穴墓の存在は、横穴墓が墳丘を含めての高塚古墳を強く意識していることを改めて示したものである。また、横穴墓を父長層の台頭と支配構造の変質に伴って成立する後期群集墳の一形態として把握することの妥当性をも示唆しているといえよう。

陰田 山陰においては、1982年大塔山横穴墓群の西3kmに位置する陰田横穴墓群で墳丘あるいは、溝状構造を伴う横穴墓が9基発見された(陰田1984)。

斜面に面した尾根部をコの字状に掘り込み区画するもので、前面に径10m前後の馬蹄形状の小墳丘地形が造られるが、明らかに盛土墳丘を有するものと、周溝のみが掘削されるものの両方がみられる。尾根棱線上には、前方後円墳を含む6世紀初頭~中葉の古墳群が先行して形成されており、これらと周溝を共有し、重複するものもあった。また、小墳丘の裾に円筒埴輪を樹立するもの(S D 11・第7号横穴墓)もみられ、古墳祭祀に対する強い指向が窺われる。

陰田横穴墓群に東宗像横穴墓群(東宗像1985)や大塔山横穴墓群を加えて、墳丘を有する横穴墓の在り方を検討すると、溝状構造・墳丘は、すべての横穴墓に伴うのではないことが理解される。横穴墓群を形成する小支群単位でみた場合、墳丘を有する横穴墓を含む小支群と含まない小支群があり、小支群間の差



挿図90 松江市中竹矢2号墳・1号横穴墓実測図
(註5文献より)

異が現われている。また、小支群中の横穴墓単位でみても、埴丘を有する横穴墓と有さない横穴墓がある。

支群中で詳しく検討すると、陰田横穴墓群では、2~3基を単位とする小支群中で、最古期に築造された横穴墓に溝状構造・埴丘が伴うとされている。一方大塙山横穴墓群では、須恵器よりみてB小支群、C-II小支群中の埴丘を有さない横穴墓との間に時間差はみとめられないが、構造の規模、副葬品、立地において、埴丘・周溝を有さない横穴墓より優位にあり、小支群の核となる横穴墓が埴丘・周溝を伴っている傾向が窺われる。これらの差異は、营造主体である被葬者の性格の違いと考えられるが、その差異がいかなるものであるかは明確でない。

前方後円 以上のように、横穴墓に伴う埴丘は径10m以下の小埴丘にほぼ限られるもので、等質的な群集墳の

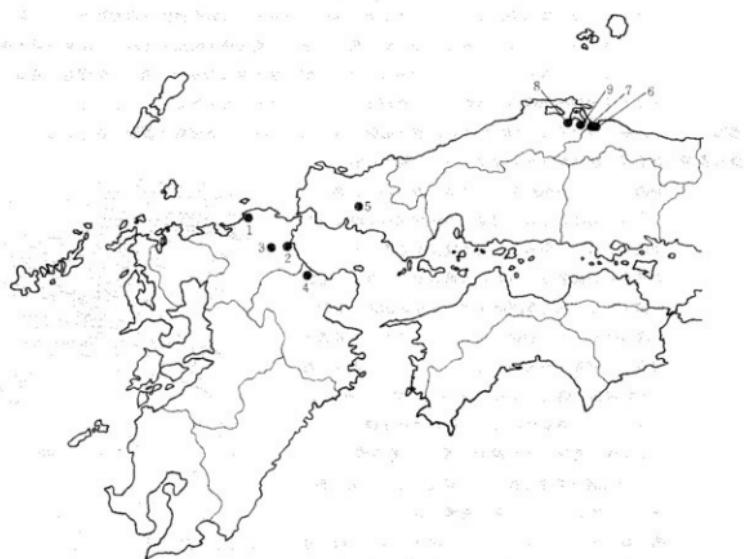
(方)墳の形態と考えられるのであるが、島根県松江市で調査された中竹矢2号墳は全長14mと小規模ながら前方後方墳であり、埴丘直下の中竹矢1号横穴墓が主体部と考えられている(中竹矢1983)。横穴墓

が小規模ながらも前方後方(円)墳の主体部となり得ることは被葬者の性格について大いに注目され

よう。現段階では良好な調査例が少ないこともあり、断定は差し控えたいが、墳形に現われる古墳被

葬者内部の階層性も、主体部までは規制しない例があることとなる。

分布 墓丘をもつ横穴墓の分布をみると、管見の及ぶ限りでは、横穴墓の分布の濃密な九州と山陰、そして、ついで、周防にしか認められず、九州でも北部九州にのみに限定されて、肥後地方等にはみられない。さらに、玄海灘に面した宗像市久戸古墳群を除けば、九州北西部の豊前地方に集中し、周防灘を隔てて朝田横穴墓群とは指呼の間である。大塙山横穴墓群を始めとする山陵の埴丘をもつ横穴墓は、山陰では古い段階のものに限られているが、6世紀前葉~中葉まで遡るものはない。現段階では6世紀前半頃に豊前あるいは周防を含めた北西九州地方で成立した埴丘を有する横穴墓が伝播してきたものと考えられる。当地域は横穴式石室・横穴墓の形態に、九州の要素が強い地域であり、埴丘を有する横穴



挿図91 墓丘・周溝を有する横穴墓分布図

墓の存在も、九州と山陰の地域間交流を示す一例といえよう。

山陰に限らず墳丘を有する横穴墓の存在が確認されたのは、ごく近年のことであり、それは横穴墓調査の視点の変化によるところが多い。最近では、安来市周辺において縮密な横穴墓の分布調査が行われており、開口する横穴墓の後背尾根上に明瞭な墳丘が存在する例がいくつか見直されてきている。

本節では、墳丘の形態や構造、墳丘のもの意味については言及できなかったが、今後も類例は増加するものと考えられ、機会を改めて再論じたいと思う。

(中原一齊・西浦日出夫)

註1. 朝田墳墓群では、朝田I-1号横穴墓発見の後、IV区で2基、V区で10基の墳丘横穴墓が調査された。これによると墓道は6世紀前半の車次郡の横穴墓からはじまり、6世紀後半まで続いており、堅穴式横口式石室(朝田I-2号墳)と共に北部九州から伝わったものと考えられている(朝田1979、1982)。

註2. 最近、大分県中津市で、5世紀末~6世紀初頭に遡る墳丘を有する横穴墓が調査されている(上ノ原1982~1986)。

註3. 福岡県山川郡大任町孤塚古墳群・横穴墓群の調査では、尾根上の孤塚1号墳(前方後円墳、24m)の主部が墳丘上で確認されず、平地式の横穴墓が主部と推定されている(孤塚1976)。

註4. 横穴墓同様、初期横穴式石室の影響を受けて成立したと考えられる。南九州の地下式横穴も本来は墳丘を有したものであることが知られている。

註5. (中竹矢1983)では、安来市轟谷古墳群、伯太町井戸古墳群等も主部が横穴墓の可能性があるとしている。この他にも安来市佐々布久神社裏横穴墓群(表表3-9)をはじめ、数群が墳丘を有する横穴墓を考えられ、前方後円墳も含まれるようであるが、詳細は不明である。この地域の類例は、西尾克己、大谷晃二氏の教示によるところが大きい。

No.	通 路 名	基盤	墳丘・周溝		墓道・前庭	後道・玄門	玄室・形態	通 物	墓道時期	備 考	
			形・状	現 様							
1	久 戸 古 墓 群	3	円 形	3 m	毫 通	B	丸 天 井 系	鍵洞、耳環、石切、丸玉、須忠沿、土師器	6C 中葉		
2	竹 箕 逸 路	14	円 形	6.0~9.8m 0.5~1.5m	毫 通	B	切妻系整正家形 前面(舟形墓入) 丸天井系アーチ	鍵洞、耳環、石切、丸玉、須忠沿、土師器	6C 前半 ~後半		
3	孤 塚 古 墓 群	1	前方後円	24m	有 石 墓 道	A	丸 天 井	鍵洞、耳環、石切、丸玉、須忠沿、土師器	6C 後半		
4	上ノ原横穴墓群	—	方 形	4 m	有 石 墓 道	A	丸 天 井	鍵洞、耳環、石切、丸玉、須忠沿、土師器	5~6C 未 明	本報告書未刊 記載[1]より 23号横穴墓	
5	朝 田 墳 墓 群	6	円 形	5.4~11.4m 0.5~1.5m	毫 通	A	丸 天 井	鍵洞、耳環、石切、石切、耳環、石切、丸玉、須忠沿、土師器	6C 前半 ~後半		
6	大塔山横穴墓群	2	円 形	約6 m	0.45m	前 庭	B	断面三角形 平入 丸 天 井	鍵洞、耳環、須忠沿	6C 後半	
7	勝 田 横 穴 墓 群	8	コの字状 の周溝	10m 幅1 m	不明	墓道・ 前庭	A・B	断面三角形 平入 丸 天 井	鍵洞、耳環、玉類、馬具、須忠沿、土師器	6C 後半 ~7C 前半	
8	中竹矢2号墳 中竹矢背横穴墓	1	前 方 後 方	14m	1.1m	毫 通		丸 天 井	鍵洞、玉類、馬具、須忠沿	6C 後半	圓溝内から 土壁
9	假称: 佐々布久神社裏 横穴墓群	7	—	—	—	墓道?	—	丸 天 井?	—	前方後円墳 を含む。	

摺表3 墳丘を有する横穴墓一覧表

第3節 横穴墓の築造工程

大塔山横穴墓群の中には、出土遺物が全く検出されず、また、調整加工も施されずに放棄された未完成横穴が4基確認されている。これら未完成横穴を加工状況の観点から観察すると、各々掘穿段階が異なっていることに気づく。

A-1号横穴は、やや緩やかな丘陵斜面を前庭部奥・側壁を意識しながら段状に荒く加工し、更に奥壁側の床面を一段深く掘り込み、羨道部及び玄門部の掘穿へと移行しているが、その段階で岩盤に当たり途中放棄している。

B-3号横穴は、丘陵斜面を段状に浅く、荒く加工し、前庭状の加工面を整形している。床面は傾斜をもっており、調整加工は施されない。

C-2号横穴は、急峻な丘陵斜面を前庭奥・側壁を意識しながら段状に荒く加工し、更に床面を一段深く掘り込み、羨道及び玄門の掘穿へと移行しているが、その段階で岩盤へ当たり途中放棄している。

C-9号横穴は、やや緩やかな斜面を段状に浅く、荒く加工し、床面は2段となる。羨道への掘穿を僅かに行った段階で岩盤に当たり途中放棄している。

これら未完成横穴の途中放棄の状況の差は、横穴墓掘穿段階の差であると考えられる。横穴墓の掘穿工程については、杉谷愛象氏が陰田横穴墓群中の未完成横穴について考察され、①前庭部の素掘り→②前庭部底面の加工調整→③羨道面表面の加工調整→④羨道部分の掘り込み→⑤玄室の掘削→⑥玄室部の加工調整→⑦羨門閉塞部分の削り出し、という過程を想定されている（陰田61号墳1985）が、大塔山横穴墓群中、最も掘穿段階が進んでいるA-1号横穴、C-2号横穴では、前庭部を完全に仕上げるまでに羨道・玄門部への掘穿にとりかかっており、②→③→④という過程は考え難く、前庭部底面の加工調整はかなり後の段階に行われたと考えられる。大塔山横穴墓群中の横穴墓掘穿過程を想定すると、以上のとおりⅠ工程、前庭部の一次加工→Ⅱ工程、羨道部・玄門部の一次加工という工程が考えられる。ところで、横穴掘穿工程が競る未完成横穴は、大塔山横穴墓群の4例の他に山陰各地で確認されている。管見に触れる限りでは、鳥取県内では、米子市・陰田横穴墓群中に4基（陰田 1984）、米子市・東宗像横穴墓群中に1基（東宗像 1985）、島根県内では、松江市・十王免横穴墓群中に3基（十王免 1968）、松江市・安部谷横穴墓群中に1基（安部谷 1968）、出雲市・上塙治横穴墓群中第22支群中に1基（上塙治 1980）、大田市・松田谷横穴墓群中に1基（松田谷 1982）の計11例が知られている。これらのうち、東宗像西7号横穴墓、上塙治第22支群1号横穴墓、安部谷5号横穴墓の加工状況をみると、いずれも、前庭部奥・側壁及び床面は二次加工が施されているが、羨道部及び玄門部は掘穿時の荒い一次加工に止められ、玄室部は天井が整形されず、しかも二次加工もみられない状況である。

大塔山横穴墓群で横穴墓の掘穿段階をⅠ→Ⅱと想定したが、それ以降の工程をあえて想定するならば、東宗像西7号横穴墓にみられるようにⅢ工程、玄室部の一次加工及び前庭部床面、羨道、玄門部の二次加工、という工程が考えられる。

横穴墓掘穿に使用された工具を想定する場合には、工具痕を観察する必要がある。大塔山横穴墓群中の横穴・横穴墓の加工痕を観察すると、幅10cm前後のものと、3・4cm前後のものの2種類が確認されている。前者はA-1号横穴にみられ、鋸なし鍬状の工具が想定される。後者は、完成した横穴墓の玄室内でみられ、ノミ状の工具が想定される。これら工具は横穴墓掘穿において使い分けられたものと考えられ、鋸なし鍬状工具は一次加工に、ノミ状工具は二次加工にそれぞれ使用されたものと思われる。

大塔山横穴墓群の掘穿工程を考えてきたが、Ⅰ工程に相当するものはB-3号横穴、C-9号横穴、

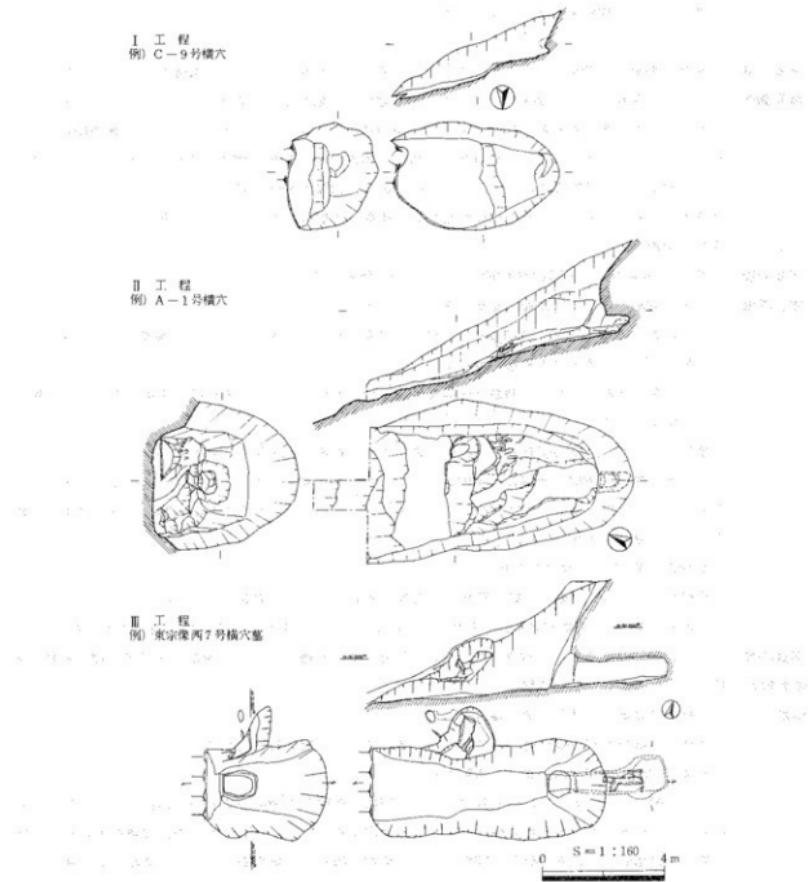
II工程に相当するものはA-1号横穴、C-2号横穴であるが、A-1号横穴は羨道部が明確に削り込まれておらず、C-2号横穴より若干進行しているものと考えられる。

以上述べてきたように、大塔山横穴墓群の場合、前庭部の仕上げ以前に羨道・玄門部への掘穿に着手している形跡があり、このことは、基盤の地質状況に築造の可否が左右される横穴墓の性格を如実に反映した結果と推定される。すなわち、基盤の状態を見極めつつ横穴墓掘穿作業を行っていたのではないかだろうか。

(近藤 哲雄)

註1. 一次加工は後述する鋸なし鍛状工具によるとと思われる荒削りを示し、二次加工はノミ状工具によるとと思われる丁寧な加工を示す。

註2. 横口達也氏は、横穴掘削工具について考察し、32mm~52mmの刃先をもつ工具、円弧を描く刃先をもつ工具の二者を指摘し、前者は手斧形鉄斧、後者はU字歫であるとする(福塚Ⅱ 1978)。



挿図92 横穴墓築造工程

第4節 土 器

大塔山横穴墓群において、横穴墓にともなって出土した土器の考察にあたっては、(1)西伯者地方では、当該時期の須恵器窯址の調査事例がないこと、(2)大塔山横穴墓群が、陰田遺跡(陰田1984)、東宗像遺跡(東宗像1985)の各横穴墓と時期的にある程度並行することがあらかじめ想定されること、(3)これら三遺跡が、直線距離にしてわずか3km足らずの間に飛び石状に立地すること、を念頭においた。その上で、三遺跡とも通時に絶対量の豊富な蓋杯を総体的に捉え、大抵の場合、各横穴墓ごとに追葬行為によってある程度時期幅が窺われる資料群に、型式的な分析、細分を加えることによって、三遺跡に通有な、編年ための客観的なメルクマールを設定することを試みた。

なお、この際、大塔山横穴墓群の蓋杯には、いわゆる「杯身、杯蓋の逆転」後のものを含まないことから、陰田、東宗像両遺跡の横穴墓群についても、「逆転」後の蓋杯のみを出土土器の中に含む横穴墓およびその資料を対象から除いてある。

杯身の器形指指数化 杯身の器形は、個体差のばらつきが大きい。そこで、杯身の立ち上がり端部径(以下、口徑)、立ち上がり基部径(以下、基部径)、立ち上がり基部から端部までの高さ(以下、立ち上がり高)を取りあげ、この三者の合計値が20になるように指指数化(平均化)した。本来は、この三者の指指数を三角形グラフで示すべきなのだが、口徑指指数と基部径指指数の間の推移に顕著な変化を認めにくい少なくとも、対象とした時期幅では、立ち上がり部の傾きに顕著な画期を見出しえないので、立ち上がり高指指数のみを取りあげ、これを時間的型式差の画期を客観的におさえるための物差しとした(図A、図Bの横軸)。

杯身の調整と画期 次に、杯身の底部外周調整を観察し、以下の四段階を認めた。

I類：回転ヘラケズリ調整が全面に及んでいるもの

II-a類：回転ヘラケズリ調整が中心付近まで及ばず、その後、ヘラケズリ調整のされた部分の一部も含めて、若干のナデ整形を加えたもの

II-b類：回転ヘラケズリ調整は底部最外周までしか行なわれず、その後、全面に若干のナデ整形を加えたもの

III類：ヘラおこし後未調整か、その後、若干のナデ整形で凹凸をならしたもの

この四段階が、調整の簡略化の方向を示すことはすでに指摘されたところである(陰田1984)が、図Aにおとした横穴墓ごとの各類のドット分布から、それが、立ち上がり高指指数の大→小の流れと整合して、三遺跡とも次の三段階を画することがわかる。

①指指数1.0以上：I類のみ分布

②指指数0.6～0.9：I類、II類、III類が、指指数の高低にかかわらず混在して分布

③指指数0.5以下：I類が消失し、II類(II-a類はほとんど認められない)、III類のみ分布

杯蓋の部位形態と画期 さらに、杯身とのセット関係が認められる杯蓋の部位形態のうち、口縁部と天井部の境の形態に着目して、以下の三形態に分類した。

I類：口縁部と天井部の境に接をもつもの

II類：口縁部と天井部の境を1条ないし2条の沈(凹)線で画するもの

III類：口縁部と天井部の境が不明瞭なもの

この三類についても、I類からIII類へという形態の簡略化の方向が早くから指摘されており(山本1960)、それが、セットとなる杯身の立ち上がり高指指数の大→小の流れとどの程度整合するかを、横穴墓ごとに検討した。その結果、図Bのドット分布と補記した参考資料から、三遺跡とも共通して次の三段階が認められる。

- ①指數1.0以上：Ⅰ類とⅡ類が分布する。
- ②指數0.6～0.9：Ⅰ類、Ⅱ類に加えてⅢ類があらわれて混在し、各類とも指數の高低にかかわらず分布する。
- ③指數0.5以下：Ⅰ類、Ⅱ類が無くなり、Ⅲ類のみ分布する。
- 杯身の底部外面調整の三段階とずれなく整合していることがわかる。

高さと高さの 比(%)	0.5	1.0
時 期		
A-2号 横穴墓	●	●
B-2号 横穴墓	●	●
C-1号 横穴墓	●	●
C-3号 横穴墓	●	●
C-4号 横穴墓	●	●
C-6号 横穴墓	●	●
C-7号 横穴墓	○	●
C-8号 横穴墓	●	●

(1) 大塔山

高さと高さの 比(%)	0.5	1.0
時 期		
第1号横穴	●	●
第4号横穴	○	●
第6号横穴	●	●
第7号横穴	●	●
第9号横穴	●	●
第11号横穴	●	●
第12号横穴	○	●
第13号横穴	●	●
第14号横穴	○	●
第15号横穴	●	●
第16号横穴	○	●
第17号横穴	●	●
第19号横穴	●	●
第20号横穴	●	●
第21号横穴	●	●
第22号横穴	●	●
第23号横穴	●	●
第24号横穴	●	●
第25号横穴	●	●
第27号横穴	●	●
第28号横穴	●	●
第32号横穴	○	●
第33号横穴	●	●
第8号横穴(少横穴)	●	●

(3) 隆田

高さと高さの 比(%)	0.5	1.0
時 期		
西1号横穴	○	●
西2号横穴	●	●
西4号横穴	●	●
西5号横穴	○	●
西7号横穴	●	●

(2) 東宗像

凡 例

- Ⅰ類
- Ⅱ-a類
- Ⅱ-b類
- Ⅲ類
- 不明

図A 杯身の立ち上がり高指数と底部調整の関係

すなわち、杯身の立ち上がり高の相対的な縮小化を物差しにすれば、蓋杯の形態、調整の変化に窺われる大きな傾向を同時に捉えることができるわけである。

時期設定 以上の分析から、杯身の外面調整及び蓋杯の外表面形態における①、②、③段階が、時期差であることは明らかである。故に、古相段階より順に、

大塔山1期：指數1.0以上

2期：指數0.6～0.9

3期：指數0.5以下

経年(20)	0.5	1.0	
時 期			
A-2号 横六基	●	●	杯蓋(9点)は、 1期、目録
B-2号 横六基	●	●	杯蓋(8点)は、 1期、目録
C-1号 横六基	●	●	
C-3号 横六基	●	●	
C-4号 横六基	●	●	杯蓋(2点)は、 2期
C-6号 横六基	●	●	
C-7号 横六基	●	●	
C-8号 横六基	●	●	

(1) 大塔山

経年(20)	0.5	1.0	
時 期			
第1号横穴	●	●	杯蓋(7点)は、 すべて目録
第4号横穴	●	●	杯蓋(5点)は、 すべて目録
第6号横穴	●	●	
第7号横穴	●	●	
第9号横穴	●	●	
第11号横穴	●	●	杯蓋(3点)は、 すべて目録
第12号横穴	●	●	杯蓋(14点)は、 すべて目録
第13号横穴	●	●	
第14号横穴	●	●	
第15号横穴	●	●	
第16号横穴	●	●	
第17号横穴	●	●	
第20号横穴	●	●	
第21号横穴	●	●	
第22号横穴	●	●	
第23号横穴	●	●	杯蓋(3点)は、 すべて目録
第24号横穴	●	●	
第25号横穴	●	●	
第28号横穴	●	●	
第32号横穴	●	●	杯蓋(4点)は、 すべて目録
第33号横穴	●	●	
第8号横穴(小標)	●	●	杯蓋(3点)は、 すべて目録

(2) 東宗像

凡て
■ 1期
□ 2期
● 3期
→ → 杯身のばらつきの範囲を示す

図B 杯身の立ち上がり高指數と杯蓋部位形態の関係

(3) 隆田

と假称しておきたい。ただし、陰田遺跡には、立ち上がり高指指数が0.2を示す杯身がある。小型化が究極まで進み、立ち上がり部が受部高とほぼ同じか、受部高より低く埋没してしまう杯身である。体部以下の外面調整の違い（末調整か、回転ヘラケズリか）を見過ごすと、器形は「逆転」後の杯蓋とはほとんど変わらない、形態的に明らかに大塩山3期のものと一線を画するので、この一群をさらに新相のものとして区分する必要がある。陰田遺跡の編年案では、「陰田—8」に相当しよう。

編 年

蓋杯の器形、部位形態、調整の変化をメルクマールとし、それによって窺われる大塩山横穴墓群各横穴墓の营造、継続時期（図A、Bのドットのバラつき）を参考に、各横穴墓出土の他の器種を専ら型式学的な組列に従って配列したのが、付図3である。以下、従来のいくつかの編年案との並行関係にも留意しながら、時期を追って若干の説明を加えておく。

大塩山1期 高杯Aは、口縁部と杯部の境が明瞭で、脚部の三方向に三角形透かしをもつもの（B—2号横穴墓・57）である。翫は、頭部が太く口縁部があまり開かない（B—1号横穴墓・32）。提瓶には大小二種類があり、いずれも肩に一对のしっかりした把手をもち、体部外面にカギ目を巡らせてある（B—1号横穴墓・34、C—3号横穴墓・80）。また、翫はすべて、屍床として敷かれていたか、前庭埋土に流れ込んでいたものである。大、中、小の三種類ある。屍床となっていたものは、主に初葬時に敷かれたと考えるのが自然なので、1期に比定した。口縁部は外反して端部に有段の口縁帯を形成する他、胴部最大径は上位三分の一程度のところにある（A—2号横穴墓・27、C—4号横穴墓・100、C—8号横穴墓・163）。

山本清氏による編年（山本1960）（以下、山本編年）で『第Ⅲ期』の古相、安来市高広遺跡の編年案（高広1984）（以下、高広編年）で『I A期』、陰田遺跡の編年案（以下、陰田編年）で『陰田—4』に並行すると考えられる。ただし、蓋杯以外の器種は、高広編年『I A期』陰田編年『陰田—4』の表微的器種に比べてやや新しい様相を窺わせることに留意する必要がある。

大塩山2期 高杯Aは、口縁部と杯部の境がややあいまいになり、脚部の三角形透かしも二方向となる（B—1号横穴墓・30、C—4号横穴墓・93）。翫は、頭部が細くくびれて口縁部に向けて大きく開く他、体部の張りが弱くなる（A—2号横穴墓・23、B—2号横穴墓・60）。平瓶にも大小二種類あり、大塩山横穴墓群ではこの時期を上限としておく（A—2号横穴墓・25）。逆に、提瓶はこの時期が下限である。肩に一对の円形浮文をもち、体部は回転ナザ調整に終わらせる（C—7号横穴墓・150）。翫は、口縁部が外傾し、端部の口縁帯もあいまいになる他、胴部最大径は中位に下がる（C—4号横穴墓・101）。この變は、屍床の一部を構成していたことから、追葬時に敷き直されたものと考えられる。

山本編年で『第Ⅲ期』の新相、高広編年で『II B期』、陰田編年で『陰田—5、6』にはほぼ並行しよう。

大塩山3期 高杯Aは、口縁部と杯身の境があいまいになり、無文化する（C—8号横穴墓・157）。高杯Bは、2期に長期に長脚二段透かし（上段は切り込み）で沈線文や列点文を施してあったもの（B—1号横穴墓・31）が、3期になると短脚で切り込みをもつだけになる（C—1号横穴墓・70）。翫も、頭部、体部の四線文以外無文化する（C—8号横穴墓・160）。平瓶は、大型のもの（C—1号横穴墓・72）が小型のもの（C—1号横穴墓・71）より形態的にやや後出すると思われるが、それが時期を画するほどの差か否かは詳かでない。

山本編年で『第Ⅳ期』の最も古相、高広編年で『II A期』の古相、陰田編年で『陰田—7』にはほぼ並行するものと考える。

今回の考察では、大塩山横穴墓群の相対的な時期決定に目的を絞ったため、上述した蓋杯の分析か

ら窺われる他の問題（例えば、工人差、工人集団差など）には敢えて触れなかった。さらに資料の蓄積、分析を重ねて他日に期したいと思う。

（松井　潔）

註 大塚山横穴墓群からは、横穴墓にともなって総数167点の須恵器、土師器が出土している。このうち、須恵器が165点、杯身は68点（40.7%）、杯蓋は43点（25.7%）を占める。

第5節 鉄釘より復元される木棺について

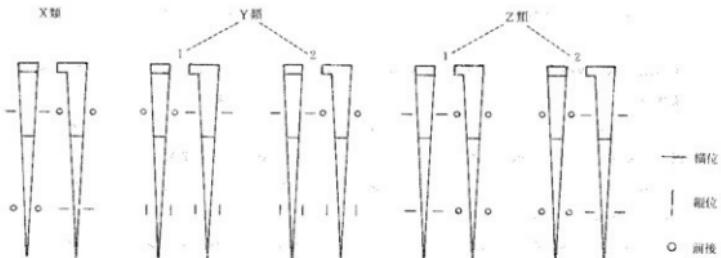
C-1号横穴墓からは、玄室右側より木棺が安置されたことを裏づける痕跡及び鉄釘が検出された。このうち鉄釘が出土した状況をみると、木棺内に散かれたと考えられる小角礫の範囲、特に両小口付近に集中してみられたが、一部散在するものもあり、また、約60cm離れた破片同士が接合したことなどから考えて、鉄釘は原位置を保つものではなく、二次的に移動されたものと考えられる。安置された木棺の規模等は不明であるが、鉄釘に付着した木質を観察すると、この木棺がヒノキ製の組合式木棺であることが確認できた。ここでは、出土した鉄釘の分析を通して、木棺について可能な限りの復元を試みることとする。

C-1号横穴墓から出土した鉄釘は、完存に近いもの17本（うち1本は木質が付着していない）、破片11個である。完存するものに限ってみると、長さは7.8~11.8cmを測り、断面は0.4~0.6cm×0.3~0.5cmすべて長方形を呈す。

このうち長さだけについてみると、11cm前後のもの（a類）、10cm前後のもの（b類）、9cm前後のもの（c類）、8cm前後のもの（d類）に分けることができ、それぞれ、4本、4本、5本、4本である。

頭部の形態は、サビのため不明なもの1本を除き、頭部が遺るものはすべて「L」字形に折り曲げたもの（以下「L」頭）で、田中杉太氏の分類によるA類、おそらく単純に折れ曲がるA類に相当するものと考えられる（田中1978）。このうち、「O」字形、「U」字形を呈するものもあるが、「L」頭の変形として大差ないものと思われる。

木質付着 次に、鉄釘の木質付着状況を観察すると、上・下部とともに横位方向の木目が付着するが、各々の状況が直交しているためその境が明瞭に識別できるもの（X類）、上部に横位方向の木目、下部に縦位方向の木目が付着するもの（Y類）、上・下部ともに横位方向の木目が付着するもので、同一方向の木目であるため両者の境の識別が困難なもの（Z類）の3類に分類することができ、それぞれ2本、12本、2本である。木棺棺材厚は、鉄釘上部の木質付着状況より3.5~4.8cmである。また、上部と下



木質付着状況による鉄釘の分類

部に隙間があるものも確認された。このことから、鉄釘を付着する木質の種類が判明した。

以上、鉄釘の法量及び木質の付着状況から考えられる木棺は、各接合部に刺り込みがなかったものと考えるならば、木棺棺材には厚さの異なる木材が使用されたものか、製材加工の際の技術的な問題で不均等な棺材を使用せざるを得なかつたものが考えられる。その棺材の接合部には、長さによって使い分けられたX類・Y類・Z類の木質が付着する鉄釘が打ち込まれたと考えることができる。更にX類・Y類・Z類の使用部位を想定するためには、更に細かい検討が必要となる。

つまり、これ以上に木棺を復元するためには、木棺棺材のそれぞれの木目方向と、木棺材の組み合わせを想定し、鉄釘の木質付着状況を考え合わせる必要がある。木棺が一枚板の蓋板、長側板、小口板、底板から構成されるならば、小口板を除いて縱に長い木目の木材が使用されたものと想定できるが、小口板に関しては横位方向、縱位方向の木目の2通りが考えられよう。また、木棺の組み合わせには、①長側板と小口板、②底板と長側板、③底板と小口板、④蓋板と側板、⑤蓋板と小口板の5種類の組み合わせが想定されるが、それぞれどういう接合をするのかはわずかな例を除き不明である。しかし、鉄釘が使用された組合式木棺の棺材の組み合わせは、少なくとも、①の組み合わせに関しては、長側板で小口板をはさむもののみと考えられており(田中1978)、この部位の棺材の組み合わせには、小口板に横位または縱位方向の2通りの木目の棺材が使用された場合を想定しなければならない。このことから、横位方向の木目の小口板を使用した場合には、Y類の木質が付着する鉄釘が、縱位方向の木目の小口板を使用した場合には、X類の木質が付着する鉄釘が打ち込まれたものとなる。横穴式石室及び横穴墓に組合式木棺が安置されるためには、鉄釘の使用が木棺材の外側へ倒れることを未然に防ぐために最も効果的であり、小口板と長側板の接合に最も多くの鉄釘が使用されたと考えると、Y類の木質が付着する鉄釘が使用された可能性が高い。この場合、長側板の幅は約3.5~4.8cmとなる。

以上をまとめると、C-1号横穴墓に安置された木棺は、縱に長い木目の長側板で、横位方向の木目の小口板をはさみ、「L」頭の鉄釘を打ち込んだものと思われるが、推測の域を脱しない。

山陰地方においては、横穴式石室及び横穴墓の内部施設に木棺が安置されたと考えられる例は極く稀で、鉄釘が出土した例をあわせても管見に触れる限り10例にすぎない。このうち、横穴式石室内に木棺が安置されたと考えられる例は、桜江町・長尾古墳(長尾1981)のみで、その他はすべて横穴墓である。横穴墓の内部施設には木棺の他、石棺、削り出し屍床、須恵器屍床、礫床、木板屍床などがあるが、これら内部施設の差が何を具象化したものかは、木棺の出土例の増加と詳細な木棺復元の操作の確立とともに、今後の課題として残しておく。

(近藤哲雄)

註1. 奥村清一郎氏は鉄釘に付着した木質を検討し、同様に3類に分類しており、それぞれの使用部位を想定されている。本文に即して言えばX類は小口板と底板あるいは、小口板と蓋板との、Y類は側板と小口板との、Z類は側板と底板あるいは側板と蓋板との接合に用いられたとする。(湯舟坂1983)

また、頭部方向に規則性が認められる場合には、Y類、Z類は更に2類ずつに分類でき、計5類の木質付着状況が異なる鉄釘が存在することとなる。

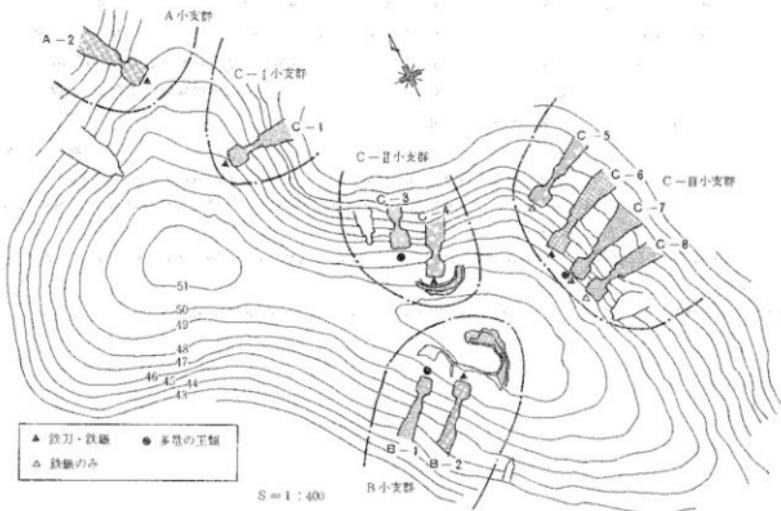
註2. 更により詳細な復元を試みるためには、他の部位の組み合わせ、木目方向、鉄釘の長さの問題を解決しなければならない。

第6節 小支群構成と被葬者の性格

小支群の設定 大塔山横穴墓群は10基以上の横穴墓からなる横穴墓群であるが、群には斜面ごとの立地と横穴墓の位置関係により、A・B・C-I・C-II・C-IIIの5小支群を設定した。このうち、A小支群、C-I小支群は調査区の北端に位置し、調査区外に小支群を構成する横穴墓が続くことが予想され、その実態は明らかではない。これに対してB小支群、C-II小支群は南側の調査区境界付近まで調査を行なったが、遺構の広がりはみとめられず、完結する1小支群として扱った。調査区中央に位置するC-II小支群も同様であり、これら3小支群は完結する小支群と考えられ、各小支群を構成する横穴墓数は2基ないし4基を数える。米子市東宗像横穴墓群・陰田横穴墓群・安来市高広横穴墓群にみられる小支群も2~4基前後で構成されており(東宗像1985、陰田1984、高広1984)、1小支群は2~4基の横穴墓で構成されるようである。本節では、まず被葬者集団の最小単位と考えられる1横穴墓の被葬者について出土人骨から検討し、それらが小支群を構成する意味について考えてみたい。

1. 人骨よりみた被葬者

横穴墓は木棺直葬等の埋葬施設と比べて人骨の遺存する可能性は高く、横穴式石室のように盗掘を受けることも少ないとから最小埋葬単位の被葬者の性別、年令構成を把握することができる。しかしながら、小動物の侵入や湧水、追葬行為その他に伴う片付けを常に考慮しなければならず、被葬者像に直接迫ることのできる良好な資料は存外少ないようである(挿表4)。幸い大塔山横穴墓群ではA-2・C-1・C-8号横穴墓の3基で遺存状態の良好な人骨を検出した。人骨鑑定の詳細は『付論』にまとめられているが、これによると成人は必ず2体以上で、多いものでは6体の埋葬が確認されており、单体埋葬の例はみられないようである。また、乳・小児の埋葬もみられ、C-8号横穴墓の6・7号人骨のように、遺伝的形質から血縁関係を推定されるものも含まれている。これらより、個々の横穴墓の被葬者は血縁の紐帯に結ばれた家族と考えられ、従来よりいわれている家族墓的な様



挿図93 大塔山横穴墓群における小支群

家族構成 相をもつことは明らかである。さらに、家族の構成を検討するならば、C-1号横穴墓の2号人骨（壮年男性）と1号人骨（熟年女性）のような男女が対になった埋葬例は比較的多く、米子市高畠横穴墓、安来市高広A-3号横穴墓にてもみられ、これを大歸とするならば、単婚小家族が被葬者の最小単位であったと推定される。但し、A-2号横穴墓では成人男性3体、女性1体、C-8号横穴墓では成人男性2体、女性4体の成人埋葬が認められ、夫婦を基調とする家族を想定するにしてもそれに血縁につながる人々を若干含んだ家族団が考えられる。

被葬者数 横穴墓単位の被葬者数は大

塔山横穴墓群では2~7体と幅がある。そのうち、C-1号横穴墓のみは营造時期が異なるため除外すると1号横穴墓に平均6体前後の埋葬が行なわれている。これによると、先に想定した2~4基よりもなる小支群では12~24体の埋葬が想定できる。これが、従来、「家父長制の世帯共同体」(佐田1979)と呼ばれているものに相当すると考えられる。

2、小支群の構成

次に、各小支群ごとに、(1)構造の特徴、(2)内部施設、(3)出土遺物、(4)营造時期について検討する。

○A小支群 (A-2号横穴墓) : 構成基數1基+ α

- (1) A-2号横穴墓は大塔山横穴墓群中最大規模の玄室をもち、全体の加工も整美である。
- (2) 玄室内右側に須恵器屍床をもつ。
- (3) 鉄刀1、鉄鏡18、刀子3、須恵器多数を出土。
- (4) 大治山1・2期

○B小支群 (B-1・2号横穴墓) : 構成基數2基+ α

- (1) B-1・2号横穴墓は、全体的に類似性が強くみとめられる一方、妻入(B-1)、平入(B-2)、後部の構造に差異が認められる。B-2号横穴墓は後背埴丘をもつ。
- (2) B-1号は須恵器屍床。B-2号は櫛床、棺台をもつ。
- (3) B-1号は、玉類を多く出土する一方、B-2号は鉄刀大1、小1、鉄鏡8をもつが、玉類は全くみられない。両方とも耳環1対を有する。
- (4) 大治山1・2期に2基が併行する。

○C-1小支群 (C-1号横穴墓) : 構成基數1基+ α

- (1) C-1号横穴墓は大塔山横穴墓群中最も新しい段階のもので、全体の加工もやや粗雑である。
- (2) 玄室内右側に櫛床と木棺、左側に棺台をもつ。

横穴墓名	埋葬数	性別・年令	備考	時期
米子市大塔山A-2号	7	壮年男性1 壮年女性2 少年1、乳児1 新生児1	再埋葬、龜骨	I・II
米子市大塔山C-1号	2	壮年男性1、熟年女性1		III
米子市大塔山C-8号	7	壮年男性2、壮年女性3 青年-壮年女性1 少年1	青年-壮年女性1 少年1に萌頭結合 がみられる。 一部再埋葬	I・II
米子市東寧像西-2号	7	壮年男性1、壮年男性1 壮年女性1、壮年女性1、壮年女性1、少年1 其他2体	東寧音	III・IV
米子市除田7号	7	熟年男性2、壮年女性1 青年2、幼年1、その他1		I
米子市宮畠	3	壮年男性1、壮年女性1 その他1		III
安来市原島2号	4+	壮年男性1、熟年女性1、 壮年1、幼年1		II・III
安来市高広A-3号	3	壮年-熟年男性1、壮年女性1、少年1		I
(参考) 三刀原町東下谷6号	5	壮年男性2、壮年女性1 青年女性1、幼年1	原位置を保つ。	I・II

時期は各横穴出土須恵器を大塔山上岩編年に対応させた。

播表4 米子・安来地域横穴墓出土人骨

(3) 鉄刀1、刀子、鉄釘の他、切子玉2が出土。耳環は3対検出された。

(4) 大塚山3期

○C-II小支群 (C-3・4号横穴墓) : 構成基數2基

(1) 急峻な斜面に立地するため、他支群の横穴墓よりも前部が短いが加工は整美である。C-3号は「便化家形」を呈する平入、C-4号は断面上角形の妻入である。C-4号横穴墓は後背周溝(埴丘?)を有する。

(2) C-4号には須恵器屍床がみられた。

(3) C-3号は玉類を多く出土。C-4号は鉄刀1、鉄鎌10に若干の丸玉、ガラス小玉、土玉を出土している。共に耳環1対を出土した。

(4) 大塚山1・2期に2基が併行している。

○C-III小支群 (C-5・6・7・8号横穴墓) : 構成基數4基

(1) 4基は規模、構造とも類似性が強いが、C-5・6号は平入、C-7・8号は妻入の差がある。また、加工の粗緻からいえば、C-6・8号は規模も大きく、加工も丁寧であるが、C-5・7号はやや粗雑な印象を与える。

(2) C-5・6号は盜掘にあり、C-7号も落盤していたため、不確実なことが多いが、C-8号には須恵器屍床がみられた。

(3) C-5号は盜掘が著しく、刀子、鉄鎌の残片のみ出土。C-6号は鉄刀1、鉄鎌8、刀子、耳環1対、C-7号は副葬品が豊富で鉄刀1、鉄鎌10、刀子、玉類、耳環2対が出土した。C-8号は意外に副葬品が少なく、鉄鎌16、刀子、玉型の耳環1対である。

(4) 大塚山1～3期まで幅があるが、ほとんど2期に併行する。

3. 造構の特徴と内部施設

造構 各小支群を構成する横穴墓を比較すると、それらが均質的でないことは明らかであり、造構の規模、立地、後背埴丘の有無、内部施設、副葬品の差は頗るに表われている。B小支群を例にとれば、B-1号横穴墓はB-1号横穴墓より、規模も大きく、標高も高く、後背埴丘を有している。後述する副葬品における武器と玉類の所有形態にも明らかな差異がみとめられ、B-2号横穴墓の方が優位を占めるといえよう。C-II小支群のC-4号横穴墓(優位)、C-3号横穴墓の関係も同様である。C-III小支群は、横穴墓そのものの崩落や、盜掘により不明瞭な点が多いが、C-5・8号横穴墓は規模も大きく、加工も整美なのに対して、C-5・7号横穴墓はやや劣勢な印象を受ける。この場合、C-5～8号横穴墓が単一の小支群とすれば、大塚山横穴墓群で最も優勢な集団となるが、B・C-II小支群の2基1小支群をとる構成からみて、C-III小支群がC-5・6号横穴墓とC-7・8号横穴墓の2小支群を内在する可能性も考えられよう。

内部施設 横穴墓の内部施設としては、石棺、有縁屍床、須恵器屍床、磯床等があるが、大塚山横穴墓群では石棺、有縁屍床はみられない。須恵器屍床はC-I小支群を除く各小支群に少なくとも1基はみられるが、磯床、棺台、木棺等の施設を含めると各横穴墓が何らかの施設を有している。これとは別に、高広晋-1号横穴墓の組合せ家形石棺、陰田11号横穴墓の組合せ箱式石棺等、横穴墓群の中で1～2基特別な施設を有する例はあるが、これを除けば内部施設による小支群間の差異は不明瞭である。また、須恵器屍床に用いられる甕は大小のセットをなすことが指摘されている(陰田1984)、大甕、小甕のセットがみられたのはA-2号横穴墓のみであり、他は小甕の代りに横瓶が用いられたり、初めから中甕、小甕のセットであった。

実 器	横穴墓名	車 惠 着								土器類		装身具類				鉄器・鉄製品類								
		杯	杯	高 脚	有 付 耳 瓶	平 底 瓶	攢 瓶	橫 瓶	回頭 強 化	小 型 強 化	便	勾 玉	管 玉	切 子 玉	丸 玉	小 玉	土 玉	耳 環	直 刀	鐵 刀	刀 子	針	その他	
		蓋	身	杯																				
A	A-2号横穴墓	9	13	1	1		1				1	1							1	18	3	2	1	
B	B-1号横穴墓			3	1			2	1		1	1			5	1	9	1	59+	1対		1		
B	B-2号横穴墓	8	10	3	2			1			2	1								1対	8	1		
C	C-1号横穴墓	2	2	1			2										2			3対	1	2	28	1
C	C-3号横穴墓	3	3					1			1				7	1	1	1+		1対				
I	C-4号横穴墓	3	11	2				2						1	1				7+	8+	1対	1	10	1
C	C-5号横穴墓																				3	2		
I	C-6号横穴墓	3	7		鉢形	1			1			1									1対	1	8	2
I	C-7号横穴墓	11	16		1			1	鉢形	1						2	1	2		2対	1	10	3	2
III	C-8号横穴墓	2	4	5	2	1		1	鉢形	1	2									1対		16	3	

括弧、横線の一部には他個体より出土した破片が複合したものがある。その場合、上位的に出土した横穴に数字を記入し、他に番号を記した。また表中の個体数で、別個体と考えられるものは破片でも1個体と数えた。但し盤片は除く。

摺表5 横穴墓出土遺物一覧表

4. 副葬品の所有関係

出土遺物には、鉄刀、鉄鎌、刀子の鉄製武器・利刃類、玉・耳環の装身具、須恵器・土師器の供獻用土器類の他に木棺に使用された鉄釘がみられた。このうち、武器・利刃類、装身具類は特定の被葬者個人の所有にかかるものと考えられる。そこで、横穴墓ごとの所有関係を検討すると武器類と玉類の間に明瞭な差異が窺われる。(摺表5)

耳環 まず、耳環はA-2号横穴墓を除く8基の横穴墓から22個発見され、すべて対になる11対の耳環である。注目されるのは耳環を所有する8基の横穴墓のうち6基が1対の耳環しか持たないことであり、例外としては、C-1号横穴墓(3対)、C-7号横穴墓(2対)が認められる。この基本的に1基1対の耳環出土は、各横穴墓に副葬品を伴い埋葬される人物、おそらく横穴墓築造の契機となる1人の人物の存在を示すものであろう。

鉄製武器 次に鉄器、鉄製品では刀子はC-3号横穴墓以外のすべての横穴墓にみられるため除外して、鉄刀、鉄鎌の武器類をみると、鉄刀は6基に各1振が副葬されており、C-1号横穴墓を除けば鉄鎌と共に

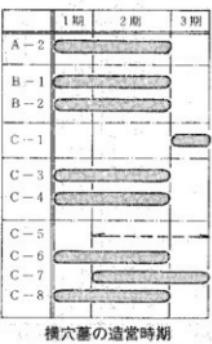
玉類 武器としてのセットをなしている。鉄鎌のみで鉄刀を有さないのはC-8号横穴墓のみである。玉類をみると、5基から玉類の出土が認められるが、C-4号横穴墓はガラス小玉と土玉のみの出土であり、その希少性からも勾玉等の玉類とは差異が認められる。勾玉等の精製な玉類を有するのは、B-1・C-3・C-7号横穴墓であり、C-1号横穴墓(切小玉2)、C-4号横穴墓(丸玉1)に若干認められる。これを、先の武器所有形態と比較すると、B小支群中のB-1号横穴墓(玉類)、B-2号横穴墓(武器類)、C-II小支群中のC-3号横穴墓(玉類)、C-4号横穴墓(武器類)の相対的関係が成立する。この他に、A-2・C-6・C-8号横穴墓は鉄刀、鉄鎌の武器類は有するが玉類は持たない。例外としては、C-1・C-7号横穴墓が玉類と武器類の両方を所有しているが、これは、耳環の数と比較してみれば、他の横穴墓と異なり、副葬品を有するような人物が複数埋葬されていることを示していると推定される。

それでは、この副葬品所有形態の差異は何に起因するものであろうか。出土人骨と対比すると、A-2号横穴墓の鉄刀は2号人骨(壮年男性)、C-1号横穴墓の鉄刀は2号人骨(壮年男性)に伴う

ものと考えられ、鉄刀あるいは武器類が被葬者の中心的存在の男性に所属することは明らかであるが、玉類の帰属は明瞭でなく、他例をみれば性別の差に求めることは難しい。

5. 時期

大塔山横穴墓群の築造時期は、C-1・7号横穴墓を除くと大塔山土器編年1期の築造であり、2期が主体として追葬が行なわれている。また、C-7号横穴墓はやや遅れて2期に築造されており、3期まで追葬がみられるが、主体となるのはやはり2期である。したがって、大塔山横穴墓群の少くとも8基はほぼ同時に築造され、併行して追葬行為が行なわれていることとなる。しかも、B-C-I-II-C-IIIの各小支群は各横穴墓が時間差をもって、累代的に形成されたものではなく、同時併行的に営まれた横穴墓のグループであることを示している。これに対してC-1号横穴墓は他の横穴墓がほとんど最終埋葬を終えた3期のごく短期間に営まれており、大塔山横穴墓群では特例的な存在である。



6. 小結

以上の考察をまとめると

- (1) 横穴墓の被葬者は血縁の家族と推定される。
- (2) 2~4基の横穴墓が同期的な併行関係にあり、小支群を形成している。
- (3) 小支群内では、横穴墓間に立地、規模、墳丘、副葬品等の優劣が認められ、中核的横穴墓が存在する。
- (4) 被葬者には、武器を所有する中心的人物(男性)と、玉類を所有する人物の存在が推定される。

被葬者 これらより、大塔山の横穴墓はやや範囲の広い血縁の家族の墓であり、複数集まって小支群を形成している。この血縁的家族の複合体が、従来群集墳の被葬者として推定されている「家父長家族」(近藤1952)あるいは「家父長制の世帯共同体」と呼ばれるものに相当しよう。家父長制の世帯共同体が運営する小支群中の横穴墓は、築造時期に若干の差があるにしても、追葬行為を含めての使用期間は併行しており、一世代一墓的に累代形成された結果ではない。おそらく、武器あるいは玉類を所有する中心的被葬者=家長の死を契機に横穴墓が造営され、この家長の親縁者が次々と追葬されたものと考えられる。A-2号・C-8号横穴墓にみられる2次の再埋葬は、家長の死を契機とする横穴墓造営に先立つ死亡者の仮埋葬と推定される。また、断片的な資料であるが、C-1号横穴墓にみられる1対の男・女人骨を夫婦と認め、この段階以降の1構穴墓における被葬者の減少を一般的なものとするならば、家父長制家族内での単婚小家族化(作田1979)が進んだ可能性も指摘できよう。

小支群 小支群を構成する横穴墓には、明らかな優劣が認められる。田嶋明人氏は時期的な併行関係から支群中の中核的横穴墓を「のちに郷戸主として現われるような家父長家族の家長と嫡系親族」、その他の横穴墓を「のちに房戸として現われるような小家族」と推定した(田島1971)。但し、横穴墓間の優劣は中核的な横穴墓が他を圧するといった隔絶した差異ではなく、各横穴墓がある程度の独立性を有するものであることは造営主体相互の関係を考えるのに注目されよう。

横穴墓群 横穴墓群を構成する小支群と小支群の間には、被葬者の多寡を除けば、隔差は認め難く、墳丘を有する横穴墓を含むB-C-I-II小支群とそれを含まないC-III小支群にも質的な差異はみられない。ただし、大塔山や東宗像横穴墓群ではみられなかったが、陰山横穴墓群のような比較的大きい横穴墓群や安来のような特殊な地域に存在する高広横穴墓群では、内部施設に家形石棺や箱式石棺を備

えたり、装飾付太刀や馬具を副葬する横穴墓が存在している（陰田1984、高広1984）。各小支群の中核的横穴墓の中でも卓越したものであり、家父長層の中に地域首長とはいわないまでもかなり有力な人物の存在が推定できる場合もある。また、大塔山横穴墓群の立地する尾根を降っていった低丘陵上に位置する觀音寺7号墳は切石を用いた横穴式石室を主体部とする一辺12mの方墳であり（近藤1986）、おそらく、時期的に大塔山横穴墓群に併行あるいは後出するものである。こういった、近接する古墳と横穴墓の関係は従来、あまり注目されていないが、地域の社会構成や、各々の造営者層を考える場合、検討していかなければならない課題であろう。

（中原 齊）

- 註1、ここでいう小支群とは位置関係等の現象として把握しうる横穴墓の最小のまとまりであり、通常「単位群」とも呼ばれる（田嶋1971）。本節で、これを単位群と呼称しなかったのは、グルーピングに際して第3企画等の細かい分析を加えることができず、もっぱら地理的見地のみによつたためである。
- 註2、古代社会における婚姻関係は別居婚が少くないことが、古代陪葬の検討からいわれている。また、最近、中津市上ノ原横穴墓群の調査では、出土人骨の分析から中心被葬者（男性）の妻に相当する女性が同墓内に埋葬されていないのに対して、血縁關係が想定される姉妹の埋葬が認められることから、妻は姉妹ではなく実家の墓に入るという想定を行なっている（田中他1985）。しかしながら、明らかに夫婦と考えられる2組の男女の埋葬が認められる三刀呪町東下谷6号横穴墓のような例もあり、婚姻形態、埋葬規範は地域、時期による差異が著しいようである（東下谷1984）。
- 註3、出土人骨と玉類を対応させることのできる例は少ないが、東下谷6号横穴墓の青年人骨（壮年男性）が耳環、勾玉、切子玉、管状玉をもつことが確認されている（東下谷1984）。これに対して、確実に女性に伴う例は管見の及ぶ限りではみられない。
- 註4、所謂後期群集墳は単位群において、一世代・横と成層的に成立したものとする考え方（広瀬1978）、と使用時期（追跡も含め）の併行関係を重視する考え方（田嶋1971）がある。これは、各々が想定する追基主体の差異となつて表れており、前者はのちに郷井となるような有力扶帶共同体、後者はのちに戸となるような家父長的な小家族も含めて想定している。

むすびにかえて

大塔山に発掘調査の鍼が振りおろされたのは、大山がいまだ冬の名残りを留める四月の初めであった。梅雨の長雨、真夏の旱天の下、年若い調査員たちと作業員のおじさん、おばさんが一体となっての発掘調査は、しばしば相遇した困難な事態を乗り越えて、10月初旬、秋も深まりゆく候に現地調査を無事終えることができた。スコップを洗い、長靴の泥を落した今、まがりなりにも仕事をやり終えた安堵もそこそこに、眼前で消えゆく遺跡を見守りながら、遅れがちな筆を進めてきた。間もなく山は切り開かれ、行き交う車の群れは、「ここに古代人の営みがあったことなど、一顧だにすることなく通り過ぎてゆくことだろう。」筋の道路と引き換えに消えてゆく遺跡のことを誰か語り離いでくれるのだろうか？

多くの方々の努力により、漸くここに調査報告書を上梓する運びとなった。せめて、調査成果のまとめは満足のいくものとしたかったが、時間と力量の不足はいかんともしがたく、詳細な事実記載に重点を置き、報告の責を果すよう努めたつもりである。大塔山横穴墓群の評価は、後日に委ねることとなるが、本書に収めた内容が横穴墓研究の一助となれば幸いである。最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり指導、協力あるいは助言をいただいた各位に深甚の謝意を表します。

（1987.2.7）

参考文献

(論文) (報告書中の論文に準ずる考察を含む)

- 赤崎 敏男 1979 「初期横穴墓の展開」『竹並遺跡』竹並遺跡調査会
足立 克己・丹羽野 裕 1984 『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会
角田 徳幸 1985 「法勝寺川流域および日野川下流域における横六式石室とその系譜」『島根考古学会誌』第2集
門脇 俊彦 1980 「山陰地方横穴墓序説一特に四辻式系横穴墓の分布と時期についてー」『古文化談義』第7集
近藤 信雄 1986 「観音寺7号墳について」『水曜考古』第8号
近藤 義郎 1952 『佐良山古墳群の研究』
佐田 康茂 1979 「横穴墓の被葬者」『竹並遺跡』竹並遺跡調査会
白石太一郎 1966 「畿内の大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』42・43合併号
出嶋 明人 1971 「単位群の構造と変遷」『法皇山横穴古墳群』加賀市教育委員会
田中 彩太 1978 「古墳時代本棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第98号
田中 義昭 1983 「石西地方における横穴墓の形態と時期」『山陰文化研究紀要』第23号
田中 良之・土肥 直美・船越 公威・永井 昌文 1985 「上ノ原横穴墓被葬者の親族関係」『上ノ原遺跡群』IV 大分県
教育委員会
西嶋 定正 1961 「古墳と大和政權」『岡山史学』
広瀬 和雄 1978 「群集墳論序説」『古代研究』第15号
山本 清 1960 「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』
山本 清 1962 「横穴の型式と時期について」『島根大学論集(人文科学)』第11号

(報告書)

- 『朝田墳墓群』・木崎遺跡 1976 山口県教育委員会
『...』 IV・糸米遺跡 1979
『...』 V 1982
『安部谷古墳』 1968 『島根県文化財調査報告書』第5集
『陰田』 1984 米子市教育委員会
『陰田61号墳発掘調査報告書』 1985 米子市教育委員会
『上ノ原遺跡群 I ~ V』 1982~1986 大分県教育委員会
『内ノ倉山横穴群発掘調査報告書』 1986 日南町教育委員会
『上塗治横穴群第22支群』 1986 『島根県埋蔵文化財調査報告書』第13集 島根県教育委員会
『孤谷横穴群』 1977 『島根県埋蔵文化財調査報告書』第17集 島根県教育委員会
『孤塚古墳群 II』 1978 大田町教育委員会
『久戸古墳群』 1979 宗像町(現宗像市)教育委員会
『黒鳥2号横穴発掘調査報告書』 1983 安来市教育委員会
『十王免横穴群発掘調査報告書』 1968 『菅原考古』第10号 島根大学考古学研究会
『高広遺跡発掘調査報告書』 1984 島根県教育委員会
『竹並遺跡』 1979 竹並遺跡調査会
『長尾古墳』 1981 『島根県埋蔵文化財調査報告書』第19集 島根県教育委員会
『中竹矢遺跡』 1983 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 島根県教育委員会
『東宗像遺跡』 1985 鳥取県教育文化財團
『松田谷横穴群』 1982 島根県教育委員会
『湯舟坂2号墳』 1983 久美浜町教育委員会